
『螢火』

藤平重工

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『螢火』

【Nコード】

N5535E

【作者名】

藤平重工

【あらすじ】

新米陰陽師の荒川貴弘アラカワタカヒロとその式神、御珠上命ミタマノカミミコト【愛称美々子】は、突然発生した強力な「気」（一種のエネルギーのようなもの）の発生源を調査するため、とある山村を訪れる。彼はその村唯一の神社で巫女をしている一ノ瀬砌イチノセミギリに出会い、話を聞こうとするが、彼女は何も知らなかった。仕方なく、後日神主と会う約束をし、神社を後にする。貴弘と美々子が神社の石段を降りる途中で、上ってくる女子生徒とすれ違う。彼女は謎の笑みを残して去っていった・・・

第1章（前書き）

自作同人ゲーム用に書き下ろしたシナリオです。

制作ブログ↓<http://synthesize2.blog4.fc2.com/>

初めての長編作品なので未熟な点多々ありますが、よろしくお願いします。

第1章

螢火^{ほたるび}．．．．．。

墨を何十にも塗り重ねたかのような漆黒の中、それは儚きものが放つ灯火。

——それは、儚きものが生きた、証。

赤く燃えるような森を、ひたすらに歩く。

風が吹くたびに雨のように降ってくる枯葉は、いまでは視界を閉ざす、邪魔なものでしかなかった。

そして、行く手を阻む、障害物でしかない。

——見たこともない村へ向けて今、俺はひたすらに歩を進めている。

ろくに舗装された道がないその場所へは、山を三つほど迂回するがいくらかマシな山道か、それよりも距離的には短いが道とすら呼べないような獣道しかない。

迷っている暇なんてない。

色を失った枯れ草を押し分けながら、ひたすら前に進む。

後ろに背負っているものは自分の食料と、着替えと、そして一匹の猫。

「．．．．．」

俺は立ち止まり、ふと思った。

後ろの方角にいる、今までに出会った人たちのこと。

そして、

この燃える山を越えたところにいる、まだ見たことのない、人々のことを。

——俺は、彼らに一体何が出来るのだろうか。

力のない、こんな俺は。

「やべえ・・・疲れた」

俺の目的地到着時、その第一声だ。

陰陽師として、このぐらいでバテてしまうのはどうかと思うが、最近はずっかりサボっていたし、陰陽師の修行は精神面の強化が中心ってことで。

「わあ、まるで貴信おじい様みたいですねっ」
ぽかっ

「いたいっ」

「誰がジジイだ、誰が」

さつきから隣でうるさいこいつは正式な名を「御珠上^{みたまのかみ} 命^{みこと}」、通称を「美々子^{みみこ}」という。通称といっても、俺が勝手に呼んでいるだけだが。

古き名門である荒川家にその創成期から仕える使い魔で、かれこれ千年以上生きている凄いヤツなのだが、物心つく前からいつもそばにいた俺にとってはどの辺がすごいのかいまいちピンと来ない。それは・・・

「貴之さん。お腹空きましたねえ」

なぜかすでに俺が背負ってきたリュックをあさりながら聞く美々子。

「いや、別に」

「それでは、お昼の残りのおにぎりを食べましょうっ」

この、「天然」（としか言いようのない性格）である。なんなのだ、この小学生のような行動パターンは。

これでこいつを偉大だ、と言う奴がいたら、俺はそいつとは仲良くなれそうにない。

「貴之さんは梅干がいいですか？」

「・・・」

美々子の言葉を見無視し、俺は村を見渡す。

目線を水平に動かしても、見えるのは比較的背丈の低い山々のみ。

そんな山々に囲まれたその村は、まさに陸の孤島と言った感じだ。といつても、もちろん電気はきている。

・・・たぶん。

小さく見える、道行く人々は皆それぞれ手に何か持ち、水田の稲穂の間を歩いている。鋤や鍬などの農具が中心だが、なかには学生鞆を持った高校生らしき人影も見える。

下校途中のようだ。日はもう傾き始めていた。

(・・・急いだほうがよさそうだな)

俺は宿を探す前に、一番強く気を感じる場所に行ってみることにする。

「ほら、行くぞ」

俺は荷物を背負い立ち上がり、歩き始めた。

「あーん、待つてくださいよう」

美々子はお握りを一生懸命頬張りながら、あわててついてくる。

——あの具はオカカか・・・

——その「気」を初めて感じたのは、半月ほど前だった。

普通の学生と同じように学校生活をエンジョイしていた俺に、それは、突然やってきた。

さわやかな秋風をかき消す、ありえない量の、膨大な気。それは一瞬で消えたが、とりあえず、未熟者の俺にだってはつきりわかるほど、それはヤバかった。

ここで一つ訂正させていただくが、一般常識として「陰陽師は滅びた」とされているが、それは正確に言えば間違いである。

今も、古より伝えられし秘伝の技を守り続ける一族、そして全国の一族達によって作られた「組織」が、ごくごく少数ながら、存在する。

そして一応、陰陽師の末裔である俺も、一応そこに所属している。ほとんど強制的にだが。

表向きには存在していないことになっているが、その影響力は意外と大きい。まだまだ科学の力だけではどうしようもないことが、多々あると言っことだろう。

そこでなんとなく胸騒ぎを覚えた俺は、あの強力な「気」について「組織」に問い合わせてみた。

「組織」でも、もちろんその「気」は観測されていた。が、あまりに強力すぎて発信源が正確に特定できないと言う。

そこで俺に指令が下った。

「一刻も早く、「気」の正確な発信源を突き止めて来い」

つまり俺は、人手不足から、「気」の発信源調査隊に組み込まれたのだ。

——正直、まだまだ「見習い」である俺を組み込むなんて、信じられなかった。

それほどまでに「組織」が人手不足であり、今回の発信源の特定が急を要する、と言うことだが。

そして3日前、ついにその莫大な「気」を発したらしき一帯を特定したのだが、それでも山脈まるまる収まりそうな広大さだった。

そりゃまあ、日本列島よりは狭いけどさ。

・・・話の次元が違うな。

長い階段を上り、開けた視界にあるのは、この村唯一の神社だ。

神社への参拝道の両脇には紅葉に燃えるもみじが植えられている。

しかし、夕暮れ時の神社で、真っ赤なもみじは明らかに鮮烈すぎた。対照的に、色彩のない空間は、わびさびすら感じさせる。

そこには、ただ単に虚無だけが満ちている。

人影はない。しかし、そこには明らかに「異界のもの」がいた痕跡があった。

真っ黒い、「気」が漂っていた。

（やっぱりここなのか・・・？それにしても弱い気もするけど）

「美々子、お前はと思う？」

隣の猫に問いかける。

「じゃあ」

「………」

とりあえず辺りを探してみる。しかし、何もない。

（おかしいな……。もう少し探してみるか）

本堂近くの枯れ草の茂みも調べてみる。

ガサガサ、ガサガサ

「何か、お探ですか？」

「……」

突然の声に、思わず振り向く。

「こんにちは」

落葉が舞い散る石畳に、誰がいる。

純白の衣と真紅の袴を纏った、巫女さんだ。ここで働いているのだろうか。

（もしかして、俺はものすごく恥ずかしいところを見られたのでは）
「………」

言葉が出ない……

そんな、あからさまに怪しい俺の様子を気にすることなく、やわらかい笑顔を浮かべる。

「お困りでしたら、お手伝い致しますが」

巫女さんは片手になにやら紙袋を持ち立ち尽くしているが、特に警戒する様子もない。

すると、足元の美々子に気づいた。

「わあ、かわいい猫ちゃんですね。名前はなんていうんですか？」

巫女さんは少ししゃがみ、美々子を抱き上げる。そして、上目遣いでこちらを見た。

「ご用件でしたら、私が伺いますか？」

「いえ、出直します……。行くぞ、美々子」

巫女さんに背を向け、帰ることにする。

「にゃ？にゃーにゃー！」

美々子は置いていかれまい、と必死に手足をじたばたさせていた。

「・・・あの、もしよろしかったら」

背後からかけられる巫女さんの声。その声に俺は、はた、と立ち止まり、振り向いた。

巫女さんは少し迷ってから、

「一緒に、草餅を頂きませんか？」

彼女は片手に持っていた紙袋を少し掲げて、微笑んだ。

「・・・はあ」

と窓外の出来事に、面喰らってしまう

（草餅は、たしかにうまいと思うが・・・なぜ？まさか、俺が実は甘いものに目がないと見抜かれているのか？）

「にゃあ」

どこかで猫の肯定する鳴き声が聞こえたようだが、とりあえず無視する。

俺が無言でいると、巫女さんは、俺が迷惑に感じていると思ったのか、慌てて言う。

「あ、いえ、お忙しいのでしたら引き止めませんが、ただ・・・」

（・・・ただ？）

「なんだか、疲れている様子でしたので・・・、それにもみじが、いまいちばんの見ごろなんですよ」

巫女さんは、にっこり笑い、辺りのもみじに目を移す。

俺も思わず周りを見渡す。確かに、もみじがきれいだ。

それを肯定と取ったのか、

「では、お茶の準備をしますね」

言うと、彼女は少し小走りで本堂に向かう。どうやら完全に、断るチャンスを逃してしまったようだ。

・・・しかたがない。

とりあえず、俺も本堂に向かう。

その神社はなかなか歴史を感じさせる、由緒ある神社のようだった。造りも本格的だし。

長い年月をかけて作られた迫力が、そこはあった。

「・・・？」

縁側あたりで立って待っていると、いやに石碑の類が目につくことに気付いた。そんなに多くの神を祭っているのだろうか。

「お待たせしました」

しばらくして、巫女さんが盆に草餅と緑茶を乗せてやってきた。

「どうぞ、こちらに座ってください」

と、自分の隣を示す。俺はそこに腰掛け、

「はい、どうぞ」と差し出された緑茶を、右手に受け取る。

「あ、そういえば」唐突に、彼女は気付く。

「聞くの忘れていました。草餅は好きですか？」彼女はちょっと不安そうに聞く。

（なんか、いまさらだよなあ）

「はあ、まあ・・・」俺は心中では苦笑しつつ、答える。

すると、彼女の顔は屈託のない笑顔に変わる。

「そうですね、良かったです。だったらきつと、この草餅は喜んで頂けると思いますよ。トヨおばあさんの草餅は、この村で一番おいしいと評判なんですっ」

彼女は、ニコニコ、と草餅を薦めてくる。

（そうなのか。それはうまそうだな）

さっそく一つ食べてみる。それは、一言ではとても言い表せないが、あえて言うなら・・・

（・・・うまい）

それは文句なしに、うまかった。

「どうです？お口に合いました？」

俺は、なんの躊躇いもなく答えた。

「うまい」

それを聞くと、彼女は微笑む。そして正面に視線を移し、目を細めた。

「・・・もみじがきれいです」

「そうだな」

俺は草餅を食べながら、相槌を打つ。しかし、ほんとにうまいな。目に鮮やかなもみじも、食欲をそそる。

「草餅もおいしいです」

「そうだな」まったく、その通りだと思う。こんなにうまい草餅は初めてだ。

「あなたは、ただの旅人ではありませんね」

「そうだな」まったく、その通りだ。

「……」

突然訪れる、無言。

（ん？いまなんて言った？）

思わず彼女を見ると、彼女はいつの間にかこちらに向き直っていた。その目は、今までの和やかなものとは180度違う、見る者の正体を探る、鋭い瞳だった。

「わたしの思い違いだったらごめんなさい」彼女は、真剣な口調で言った。

「でも、なんとなくですが、感じるんです。あなたは、なにか特殊な力をお持ちでないですか？」

「……」俺は考える。

これは、やはりこの巫女さんが霊的な家系の人間である、ということなのだろうか。

もしかしてバイトなのでは、と侮っていた自分を叱る。

俺は、思い切って聞いてみることにした。陰陽師・荒川あらかわ 貴弘たかひろとして。

「遅れて申し訳ない、私は陰陽師の荒川貴弘という者です。実はこの地に強い『気』を感じたので、調査していました。なにか心当たりがあれば教えて欲しいのですが……」

「はあ……「気」ですか……？」

突然の変わり様に、巫女さんは戸惑ったようだが、真剣なのは通じたようだ。

「ええ、この10年で最大級の、邪悪な気です」俺は仕事口調で説明する。

「??」

今度は巫女さんが困惑する。わけがわからないようだ。

（ん？おかしいな）

この神社の神主の家系ならば、「気」がどんなものであるか、ぐらいは知っているはず・・・

（やっぱり、ただのバイトかなにかだったのか？）

結構恥ずかしい。この話は、一般人にとっては、気違いの戯言にしか聞こえないだろう。

・・・しかし、神主本人ならば話を理解してくれるはず。

俺は最期の希望を賭け、聞いてみる。

「えっと・・・この神社の神主さんはどこに？」

「ああ、おじいちゃんなら今出かけています」

（直系かよ!!）

あまりに何も知らないのです、この神社にあまり関係のない、一般の学生のバイトさんかと思っていた俺は、つい突っ込んでしまう。

俺は溜息をついて、いつもの口調に戻して、聞いた。

「神主さんはいつ戻る？」

「さあ・・・、少なくとも今日は帰って来ません」

急に口調を変えたのを気にせず、巫女さんは答える。

「うちのおじいちゃん、いま隣村に行っていて、二三日は戻って来れないんです」

このところいつもこんな感じで・・・巫女さんは申し訳なさそうに言った。

（これは、出直すしかなさそうだ）

残りの草餅を口に放り込みながら、たちあがる。

「また明日伺います」

「え、そうですか？すいません、お役に立てなくて・・・」
俺はその場を後にする。

しばらく、彼女の釈然としない視線を背中に感じながら――

鳥居をぬけ、神社の石段降りる途中、下から上ってくる人影があった。

見たところ、女学生のようなだ。高校生か？

活発な感じの、ごくごく普通の女子高生と言った感じだ。

女子高生が、今の時間、神社になんの用なのだろう？

タツタツ、と駆け足気味に石段を登ってきた女子高生が、すれ違わずれ違いざま、彼女がチラリ、とこちらを見てきた。

不思議がって観察していた俺と、思わず目が合ってしまう。

彼女は驚き、思わず上（神社の方）を見、そしてもう一度俺を見、そしてなにを思ったのか、

にやり、と笑った。

それはまさに、何か楽しいことを考え付いた、子供のような笑いだっただ。

彼女はそのまま駆け足で石段を登っていく。

「??？」

ワケがわからん。

とりあえず、石段を降りることにする。

「にゃー」

美々子が、一度鳴いた。

日もほとんど沈み、辺りが急に色を失いだした頃。

しばらくはこの村で調査が必要と判断した俺は、「組織」にその旨を報告することにした。同時に宿の手配などを要請したのだが、驚くことにすぐに民宿の住所が返ってきた。今夜は野宿を覚悟していたので、これは正直うれしい。

さっそくその民宿に行ってみる。

地元の住民に尋ねつつたどり着いた、それはごく普通の民家を改修した、まさに民宿だった。結構古い。

ガラガラ、と扉を開け、中に入る。

「すいませーん。誰かいませんかー？」

「にゃー」

「はーい」奥から声。ほどなく、声の主が現れた。

まだまだ若い、美人若女将といった感じの女性だった。

「ようこそいらっしやいました。私、この女将をしております、
タカハシノリコ高瀬典子と申します。」「組織」から話は伺っております。・・・さ、
どうぞこちらへ」

一礼し立ち上がると、廊下を先導して歩き始めた。

俺もあとに続く。

「あの、「組織」とはどういう関係なんですか？」

こういうふうに任務で外泊するときなどは、「組織」に何らかの係わり合いのある施設に宿泊するのが普通だった。

「いえ、以前悪性変異した鬼に襲われたときに、組織の方に助けていただきました。それ以降はこうして組織の支援者の一員として、家族総出で援助させていただいています」

「家族総出で・・・ですか？」

「ええ、家族全員で襲われたものですから・・・、と言っても、今は私以外の全員がこの村の外に出払っています。・・・こちらの部屋をお使いください」

通された部屋は、なかなかの絶景だった。

「いいんですか？こんないい部屋にもらっちゃって」

「もちろんですよ。組織には命を助けてもらったのですから、これぐらい当然です。それに最近はお客さんもあまりいないので、存分に羽根を伸ばしてもらっていいですよ」

俺は荷物を降ろし、もう一度窓の外を見る。

「食事は原則として、朝食が朝八時、夕食が午後七時となっています。でも、任務の最中などでその時間に合わせられないときや、昼食が必要なときには、お申し付けください。なにか持ち運びできるものをお作りします」

典子さんは、はきはき、と必要事項を説明する。

「お風呂は一階の大浴場をお使いください。朝五時から夜十二時まで、ご利用になれます」

「わかりました」

「では、ごゆるりとおくつろぎください」

典子さんは一礼すると、去っていった。

「・・・なあ、美々子」

「なんでしょう。貴弘さん」

典子さんの気配が完全に消えたのを確認して、猫から人間の姿に戻る美々子。

「さっきの神社、どう思う」

ちよこん、と美々子は俺の隣に座った。

「えーと、もみじがきれいでした」

ぽかっ

「いたつ。冗談ですよ」

「ほう、じゃあ真面目に、あの神社、どう思った」

「草餅がおいしそ・・・」

右の拳を少し上に上げる。

「・・・やはり、今回の事件に、なんらかの関わりがあると思います」

「お前もそう思うか」

俺は右手をさげる。その様子にほっ、と胸を撫で下ろす美々子。

「疲れたことだし、夜に備えて、風呂に入って一眠りしよう。美々子はどうする？」

人間の姿とはいえ、頭にネコミミ、お尻にシツポが付いている美々子は、人に姿を見られるわけにはいかない。

「わたしは夕方のうちに村を一周してきます。情報収集も兼ねて」

再び猫の姿に戻る美々子。

「わかった。気をつけてな」

「はい。まかせてください」

美々子は夕焼けに燃える人里へと、駆け出して行った。

その夜、体力が回復した俺と、情報収集を終えた美々子は、今後の方針について話し合っていた。

「・・・最近頻繁に起こる怪事件？」

思わず問い返す俺。

「はい、なんでも怪物に襲われたとか」

それにせんべいをかじりながら答える美々子。

「怪物だと？どんな」

「角の生えた鬼のようなヤツや、骸骨のようなヤツなど、複数種いるようです」

そこまではつきりわかっているなら、決定的だな。

「やはり、「黄泉の門」が開きかけていると見て、間違いなさそうだな」

はい、と頷く美々子。・・・ついでに次のせんべいに手を伸ばす。

「しかも、いままでは真夜中にしか出現していなかったのが、最近になるにつれて、出現時間に幅が出てきています」

出現時間に幅が出ていると言うことは、敵の活動時間が日増しに増えている、ということだ。

「この問題は現在進行形、ということか。まずいな・・・、この地の「気」が本部の言っていた「邪悪な気」だと言えそうか？」

美々子は、少し小首をかしげてから言う。

「そうだ、というにはまだ情報が足りないと思います。でも、この地の「気」が強大で、しかも現在悪性変異していることは、間違いないですし・・・」

チラリ、とこちらのようすを伺う美々子。

む、それは・・・

「この怪事件は、俺達で解決しようっていつのか？」
コクリ。

ま、そんな予感はしていたが。

「・・・そうだな、この地の「気」が「邪悪な気」かもしれないワケだし」

今のところそんなに危険なレベルではないようだし、じっちゃんへの連絡はもう少し調査を進めてからでいいだろう。

パアと、表情を明るくする美々子。

「そ、それでは・・・」

「ああ、さっそく明日からこの村の調査を・・・」

「わあ、カマドウマさんだ——っ」

すかさず俺の背後に飛び込む美々子。

「・・・はじめる・・・か・・・」

「見てください、見てください貴弘さんっ!!」

なにが嬉しいのか、はしゃぐ美々子。

「カマドウマですよ、カマドウマっ！こんな寒いところにもいるんですねえ」

「・・・そ、そりゃカマドウマぐらい、いるんじゃないか
ものの見事に、話の腰を折られてしまった。

美々子はカマドウマをつつく。

「このあいだ、荒川家の屋敷にいたやつの親戚ですかねえ」

「さあなあ・・・って、いたのかウチに!？」

「いい子ですなえ、よしよし」

無視ですかっ。

「カマドウマって、なに食べるんでしょうね。魚肉ソーセージは食べますかね」

いや、ソーセージは無理だろ。口の構造的に。

「ほーらほら、わたし秘蔵の本マグロ100%使用の、スペシャルな猫缶ですよー。」

荷物から取り出した猫缶を、カマドウマに差し出す美々子。

その荷物、俺が運んだんですけど。

「さようならー」

しばらくして、美々子はカマドウマと明日も会う約束をし、別れた。カマドウマと会話が出来たのか、こいつは。

「さて、なにか話の途中だったような……。はて、なんでしたっけ？」

首を傾げる美々子。

俺はガクリ、と首をうなだれてしまう。

「お、お前と言うヤツは……」

「？」

まあ、ここはとつと先に進もう。大人の余裕というやつだ。

「で、なんでしたっけ？」

「だから、この地の「気」について。明日村の調査を——」

「すいません、その話、長くなりますか」

くつ、こ、こいつは……

いや、いやここは我慢だ。俺は大人だ。俺は余裕なんだ！

「まあ、そこそこ」

「じゃ、お茶入れますね。貴弘さんはやっぱり緑茶ですか？」

美々子は、さつそく腰を浮きかける。

「——いや、やっぱりそんなでもない。だからお茶はそのあとだ」

俺は即刻、襟首を掴んで引きずり戻し、美々子の野望を阻止する。

「なんだ、そうなんですか……」

美々子は心底残念そうだ。

そんなに淹れたかったのだろうか。

結局、明日の調査では、霊的な力の強そうなところを中心に、行うことにした。

たとえば、昔からの森や山。これらはやはり、ダントツに多く神や精霊の類が住んでいる。

あとは、古い建物。年月を経れば、たいていのものには霊的な力が宿るものだ。また、人外のものも寄り付きやすい。たとえば、廃病院や学校、旧家など。

そして、神社などの思想や宗教関連の施設。

あの神社にも、また明日行く必要があるだろう。

それにしても、あそこで感じた「気」はなんだったのだろう。確かに「悪性」の「気」ではあったが、「邪悪な気」にしては弱すぎる気もする。

そもそも、「悪性の気」というものはそんなに珍しいものでもない人間だって、「不」の感情を持つ人は、少なからず「悪性の気」を出しているし、光があるところに影があるように、この「悪性の気」で動いている裏社会があるのも事実だ。

今回のことの発端は、その「悪性の気」の馬鹿でかいヤツが観測された、ということなのだ。

そう、今の「善性」がベースの世界を、「悪性」ベースに作り変えてしまえるぐらいに、それは強力だった。

それはすでに「悪性」どころではなく、「邪悪」、「極悪」といった、「悪意」の塊でしかない。

新米の俺までが駆り出されたのは、その辺が理由だ。

「組織」も世間体を気にする余裕をなくすほど、今回の「邪悪な気」はどデカイのだ。

・・・正直、俺みたいな半人前が一人や二人いたところで、歯が立つ相手ではない。

まあ、見た感じこの村には「邪悪な気」の『元』はいないようだ。起きている怪事件も俺の対処できる範囲みたいだし、問題はあるまい。

なにか問題があれば、連絡用の式神を飛ばせばいいだけの話だ。

「邪悪な気」のせいで、式神の実体化がしにくくなっているので、出来ればやらないに越したことはないのだが。

とにかく、しばらくこの村の調査をすればわかることだ。

俺は明日に備えて、早めに寝ることにした。

「いつてらっしゃいませ」

次の日、俺は美々子と若女将に見送られ、宿を出発した。

美々子は精一杯背伸びして、手を振っている。

完全に人間の姿にならない美々子は、当然留守番だ。もちろん、村の探索はしてもらうが。

そして俺は、また別の目的地を目指していた。

話は今日の早朝まで遡る・・・

まだ陽も出ていない深夜。山歩きやその他もろもろの疲れのせいで、熟睡していた俺は、突然の圧迫感に覚醒を余儀なくされた。

仕方なく目を開けると、そこには馬鹿でかい狒犬がいた。

多少の「悪性の気」の干渉などものともしない、通信・伝達用としては最強の式神だ。

「・・・おい。ふざけるなよ」

しかし、寝起きが最悪な俺は、そんなことまったく気にしない。問題なのは、こいつが俺の安眠を妨害したこと、その一点のみ。

「・・・で、なんの用だ」

そいつは、人間の声で答える。かなり年配の男の声だ。

「相変わらずのようだな。貴弘」

しかも、その声には聞き覚えがあった。

最強の式神を使い、しかも知り合いとなれば、該当する人物は一人しかない。

「貴信ジジイか。俺の寝起きが最悪なのを承知で、よくもやってくれたな」

たとえ相手が俺の祖父で、しかも「組織」の会長だとしても、今の俺には関係ない。

問題なのは、こいつが俺の安眠を妨害したこと、その一点のみ。

「まあまあ、気持ちよく寝ていたのを邪魔したのは、申し訳ない。じゃが、これは急を要する事態なのだ」

「ほう。俺の安眠より重要、と？」

「もちろんだ」

断言する祖父。

「・・・んなもの、あるかぁー！！！！」

今の俺にとつては、安眠より重要なものなど存在しなかった。

「命！起きろ！」

近くに転がっていた命を揺さぶる。

しかし、命はピクリ、とも反応しない。

まるで屍のようだ。・・・くーくー、と寝息が聞こえるが。

「くそっ！我が名、貴弘の名において律するっ！御珠上 命！今すぐヤツを千切りにしろお！！」

強制的な力によって、無理やり起き上がらせられる命。

「・・・うにゃ？」

「いかん！！「縛」！！」

しかし、祖父の呪術によって、その場でぴたりと動きを止められてしまう。

「にゃ??？」

かかった！！それは図だジジイ！！

「臨兵闘・・・！」

俺は呪符による攻撃を行うために、詠唱をはじめめる。

「まさか、ここでやりあうつもりか？！阿呆が！！「隔絶」！！」

祖父の声を合図に、部屋の床、壁、屋根が次々と色を失っていく。

「隔絶」とは、陰陽道の呪術のひとつである。

付近一帯を切り取り、別次元に置き換える呪術で、これが効いている間に起こった事象を、俺達の住む世界にまったく反映させないためのものだ。

この呪術のおかげで、ある程度派手なドンパチをやっても、世間に気付かれないというわけだ。

この呪術にはある程度の熟練が必要なのだが、祖父は一瞬にして発動してしまった。

修行が足りないなどと言っている俺とは、まるで次元が違う。

「発動！！その身を燃やし尽くせ！！」

式神に向けた呪符から赤い炎が燃え上がる。

「・・・ふん、『縛』」

祖父の、一言。

耳鳴りが——した気がした。

瞬間、俺の身体は炎もろとも身動きが取れなくなる。

・・・んな、馬鹿な。

「『解』、と。頭は冷えたか？」

呪符から出ていた炎が消え、完全に無力化されるころには、俺は完全に醒めていた。

「あ、ああ。それよりもどうしたんだ、こんな時間に。いくらなんでも非常識だろ」

俺は乱れた布団を直し、転がっていた美々子をちゃんと布団に寝かしながら、聞いた。

「非常識なのは承知しておる。じゃが、お前が今日からしばらくこの村を調査すると聞いてな。幹部会の検討の結果、明日から調査しやすいように、お前には特別な処置がされることになった」

・・・特別な処置？

「お前、明日から村の高校へ行け」

「・・・はい？」

あまりに予想外の言葉に、反応が一瞬遅れてしまう。

「出続きなどはもう済んでいる。なあに、『組織』の力を使えばこのくらい、屁でもないわ」

かっかっか、と愉快そうに笑う式神。

「登校は朝八時半。学校までは歩きになるだろうから、早めに出た方がいいだろう。場所はこの民宿の若女将に聞くといい」

美人だしのお、と一言付け加える祖父。

「・・・」

いくらなんでも急すぎる。さては・・・

「会長特権使ったな、じつちゃん」

「・・・さてと」

立ち去ろうとする式神。

「ま、待てよ。話はまだ・・・」

式神は姿勢を低くして、

「かつつか、生きて帰って来るのじゃぞ！」

疾風の如く、駆け抜けていった。

というわけで、俺は村はずれの高校に通うことになった。

制服はというと、なぜかすでに典子さんが用意してくれていた。

「おはようございます。はい、制服です」

「・・・」

——いくらなんでも、準備良すぎないか？

村の学校は、小学校と中学校が一緒の校舎で、なぜか高校の校舎と一緒に敷地内にあった。しかもこれで近隣唯一の学校だという。

受験落ちたらどうするんだろう・・・などという馬鹿なことを考えているのは、きっと俺だけだ

「・・・というわけで、今日からみんなと一緒に勉強することになった荒川 貴弘君だ」

担任教師の簡単な説明が終わり、俺の名前が呼ばれた。

「・・・よろしく」

俺は軽く頭を下げた。

教室を見渡してみる。

かなり年季が入った校舎だ。しかも教室にいる生徒は15人前後。もちろん、知り合いなどない。

「・・・いや、いた。」

俺が教室に入ったときから、こっちを見ている一人の女子。

昨日の巫女さんだった。

彼女はなにか、探るような視線をこちらに向けている。

「では、荒川君は席についてくれ。別にどこでも構わないが・・・。
じゃあ、そうだな・・・、窓際の、あの席にでも着いてくれ」

指示された席は、なんと件の巫女さんの隣だった。

・・・念のために言っておくが、もちろん彼女が今着ているのは制服である。

「これから、よろしくおねがいします」

俺が席に着こうとすると、彼女が声をかけてきた。

「こちらこそ、よろしく」

とりあえず、無難に挨拶を返しておく。

「私は一ノ瀬いちのせといいます。もう知っていると思いますが、村はずれにある神社の神主の孫娘です」

俺は素直に「珍しい名前だな」と思った。

「ではテキストを開いて」

黒板では教師の板書が始まっていた。チョークの削れる音が、教室に響く。

「ねえ、テキストの何ページ開けばいいか、教えてくれない？」

「86ページです」

なんだか彼女の態度が昨日と違い、素っ気無い。

・・・俺、何かしでかしたか？

黒板を見つめながら、昨日出会ったときのことを思い出してみる。
すると、またこちらを見つめる視線を見つけた。

昨日神社の帰りにすれ違った、あの女生徒だ。

「はじめまして、荒川君！私は有坂ありさか 花梨かりん、昨日神社ですれ違ったの、やっぱり荒川君だよね？」

休み時間になった途端、女生徒が話しかけてきた。

「ああ、そうだけど」

「やっぱり！じゃあ引越し早々、砌を口説き落としたわけね。やるう！」

「な、」

「いや、別にそういうわけじゃ・・・」

俺はもちろん、一ノ瀬まで驚く。

「別に隠さなくてもいいんだよ？ 砌可愛いし。それにあの巫女装束・・・たまらず勢いで、って言うのもわかるよ」
「たまらず勢いでってな・・・」

「残念ながら、違う」

「ホントにホント？」

当たり前だ。

「・・・・・・・・」

「なんだ、ホントにそういうわけじゃないのか」
「本当に残念そうだ。」

「あ、あたりまえでしょう！」

顔を真っ赤にして言い返す一ノ瀬。

すると、花梨はチラリ、と砌を見て、ふーん、と意味ありげに微笑し、

「ねえ、今日のお昼一緒に食べない？」

そう、切り出した。

俺と一ノ瀬と花梨は、屋上で一緒に弁当を食べている。

ちなみに俺達一年の教室は一階、この屋上は三階の上。しかも、今は秋の中ごろ、これからさらに寒くなる時期だ。事実寒い。

そんな屋上には、もちろん人影は俺達以外いない。僅かに生えている草も、これからの冬の到来に向け、静かに色を吐き出していた。

その隅に、俺達は三人並んで座っている。

まず右端に俺こと荒川貴弘、その横に花梨、そして花梨を挟んで向こう側に一ノ瀬。

三人は全員弁当を持参していた。昨日のうちに典子さんに弁当を作ってくれるよう、頼んでおいたのだ。

まさか学校の校舎で食べることになるうとは、思っていなかったが、『久々の自信作ですので、きつとおいしいですよ』と太鼓判を押し

ていただけあつて、美味い。

しかし、その場の雰囲気ので、せつかくの美味い弁当もなんとなく味がしない。

その原因は一ノ瀬にあつた。

「ねえ、荒川君は、今はこの村に住んでいるんでしょう？ここに来る前はどこにいたの？」

「東京。まあ郊外だけど」

「へえ東京かあ、いいなあ。ねえ砌？」

「じー」

「・・・」

な、なんかずつとこつちを見ているのですが。ホントなにでかしました？俺。

「・・・ねえ？砌？」

「え？なに？」

ハッ、と花梨に向き直る一ノ瀬。

「・・・もういいよ」

あきらめの溜息をつく花梨。

「ごめん、ちよつと考え事していただけなの」

「・・・」

花梨は不満そうに顔を背けている。

「ねえ花梨、許して・・・、ね？この通り」

頭を下げる一ノ瀬。

「っ・・・あははは」

すると、突然花梨が笑い出した。

「ははは・・・、そんなんで怒るわけないじゃん。砌はホントいじりがあるよ」

「も、もう！なによそれ」

ぷう、とむくれる一ノ瀬。あはは、と腹を抱えて笑う花梨。

本当に仲がいいのだな、と思った。

さっきまでのどこか緊張感に溢れた雰囲気が、どこかへ行ってしまう

った。

よし、これで美味しい弁当が美味しく食べられるってもんだ。さて、さっそく取っておいた卵焼きを・・・

ひよい。ぱくつ。

「・・・・・・・・」

「もぐもぐ。ねえ、可愛い女の子が二人可愛くじゃれ合っている隣で、貴之君はひとり黙々とお食事ですか」

お、俺の卵焼きが・・・

「まあいいわ。卵焼き、おいしかったから許してあげる。それじゃ、邪魔な私は退散するとしますか」

弁当箱を片付け立ち上がる花梨。

「え、どこ行くの？花梨」

「うん、ちよつとね、ヤボ用。・・・私がない隙に、二人で存分に青春してね？」

「ま、また花梨は！」

一瞬で顔を真っ赤にして抗議する一ノ瀬。

花梨は、ウィンクしながら投げキッスする。

「あはは、冗談ー。じゃ、また後でねー」

さっさと階段に消える花梨。

「・・・・・・・・」

ああ、せつかくどこかに行っていた緊張感みなぎる雰囲気が・・・戻ってくる・・・

「じーーーー」

「おい、いいかげん・・・」

「あなたは、本当は何者なんですか」

唐突に口を開く一ノ瀬。

「え？」

「昨日の意味深な言葉といい、昨日までは何も聞いていなかったのに、今日になって突然転校生が来るなんて・・・不自然だと思いませんか？」

まあ・・・確かに、不自然だ。

「どうなんですか？」

しかし、ここで真実を話しても、信じてもらえないだろう。それに関係のない一般人を巻き込みたくない。

「・・・すまない。君達は知らないほうがいいことなんだ」

「な、なんですかそれ。答えになってませんよ」

一ノ瀬の視線がさらに険しくなる。

しかし、これは命に関わることだ。絶対に口に出すわけには行かない。

「すまない」

仕方なく、俺は頭を下げる。

「・・・」

「でも、君達に危害を与えるような者じゃない。それだけは信じてくれ」

頼む、とさらに深く頭を下げる。

「・・・わかりました。信じてあげます」

頭を上げると、彼女が微笑んでいた。

「その代わり、もし嘘だったらひどいですよ？おじいちゃんに頼んで、一ノ瀬家に代々伝わる一撃必殺の呪いを百回プレゼントしちゃいます」

「・・・百回死ねってことですか。」

「あなたは東京から転校してきた、私達の新しいクラスメート。それ以外の何者でもない」

彼女は立ち上がりフェンスのそばに行くと、一度眼下に見える町並みを見、振り返る。

「・・・それでいいですか」

「ああ、すまない。君達には決して迷惑はかけない」

「・・・そうだ。それでいい。」

俺もすっかりと彼女を見る。

「じゃあ、この話は終わりです」

彼女は瞳を閉じた。そして、再び開いたときには、その瞳に疑惑の色は浮かんでいなかった。

「はやくお弁当食べちゃってください。お昼休み終わっちゃいますよ?」

見ると、彼女の弁当箱はいつのまにかカラフルなバンダナに包まれ、彼女の手の中であつた。

・・・いつの間に食べ終わつたんだ?

「それでは」

俺は彼女の弁当箱に注がれた視線を一ノ瀬に向ける。

「疑いが晴れたところで、改めて自己紹介します」

彼女はそびえる山々を背後にし、やわらかく吹く風を受けつつ、口を開く。

「私は一ノ瀬^{いちのせみきり}砌。これからよろしくおねがいします」

「俺は荒川^{あらかわ} 貴弘^{たかひろ}。こちらこそよろしく」

俺たちは今、やっと自己紹介できた。
そんな気がした。

「ところで今日、君の・・・」

「クラスメートなんですから『一ノ瀬』でいいですよ。正直、貴方が『君』なんて、合っていません」

彼女はクスクスと笑う。

「わかった。じゃあ、一ノ瀬」

「はい、やっぱりその方が合っていますよ。・・・それでは先に教室に戻りますね」

言うと、彼女はくるり、とこちらに背を向け、階段のほうに歩いて行ってしまった。

「・・・・・・・・」

『今日の放課後、また一ノ瀬神社に行ってもいいか』と聞くつもりだったのだが・・・

まあ、多分今日も神社にいるだろうし、今日は神主も帰ってきているだろう。

キーン、コーン、カーン、コーン――
そのとき、午後の始業を告げる鐘が屋上に鳴り響いた。

午後の授業は特に何もなく終わった。

ただ、休み時間毎によほど転校生が珍しいのか、多くのクラスメイトが俺の机を包囲したことを除いては。

「ねえねえ、前の学校ってどんな感じだったの？」

「東京って美味しいものいっぱいあるんだろ？」

「身長は？」

「体重は？」

「スリーサイズは？」

俺は一度だけ答える。

「すまん。スリーサイズは測ったことないから知らん」

そのせいで昼休みの後、一ノ瀬や花梨と話すことが出来なかった。

これから神社にいけば一ノ瀬とは会えるだろうが……

放課後、クラスメートの包囲をかくぐって学校を出たときには、

すでに一ノ瀬と花梨は下校した後だった。

仕方がないので俺も下校することにする。

校門には、ほかの下校する生徒がたくさんいた。その内訳は小学生から高校生までいろいろだ。まあ、同じ敷地内なのだから、当たり前なのだが。

唐突に、美々子の好物のマタタビを切らしているのを思い出す。確か、民宿に向かう道の途中に商店街があったはずだ。ついでに買っていくことにしよう。

俺の足は自然と速まっていた。

村の商店街はこの村のメインストリートの場所だけあって、ほかの場所よりは建物も多く、活気があった。ただ、それはこの村では、という意味であり、東京の街中などとは比べ物にならないよう

な人数だ。

「まさかマタタビが八百屋で売っているとは」

そのなかを俺は軽い驚きを感じつつ、歩いていた。小さな商店街なので、マタタビが売っているか少し心配だったのだが、なんとか見つけることが出来た。むしろ時間がかかったのが、マタタビを売っている店を探すことだった。

こんな辺境の村には、デパートはもとよりコンビニやスーパーの類はあるはずも無い。そのことに気付いたのは、商店街に着いてしまっただけだった。

といっても、せっかく寄ったのにそのまま帰るのはどうかと思っただけ、マタタビを切らしているのは事実なので、とりあえず探してみることにした。

そして探すにあたって、マタタビは人間の食べ物ではないという知識から、八百屋や魚屋といった食べ物扱う店は最優先で探す対象から除外してしまったのだ。

結果、商店街を2、3周してしまった。すでに俺は商店街マスターと言っても過言ではあるまい。

——この商店街のことなら俺にまかせてくれ——

・・・なんか違う気がするが。

そんなくだらないことを考えていると、向こうから見覚えのある人影が自転車をこいでくるのが見えた。商店街の入り口くぐった彼女は「花梨じゃないか」

今日からクラスメートになった有坂 花梨だった。

「あ、貴弘くん」

俺に気付くと、花梨は自転車を降りこちらへ歩いてきた。

「どうしたの？こんなところで」

自転車を押しながら、彼女は聞いた。

「いや、ちょっとマタタビを買いに」

「え、マタタビ？」

不思議そうに問う花梨。

「そんなもの買ってどうするの？・・・まさか——食べるとか！？」

花梨は大きさに驚いてみせる。

「食うかつ！・・・俺、猫飼ってるんだよ」

「あはは、冗談だよ、冗談。へえ、きみがペットを飼っているなんてね」

花梨は珍しいものを見るような目で見てきた。

俺はその仕草に軽い反発を覚える。

「な、なんだよ、俺がペット飼ってちゃ悪いか」

「いや悪いってわけじゃなくて、・・・ちよつと意外だったただだよ」

彼女はそういうと、なぜか顔をそむけてしまった。

「花梨こそどうしたんだ？村の外から来たみたいだけど」

「え？」突然話を振られて驚く花梨。

「いや、この道村を貫いている一本道だろ？学校は反対側だし、だとしたらやつぱり村の外に行っていたのかなって」

「・・・うん、まあ・・・」

突然歯切れが悪くなる花梨。

「悪い、聞いちゃいけないことだったか」

謝る俺。考えれば、いくら俺が商店街を彷徨っていたとはいえ、まだ学校が終わってからそんなに時間は経っていない。つまり、かなり急いで村の外まで自転車を飛ばし、帰ってきたことになる。

「う、ううん。そういうわけじゃなくて。ただ、ちよつと風邪をひいちゃって、それで医者に行っていただけだよ」

俺はそのときになって、はじめて自転車のなかに、薬のはいった小さな紙袋があることに気付く。

「だったら、わざわざ自分で行かないで、家族の人に任せて家で寝ていたほうが良かったんじゃないか？風邪、悪化しちゃうだろ？」
「とはいったものの、見た限りでは、花梨は健康そのものに見える。」

「ありがとう。でもいいんだよ、これから家に帰って休めば直るよ」

そう、弱々しく微笑んだ。

「そうか、悪い、引き止めちゃって。つらいなら家まで送ろうか？」

「大丈夫だよ、これくらい。それじゃあ、また明日ね」

花梨は自転車に乗り込むと、商店街の出口へとこいでいく。

俺はしばらく小さくなっていくその後ろ姿を見送った。

「…どうしてもっと低い場所に造らなかつたんだ」

俺は思わず溜息をついてしまう。一ノ瀬神社の石段は、俺を圧倒するかのごとく立ちはだかつていた。

「にゃー」

突然聞こえる猫の鳴き声。

「なんだ、美々子か」

「にゃー」

足元を見ると、いつの間にいたのか、猫姿の美々子がいた。

「村の調査は順調か？」

「にゃお」

・・・どうやら順調らしい。

とりあえず、いまはこのそびえたつ石段を攻略することに専念する
としよう。

「はあ、はあ、はあ・・・」

や、やっと終わった・・・

乱れた呼吸を整えるため、石段に腰をおろす。

「にゃお」

肩で息をしている俺を、まだまだ余裕な様子の美々子がせかす。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。少し休んでから、な？」

「にゃ？にゃーにゃー！」

「は？なんでそんなに早く行きたがってるんだよ？神社は逃げないぞ？」

「にゃにゃーにゃおにゃお！」

「ん？追いつかれる？何に？」

「あのー、もしかして、その猫さんと話してたりするんですか？」
・・・は？」

俺はおそろおそろ顔を上げる。

「こんにちは、荒川君。やっぱり今日も来たんですね」

そこには、すでに巫女装束に身を包んだ一ノ瀬がいた。

「昨日の話の流れからして、今日も来るんじゃないかって思ってた」

彼女も石段を登ってきたはずなのに、ひとつも息が乱れていない。
なんということだ。

「しかも、今日はなんとおじいちゃんが帰って来ているんですよ。
ですから、そんな所に座ってないで、本堂の方に行きましょう」

「にゃー、にゃお」

その言葉に美々子が過剰反応する。

「ちよつと待て。もう少し・・・」

「にゃっ、にゃー」

美々子は、早く行きたくてウズウズしているようだ。

「ふふ、そうですね。では、荒川君は残して先に行きましょうか」

「いや美々子は俺といっしょに・・・」

「にゃー」

「では荒川君、私達は先に本堂の方に行っていますね」

一ノ瀬の後を、うれしそうについていく美々子。

う、裏切られた・・・

しばらくして本堂に行くと、ちよつど一ノ瀬がお茶の準備を完了したところだった。

「あ、ちよつどよかった。お茶が入りましたよ」

湯飲みに緑茶を注ぐ一ノ瀬。

「にゃー」

行儀良く座る美々子の前には、皿に入ったミルクが置いてあった。

美々子のヤツ、最初からこれが目的だったな・・・。

「さ、どうぞ」

差し出された緑茶からは、暖かそうな湯気が立ち上っていた。

「そして今日のお茶請けはなんと・・・」

一ノ瀬が美々子に微笑みながら、紙袋をガサゴソやっている。

美々子は期待に満ちた目でそれを見つめている。目がキラキラしているぞ、おい。

「じゃーん、イチゴ大福ですっ」

勢い良くイチゴ大福を取り出す一ノ瀬。

「わーいつ、大好物ですう」

思わぬ大物に、狂喜乱舞する美々子。

・・・ん？ちよつと待て。いま喋らなかったか？

「あ、美々子お前！」

見ると、美々子は人間形態にトランスフォームしていた。よほど嬉しかったらしい。

「はい？」

「はいじゃない！早く戻れ！」

俺は慌てて一ノ瀬の視界から、美々子を隠そうとする。

「あ。」

やっと自分の状態に気付いたららしい美々子。

「いいですよ、そのままです」

いや、いいわけないだろ。

「・・・ってなんでお前が一番落ち着いてるんだ？一ノ瀬」

呑気に緑茶なんぞを飲んでる場合ではないと思うのですがっ。

「昨日初めて会ったときから、その猫さんから普通ではありえない量の『気』を感じていました。ただの猫さんではないと思っていたのですが、まさか人だったとは思いませんでした」

そんなことをサラリという一ノ瀬。

「ははは、砌は昔からこういうのには人一倍敏感だったからね」

「あ、おじいちゃん」

突然一ノ瀬の背後から現れる男性。

唐突な急展開に、俺はもうワケがわからない。今までどこに居ただおじいちゃん。ってか一ノ瀬って靈感あったのか？

そんな俺の様子を見てか、男性の方から先に自己紹介した。

「砌の祖父の一ノ瀬^{いちのせ} 教文^{たかふみ}です。孫が仲良くしてもらっているようだね」

はつきりとした口調で、一ノ瀬の祖父は言った。高校生の祖父とは思えないほど、若々しい。しかし、その貫禄はまさしく、長いときを生きてきた者だけが持てるものだった。

「あ、私は荒川 貴弘です。今日は神主殿に伺いたいことがあり、参上しました。」

その貫禄に押され、思わず俺はかしこまってしまふ。

「荒川君、そんなにかしこまらなくてもいいんですよ？」

「そうだよ、荒川君。肩の力を抜いて、仲良くこうじゃないか」

「そうですよ、貴弘さん。まずは落ち着いて、イチゴ大福を頂きましょう」

早速大福に手を伸ばそうとする美々子。

・・・お前は和みすぎだ。

とにかく、聞いておくべきことは聞いておかなくては。

「あの、実は伺いたいことというのは・・・」

「わかってる。大体見当は付いてるよ。・・・ここじゃなんだし、奥に行こう。来なさい」

そう言って奥に行く一ノ瀬の祖父。俺は後についていこうと立ち上がる。

「貴弘さん、私はここで待っていますねっ」
すかさず美々子は言った。

「昨日はわざわざ来てもらったのに、すまなかったね」
一ノ瀬の祖父、この神社の神主は言った。

俺が通されたのは、どうやら客間のようなだった。ある程度装飾品が

置かれているものの、普段はあまり使っていない感じだ。

「さ、そこに座って」

俺は進められた座布団に正座で座る。

「もうそろそろ、君のような者がくるだろうとは思っていた」

どう切り出そうか迷っていると、神主の方から口を開いた。

「実はすでに、しばらく前から、この村から信じられない量の「気」が流れ出していることは観測されていてね。昨日まで出かけていたのも、近辺の神主達と対策を協議するためだ」

教文さんはあぐらの上で手を組んだ。

「しかし、今回の「気」はケタ違いの量だ。いままで我々だけで解決できた事態とは、根本から違うものだ」

思わず、教文さんの口からため息が漏れる。

「その強力かつ膨大な「気」の氾濫に、昨日の深夜、自然界の精霊たちは完全にこの地の守護を諦め、外界から結界を張り巡らしてしまった。もはや、外との連絡は取れん」

教文さんの言葉は、なんとというか、俺の想像を遥かに超えていた。

「な、そんな、いつの間に……」

俺、昨日その外界からきたばかりですよ？

「驚くのも無理はない。君たち外界の者達は、まさか、事態がこんなに深刻だとは気付いていなかったんだろう？それは私達がなんとか「気」を封じ込めようと、必死に打ち消してきたからだ」

静かに言葉を続ける教文さん。

「だが、それももう叶わない。神主の一人が、膨大な「気」の量に耐え切れず、ついに自我崩壊を起こしてしまったんだ」

教文さんは、組んでいた手をぐっと握る。

「もう、もう私達では手に負えない。君はこの地の「気」を調べに来たんだろう？私達にできることならなんでもしよう。だから、頼む。私達を、私達の村を、この脅威から救ってはもらえないだろうか」
教文さんは頭を下げた。

このとき、俺は正直、ビビっていた。こんな話聞いてねえよ。

今までの事態とは根本から違う？神主の一人が脳みそやられた？精霊が結界張ったから外と連絡が取れない？

この俺にどうしろと。このろくに修行も積んでない新米陰陽師に、一体なにができると？

「まだ「気」自体は善にも悪にも変質していない。今のうちならなんとかなる。だが、時間があるわけではない。事実、精霊達が結界の外へ避難してしまったせいで、一部が既に悪性化してしまったている。村を襲っている怪物は全てこの「悪性化した気」によるものだろう」

神主は顔をうつむかせながら、言った。

「これ以上罪のない人々を犠牲にしてはいけない。今はまだ力の弱い高齢者ばかり襲っているが、じきに力が付いてくればもっと若い世代を狙ってくるのは明らかだ」

もつと若い世代？それって・・・

「そうだ。私の孫、砌をはじめとした、これからの時代を生きっていく者達だ。彼らが犠牲になることだけは、なんとしても阻止しなければならぬ」

一ノ瀬や、花梨や、みんなが・・・

「外界と連絡が取れない私達には、もう君しかないない。頼む」

そうか、そうだよな。外と連絡が取れないんじゃない、

この事態に対して、俺達はもう、他人じゃない。傍観してられる第三者じゃなくて、

当事者なんだ。

「・・・」

そしたら、もう選択肢なんてないんじゃないのか？

「・・・わかりました」

教文さん、一ノ瀬の祖父は、顔を上げた。

俺は、自分の実力をわきまえない、大馬鹿者なのかも知れない。

だけど、俺は言った。言ってしまった。

「私ができることを、全力でやってみましょう。・・・村を救える

かは別として」

一ノ瀬の祖父は、静かに頷いた。

「もちろん、それでいい。ありがとう」

「それでは、貴方が知っていることを、全部教えていただけますか」
「ああ、もちろん。・・・私が知っていることは、さつき君に言ったことと、あと、この「気」は10年前に封印された「邪悪な存在」と呼ばれる強大な鬼と、その鬼が黄泉の世界から来るときに開いた「黄泉の門」が関係しているらしいということだけだ」

——現世と死後の世界をつなぐ唯一の異次元空間連結現象、「黄泉の門」が関係していたか・・・。

「その「邪悪なる存在」と「黄泉の門」が関係している、となぜ分かるのです？」

「「気」の色だ。君も知っているだろう？「気」にはそれを放つ大元がどういったもので、その色が違うものだということを」

そう言えば前にじっちゃんがそんなこと言っていたな、と今更思い出す。

「今溢れているのは、本当に微かだが「黄泉の気」の色をしている。溢れた瞬間などはまさに「黄泉の気」そのものだ。それから私達の浄化のかいあってか、ここまで薄れてきたのだが・・・」

「一部は浄化しきれず、怪物化してしまった、と？」

教文さんは頷いた。

「そうだ。そして昨日隣村の神主が倒れてしまい、浄化が止まってしまった。「黄泉の門」が完全に開き、「邪悪なる存在」が顕現するのは、時間の問題かもしれない」

「・・・」

確かにそうだ、だが・・・

「「気」の発生源がわかるなら、対処法があるはずですよ。それをしてないということは、つまり発生源がどこにあるのかわからない、ということですよ？」

「そうだ」

「でも、その発生源は10年前に封印されたものなのかもしれないのでしょぅ？だったら・・・」

「もちろん、それが特定できれば、こんなに苦労せずに済むだろう」
教文さんは、少し目を見開いた。

「・・・動いているらしいのだよ。それは」

その声と事実、俺は言い知れぬ恐怖を感じた。

「もちろん真つ先に10年前に封印が行われた場所を調査したよ。
だが、なにもなかった。あのどす黒く濁った、まるでドブ川のような「気」が、封印されているとはいえ、まったく感じられないはずはない」

「・・・では、どうやって探せ、と？」

教文さんは辛そうにうつむき、

「すまない、それは私達にもわからない。だが、必ず何か方法があるはずだ。」

「・・・ごめんじゅちゃん、俺、生きて帰れないかもしれない。」

とにかく、今は犠牲を増やさないために、夜に出現すると言う化け物を倒しつつ、移動しているという「黄泉の門」を探すしかない、という結論に至った。

時間が遅くなったこともあり、今日のところはもう民宿へ引き上げることにする。

教文さんと共に縁側へ戻ると、まだ一ノ瀬と美々子がお茶をしていた。

「ずいぶんと話し込んでいたんですね」

「ああ、荒川君とはなんとも話が合ってね、こんな時間まで話し込んでしまった。すまないね」

一ノ瀬の前では明るく振舞おうとする教文さんは、そのときは「祖父」としての顔をしていた。

「いえ、僕もおもしろかったです。また来てもいいですか？」

教文さんは大きく微笑んで、

「もちろんだとも、砌とももお待ちしているよ」

「はい、もちろんです。それにしても、良かったです。おじいちゃんと荒川君がなかよくなつて」

一ノ瀬は嬉しそうに微笑んだ。

「・・・っ、・・・！」

口いっぱい大福を詰め込んだ美々子が、なにか言おうとしているが、何を言っているのかまったくわからない。つていうかずっと食っていたのか、こいつ。

民宿「花月」に戻った俺達は、典子さんが用意してくれた夕食を食べ、早速作戦会議をはじめた。

「さて、今日の調査はどうだった？美々子」

俺は、ちゃっかり夕飯まで食べて、満足そうに転がっている美々子に話しかける。

「はい？なんですか、貴弘さん」

「なんですかじゃないだろ。今日の昼間、ちゃんと調査したんだろ？どうだったんだ」

えい、と気合を入れて姿勢を正す美々子。

「はい、ちゃんとしましたよ。えーと、まずはですね・・・」

おもむろに模造紙を広げ始める美々子。

「可愛いおばあちゃんがいるお宅の・・・」

「・・・」

ぽかっ

「いたーいっ」

頭を抱える美々子。

「お前はどのくらい俺をおちよくれば気が済むんだ？」

「えーん、冗談ですよ・・・今日の調査では、主に最近村人を襲っているという怪物について調べました」

美々子は手帳を取り出し、報告を始める。

「と言っても、村人の話を盗み聞きするしかないので、あまり詳しいことはわからないのですが・・・」

「いい、続ける」

俺は先を促す。

「はい、怪物は主に日が沈んだあと、夜の間に集中して出現しているようです。襲うのは体力のない、一人暮らしの高齢者ばかり。出現場所には共通点は見出せません」

「すると・・・、奴らと接触するためには夜にひたすら村を巡回するしかないってことか。うーん、なんかいい考えないか？」

すると美々子は腕を組み、

「えーと、やはりいままで怪物が出現した場所を重点的に回ったほうが良いと思います」

それ、今俺が言ったこととあまり変わらないよね？

「まあ、そうだよな。それしかないよな・・・」

なんとも受け身な感じがしてしょうがないが・・・

ただでさえ時間がないというのに。自分の無力を思い知るばかりだ。
「あ、」

美々子が何かに気付いた。窓際に何か見つけたようだ。

俺もそこを注視する。そこにはなんと、昨日のカマドウマがいた。

「わあ、お待ちしていましたよ。ささ、こちらへどうぞ」

俺の了解もとらずに、カマドウマを室内に招き入れる美々子。

「まさか、今日も来てくれるなんて思っていましたでした」

ああ、まさかお前が本当にカマドウマと会話していた、なんて思ってもみなかったよ。

早速カマドウマと会話し始めた美々子をそのままにし、俺はベランダへと出た。この時期だと夜風は身にこたえるが、今は浴びたい気分だったのだ。

冬空に、星達がひしめいていた。むしろウンザリしてくる程の星の光が、俺を向かえた。

俺は眼下に視線を移す。さすが辺境の山村だけあって、すでに村に

は明かりの一つも見えない。

この闇に紛れて、異形の化け物達が、村人を襲っているのだ。

・・・明日から、忙しくなりそうだ。

ただ村人を襲う化け物達を倒しても、真の解決にはならない。

この事件の発端。この膨大な量の『気』、その発生源である『黄泉

の門』を抑えなければ、怪物たちはまた出現し、人を襲うだろう。

そして、「邪悪なる存在」の出現だけは防がなければならない。

「今の俺にできることは・・・」

「・・・」

俺は明日に備えて早めに寝ることにする。

「やば、遅刻だ遅刻！」

次の朝、俺は飯を掻っ込みながら制服に着替えるという、人類史上でもトップクラスに入るであろう荒業に挑戦していた。

「ふわぁ、むにゃ。それはいくら何でも無理だと思いますよ、貴弘さん」

まだ寝ぼけ眼の美々子と言う。

「うるさい！ほっとけ」

結局のところ、昨日の夜は考えることが多すぎて、ろくに眠れなかったのだ。

そして現在に至るわけだが・・・

「うああ、じゃあほつときます」

非情にも美々子は、もうわけ分からない状態の俺をそのままにし、また寝た。

やべえ、マジ遅刻だよ。こりぁ・・・

ようやく制服を着、典子さん手作りの弁当受け取って民宿を飛び出したときには、すでに遅刻確定だった。

転校二日目で、いきなり遅刻してしまうなんてことは避けたかった

が、過ぎてしまったことはしょうがない。俺は二時間目の授業からでることにした。

すでに日差しがまぶしい。

・・・ま、いつか。

休み時間を見計らい教室に入る。むやみに目立ちたくないの、後ろからコッソリ入ることにする。これなら誰にも気付かれないはずだ。

「あつ！荒川君おはよう！」

早速気付かれる俺。

「どうしたの？もう一時間目終わっちゃったよ？」

机の間を縫ってこちらに来る花梨。

「ちよつと寝坊して、な。起きた時にはもう授業開始15分前だった」

「へえ、きつと昨日の夜、遅くまで起きてたんでしょ」

花梨は興味津々といった感じだ。

「いや、布団に入っただのは早かったぞ。ただ、それから眠れなかったんだ」

「なにに？考え事？」

さらに身を乗り出す花梨。

「まあな」

「え、ほんと？なに考え事してたの？聞かせてよ」

すると、丁度教室の扉が開き、数学教師が入ってきた。

「ほら、先生来たぞ。早く席へ着いた着いた」

「荒川君も、でしょ？お互い様だよ」

そつう言ううと花梨は自分の席へ向かった。俺も席に着く。

「おはようございます。荒川君」

隣の席の一ノ瀬が挨拶する。

「おはよう。次は数学だっけか」

「はい、それにしても転校早々いきなり遅刻なんて、なにかあったんですか？」

いや、俺だつてしたくて遅刻したわけではないし。

でも、なにかあったのかというと、昨日はいろいろありすぎて、まだ何となく信じられない。

もうこの村は陸の孤島となつてしまい、今も強大な脅威に狙われ、希望は俺だけ。いきなりそんなこと言われてすぐに「はいそうですか」と納得できるほど、俺は器用に出来ていない。

・・・これから俺は何をすべきなのだろう。

やはり、当面は守りに徹するしかないだろう。かなり辛いだろうが、今はチャンスをしつと待つしかない。

「あの、荒川君？」

一ノ瀬の呼びかけに、はっと我に返る俺。

「なんか恐い顔してましたけど・・・、本当になにかあったんですか？」

どうやら考え事をしているうちに、殺気立った顔になつてしまつていたらしい。

「すまん、なんでもない。ちょっと考え事をしていただけなんだ」

今はまだ、いや、できればこれからずっと、このことは村人には知らせるべきではない。知つたところで何ができるわけでもないし、むやみに話せばただ混乱させるだけだ。

「えっと、数学か。いまは何をしているんだ？」

露骨に話題を変える俺に、一ノ瀬は少し不満そうな顔をしていたが、これ以上追求しても意味はないと悟つたのか、

「三角関数です」

と応えると、黒板の方に顔を向けてしまった。見ると、その手元にはすでにシャーペンが握られ、黒板の文字を板書し始めていた。

俺も黒板を見る。そこには既にいくつかのグラフが所狭しと描かれていた。

とりあえず俺も教科書ノート筆記用具を取り出し、机の上に並べる。あれは $\sin \theta$ のグラフか・・・

東京の学校ではもう終わってしまったところだ。

ノートに写す気にもなれないので、適当に一問解いてみる。

「あ、楽勝じゃん」

思わず口に出てしまう俺。慌てて両手で口をふさぐ。

しかし、もう手遅れだった。周りを見渡せば、クラス全員＋数学教師がこつちを見ていた。

数学教師が極上の微笑を浮かべた。俺も極上の営業スマイルで対抗だ。

「じゃ荒川、これやれ」

数学教師は問題の一つを俺に割り当てる。

・・・はあ、できれば目立ちたくないになあ。なんでこうなるのかなあ。

俺は黒板の前まで移動し、迷わず答えを書く。

「・・・正解だ」

瞬間、騒然とする教室。拍手まで起こっている。

・・・なんでこうなるのかな。

昼休み、花梨の誘いで俺は再び屋上に来ていた。何のためかと聞かれれば、それは弁当を食べるためだ。

「意外だったよ。荒川君があんなに頭良かったなんて！」

タコさんウイナーをくわえながら、興奮気味に言う花梨。

「そうですね、正直驚きました。これはかなりの戦力になりますね」

卵焼きを箸で掴みながら、一ノ瀬が言う。

「・・・まあ、あれくらいどうでもないだろ」

戦力ってなんだろうと思いつつ、ブロッコリーを食べる俺。

「いや、あれはすごいよ。クラス1位の小宅君が啞然としてたもん折ってしまいそうな勢いで箸を握り締め、力説する花梨。

・・・そ、そうか？そこまで言われると、俺もすごいのかもしれない、と思えてきた。

この場の雰囲気も、一ノ瀬の俺への疑惑が晴れたからか、昨日とは比べ物にならないほど和やかだ。

「勉強で解らないことがあったら、なんでも荒川君に聞こう!」

花梨は高らかに宣言する。今度は春巻きをくわえている。

「解りました。お手柔らかにおねがいます、荒川君」

・・・いや、何を。っていうか勝手に迷惑な宣言をするな。

「ああ、これでやっと中学から三年間続いた「学年最下位」の称号を捨て去ることができるのね!」

夢みたい!というかのように、クルクル回る花梨。

「本当に助かります。ありがとうございます、荒川君」

嬉しそうに言う一ノ瀬。

いや、俺教えるなんて一言も言っていないんですけど?

「それで早速今日やった三角関数なんだけどっ!」

いつの間に接近していたのか、花梨が俺の顔を覗き込んでいた。

「っな、え?三角関数?」

突然の接近に驚く俺。

「あー、三角関数ぐらい大丈夫だろ。要はサインとコサインとタンジエントだろ」

とりあえず適当なことを言っておく。

「じゃあ教えてくれたたていいじゃない。決定!荒川君を私と砌の専任教師に任命します!」

…俺の意思は完全無視ですか。そーですか。

放課後、一度民宿に戻った俺は、今日も一ノ瀬神社に来ていた。

本堂へ続く道に植えられたもみじの、鮮やかな赤が俺を向かえる。

そういえば、一昨日来た時に感じた「気」の残滓ざんしは何だったのだろう。こんな神聖な場所で、不自然な気もする。

「あ、荒川君、こんにち。今日も来たんですね」

声がした方を見ると、一ノ瀬が舞い散るもみじを掃き掃除していた。

——うん。巫女さんだ。

「よう、教文さんはいるか?」

「いえ、今日は出かけてしまって……。でも、今日は別のお客様さ

んが来ているんですよ」

なんだか嬉しそうに話す一ノ瀬。教文さんがいないのなら、俺がここに理由はないのだが……

「では、どうぞこちらへ。荒川君と一緒に花茶するために、今まで待っていたんですよ」

そんなこと言われたら、帰るに帰れなくなってしまうではないか。俺は一ノ瀬の後についていくしかない判断する。

……でもちよつと待て。この村で俺を待つ知り合いといえば……

「おそーい！！なにやってたのよ！」

……やっぱり花梨か。ほとんど予想はついていたよ。

「なによその顔は。悪かったわね私で」

不機嫌そうにぶう、と頬を膨らませる花梨。

「いやいや、そんなことはないぞ」

たぶん。

「本当？信じて良いのかな？」

いまいち信用していない視線を向けている。

「本当だよ。ヤッホーイ！！イヤッター！！花梨と一緒に花茶できるぜ！！サイコー！！」

「うそでしょ」

「スイマセン」

素直に謝っておく。すまん、実はそんなに嬉しくない。

「ふふ、楽しそうだなによりです」

花茶を入りにいっていた一ノ瀬が言う。

「なんで花梨がいるんだ？」

「悪かったわね、私がいたらなにか都合悪いこともあるの？」

「私が、一昨日から毎日荒川君が家に来ていることを花梨に話したら、私も行くつてなつて」

申し訳なさそうに言う一ノ瀬。

「ま、少ないよりは多いほうがいいだろ。ほら、大は小を兼ねるっ

ていうし」

「…なにそれ、喜んでいいの？」

複雑な顔の花梨。すまん、たぶん喜ぶのとは違うと思う。

「あの、今日のお茶菓子はですね」

一ノ瀬は早く発表したくてウズウズしている。

「そうだな、今日のお茶菓子は一体なんだい、一ノ瀬？」

「はいっ最中です！」

かなり嬉しそうだ。

「私はたまには洋菓子も食べたいんだけどね」

と言いつつも、ちゃっかり手を伸ばす花梨。

「それにしても、本当に一ノ瀬は和菓子が好きだな。もしかして毎日食べているのか？」

せつかなので俺も最中を頂きながら、聞いた。

「え？毎日・・・ですか？」

なぜかチラリ、と花梨と視線を合わせる一ノ瀬。いや、特に意味はないんだぞ？

「えーと、まあ、はい。・・・食べます」

俯き、両の人差し指をつんつんさせながら言う。

「そうなのよ、砌ったら小学校の頃からいつもお菓子食べてるのに、まったく太らないのよ。不公平よね」

一ノ瀬の二の腕を揉みながら、口を尖らせる花梨。

「そ、そんな・・・花梨だって、なんだかんだ言って結構食べてるけど、私よりスタイルいいじゃない」

まだほんのり赤い顔で言い返す一ノ瀬。

「なんだかんだ言ってってねえ、私はちゃんとカロリー計算してるからでしょ？あんたは和菓子と見たら無差別に食べちゃうのに太らない。絶対不公平だよ」

今度は頬をつねる花梨。

「えう。それよりも、今日は珍しく勉強するために来たんでしょ？いいの？やらなくて」

一ノ瀬の顔が少し横に広がる。なんかムニムニと柔らかそうだ。はっと意識が戻る花梨。

「そうだった、そうだった。砌のほっぺの柔らかさについて我を忘れてたよ」

パツと手を離し、ポリポリと頬を搔く。

我を忘れるほどののか・・・気になる。

「では、砌のほっぺも満喫したことだし、早速勉強初めますか!」

そう言くと、花梨は縁側に勉強道具を展開し始める。一ノ瀬はどこから持ってきたのか、背の低い机を手際よく設置する。

「さあ、張り切っていくわよー!」

シャーペン片手に張り切る花梨。

「はい、がんばっていきましょうね」

朗らかに賛同する一ノ瀬。

「おう、がんばってくれや」

居場所がなくなったと判断した俺は、境内の散歩でもしようかと立ち上がるうとする。

ガツシ。

踏み出そうとした右足を何者かが掴む。おかげでそれ以上進めない。

「何言ってるの。君に教えてもらおうって言うのに、そんなんじや話にならないでしょ」

見ると花梨の左手が、ズボンの裾をガツシリ掴んでいた。

「だから、俺は教えるなんて一度も・・・」

「お手柔らかにお願いします。荒川君」

・・・いやだから、俺の意見はことごとく無視ですか。

そうか、あいつは負けたのか・・・

「くつやしいー!!」

昼休みの屋上で、花梨は咆哮した。

「あともうちよつとだったのよ?あの問題の意味さえわかっていれば・・・」

それは、ぜんぜんちよつとではないのではないかと思うが。しかし今の花梨には無駄だろう、とも思うので黙っておくことにする。

花梨は止まらない。止まらないので、俺は自分の弁当を消化することと専念することにした。

「もう許さないんだから！次会ったらただじゃおかないんだから！」

花梨は拳を固く握る。頼むから暴力沙汰だけはやめろよ。

「まあまあ、ひとまず落ち着きなさいな。どうどう」

慣れた手つきで諫める一ノ瀬。さすがに鮮やかだ。

「でも、でもでも聞いてよ砌！あいつったらわたしの苦手な関数ばかり、集中的に出してくるんだよ？これは絶対わたしになにか恨みとか、いろいろあるのよ！」

「そんな恨みなんて……。花梨に身に覚えはあるの？」

「ない」

即答しやがったぞ、こいつ。関数だって重要だから集中的に出題しているだけだろ。

「ちなみに、何点だったの？」

ついに核心に触れる一ノ瀬。俺はすかさず二人の会話に聞き耳をたてる。

花梨の表情が一瞬強張る。

「えーと、えと、……。誰にも言っちゃダメだよ？」

「わかってるよ。いままでだって、ちゃんと言わなかったでしょう？」

「絶対、言っちゃダメだよ？……。えと、こによこによ」

念を入れた後、一ノ瀬に耳打ちする花梨。

「え？それって、その前に十とか二十とか三十とか、つかないの？」

「う、うん……」

俯きつつ、肯定する花梨。

「……。き、記録更新、ね……」

絶句する一ノ瀬。まさか絶句させてしまうなんて、一体何点なんだ？

「……で、やっぱりこのままだといけなと思うワケよ」

「・・・確かに、私ももつと上を狙いたいし」

開き直る二人。その心は熱い思いに燃えているようである。

・・・やっぱり典子さんの卵焼きは絶品だな。

「そこで、この惑える乙女達の危機に、救世主さまにご登場願おうかな、と」

「うん、それはいい考えだね。・・・で？救世主って誰？」

・・・やべえ、このから揚げは絶品だぜ・・・。さすが典子さんだぜ・・・。

「それはもちろん、まさにベストなタイミングで転校してきた、その名も——」

花梨はビシッ、と俺を指差し、宣言した。

「荒川 貴弘君！君だよ！」

まあ、予想はしていたが・・・、やっぱり俺なのか。

「もちろん！そうと決まったら、早速放課後に勉強会よ！」
「どうやら、俺に拒否権はないようだ。」

まあ、昨日のこともあったし、少しぐらい付き合つとするか。

放課後、俺たちは教室に集まり、三人だけの補習授業を始めた。

「よっし。やっぱりまずは数学からかな」

やる気満々の花梨。数学の参考書一式を、机の上にドン、と置く。

ただでさえ人数が少ないわりに広い教室には、三人の影がやたら大きく横たわっていた。

「そうだね、まずは関数を克服しないと」

言いつつ一ノ瀬は、鞆から数学の教科書を取り出す。

「では先生、まずやるべきことを教えてくださいませ」

花梨が妙に丁寧な口調で聞いてくる。

「ああ、じゃあそうだな・・・、とりあえず今回間違つたところの見直しでもするか」

「えー、それじゃあほとんど全部じゃん」

俺の提案に不平を漏らす。ていうかほとんど全部って・・・

「まあ、いいんじゃない？ほら、どうせ数学の追試、受けなくちゃならないんだし。いまやつちゃえば、後楽だし」

花梨より直す箇所が少ないのか、一ノ瀬は少し余裕な感じた。

「そうだね・・・じゃ、さっそくしつもん」

元氣良く挙手する花梨。

「ん？どこだ？」

「ほら、ここ、ここ。これってどうやって解くの？」

一つの問題を指差す花梨。ああ、これは・・・

「右辺を展開して整理した後、全部左辺に移項してだな・・・」

懇切丁寧に、解き方を教えてやる俺。これならさすがに解るだろ。

「ね、ねえ、ちょっと聞いていい？」

花梨が少しためらいがちに聞いてくる。

「？なんだ？」

「これを展開して、左辺に移項するっていうのはわかるんだけど、そしたらX三乗がなくなっちゃうんじゃない？」

「それは別にかまわないだろ？三次式が二次式になるんだから。これは元々そういう問題ってこと」

「そ、そんな！？・・・あいつめ、謀ったわね！」

数学教師に不条理極まりない濡れ衣を着せる花梨。

「え？でも、同じような問題、教科書に載ってるよ」

抜群のタイミングで追撃弾を放つ一ノ瀬。まさかわざとじゃないよな・・・？

「はうあう・・・つまり、これは単なる勉強不足・・・」

ぱたり、と机に突っ伏する花梨。教科書の例題ぐらいやつとけよ・・・。

「・・・つと、やっと終わったな・・・」

俺は、なにかやり遂げた達成感を感じずにはいられなかった。

花梨の間違っていた箇所は、俺の想像をはるかに超えていた。なるほど、一ノ瀬が絶句していたのもわかる。

「うん、大変だったけど、これで追試もバツチり粉碎間違いなし！」
握ったこぶしをワナワナとふるわせる花梨。どうやら今回の勉強で、『打倒数学のテスト』に対する自信がついたようだ。

「ああそうだな、次からはテスト勉強の時点からがんばってな」

「良かったね、花梨。これだけの時間を費やしたかいがあったね」

「・・・そうなのだ。圧倒的な物量の前に俺たちは苦戦を強いられ、今はもう日も暮れかかっている。」

「・・・すまないな、一ノ瀬。そっちの方はほとんど見られなくて結果として俺は花梨につきつきりとなり、一ノ瀬はほとんど自習みたいな感じになってしまった。」

「いえ、私も十分参考になりました。私も花梨と一緒に間違ったところもあるし」

まあ、あれだけ間違っればなあ。ていうか、一ノ瀬が間違ったところは花梨の間違ったところに全部含まれていると思うぞ。

「それに、私は後でおじいちゃんに教えてもらいますから」

「え？おじいちゃんって・・・、教文さん？」

「そうそう。砌のおじいちゃんって、頭良いんだよ」

うきうき、と上機嫌の花梨が言う。

「なんでも、東京の大学出た後、先代の後を継いで、今の神主の仕事を始めたらしいんだけど、すぐにこの辺一帯の神主のまとめ役みたいになっちゃって、今ではこの村はもちろん、周りの集落の祭事をみんな取り仕切っているのよ」

「・・・な、なるほど。ただ者ではないと思っていたが、やはり凄い人だったのか。」

「でも最近は忙しいみたいで・・・。しばらくは、教えてもらえそうにないんですけど」

「・・・確かに、今は教えている暇はないだろうな・・・。」

同時に、俺が今置かれている状況を思い出してしまう。

「それじゃあ、砌は今度教えてもらうことにして、今日はもう帰ろう」

「そうだね、もう外も真っ暗だし。早く帰らないと」

花梨の提案に、一ノ瀬が賛成する。

「ほら、ちゃっちゃと仕度する！それと、もう遅いんだから、ちゃんとわたしたちをエスコートするのよ！」

「お、俺が？」突然の任務に、思わずうろたえてしまう。

「あつたりまえでしょ。誰のせいでこんなに遅くなったと思っ
てんの」

花梨、貴女のせいです。

帰り支度を終え、校舎を出た頃には、既に完全に日は落ちてしまっていた。

「しかし、なんだ。ほんとに真っ暗だな」

「まあね。この辺田舎だし、日が落ちると車とかほとんど通らないし」

「だから、街灯とかは交差点とかは、要所要所があれば十分なんです」

俺の問いに、花梨と一ノ瀬が解説してくれる。確かに、ところどころに灯りは見られるが、それでも暗いことには違いなかった。

「確かに、これはエスコートが必要だな」俺は納得する。

「でしょ？じゃ早く行こつ。しっかりエスコートするのよ！」

「よろしくお願いしますね」

「おう、まかせなさい」

正体不明の怪物がうろつろしているところを、女子だけで帰すわけにはいかないからな・・・。

まずは、家が遠いのと、俺が知らないということで、花梨を先に送り届けることになった。

「じゃあ案内するから、しっかりわたしたちを守ってね」

花梨を先頭に、俺たちは歩き出す。

「はあ、やっぱりこの辺はみんな農家なのか」

「うん、まあ、他に仕事もないしね。先祖代々農家って人ばかり

だよ」

「この辺りは盆地ですから、稲作よりも果樹栽培の方が盛んなんです」

なるほど、だからところどころにネットを張った低木や、ビニールハウスが目立つのか。

「すると、花梨の家も農家なのか？」俺は気になったので聞いてみる。

「まーねー。と言っても果樹栽培の方ね。つくってるのは梨が一番多いかな。後はメロンとか」

花梨の反応は少し素っ気無い。「家が農家」ということには、あまり触れない方が良くかもしれない。

年頃の女子高生には、あまり嬉しい事実ではないのだろう。きっと。

「で、砌の家は神社、と。神社って普段なにするんだ？」

「うーん、たとえば――」

――その時、微かにだが、「気」の流れを感じた――

「！！？・・・まさか」

それは、前の暗闇から発せられていた。俺は思わず足を止める。

「どうしたの？」

ぬっ、と暗がりから姿を現したのは、長身の人型。

「え？誰？こんな時間に」

しかし、その人型は、服らしい服も着ていなかった。そしてなににより、普通の人間と決定的に異なるのは――

「え、あ？・・・あたまに・・・角？」

これが、これが、「鬼」か。

実物は初めて見るが、虚ろな目をしているその鬼が、まともな思考力を持っていないことだけは解る。

「・・・花梨、一ノ瀬。早く逃げろ」

「え？だって、あれ何？貴弘は？どうすんの？」

「……………」

困惑する花梨。一ノ瀬にいたっては、声すら出ないようだ。

「エスコートするんだろ？俺が時間を稼ぐから、そのうちに逃げるんだ」

一ノ瀬はともかく、花梨のいる前では美々子が呼びづらい。

そうしているうちにも、鬼はゆっくり近づいてくる。よく見ると、そのだらしなく下げられた手には、金属バットのようなものが握られている。まあ、鬼といえば「アレ」だから、「アレ」なんだろうが……。

それはあまり嬉しくない事実だ。

「早く逃げる！もうヤバ——」俺は後ろの二人を急かす。

「……貴弘っ！前……！」

花梨の叫びに前を見ると、いつの間に距離をつめたのか、目の前の鬼が右手に持った金棒を振り上げていた——！！！！

「くそっ！！命！来いっ——！！」

術式によって此处までの行程を省略し、瞬時に命を呼び出す。

——眩い白光の中、御珠上が顕現する——

「防げ……！」

俺と鬼の間の空中に出現した命の周りに、見えない壁が現れる。それは鬼の振り下ろした金棒を阻み火花を散らし、そして鬼の方を弾き飛ばした後、消える。

鬼は無様にハメートル程飛ばされ、地面に叩きつけられる。

その隙に俺は花梨と一ノ瀬に指示する。

「どこか、安全な物陰に隠れている……！」

「た、貴弘くん、君は一体……」

「説明は後……！すぐにあいつを倒すから、待ってる……！」

そして俺はまだ体勢の整っていない鬼に向かい、追撃する。

「我が名、貴弘の名において律する……！御珠上 命……！直ちにあい

つの喉笛を切り裂け!!」

戦闘モードの命が一瞬で鬼との距離を詰め、その首に腕を振り下ろす!!

「よし!!切り裂け!!」

数倍に硬化した命の爪は、しかし空を掻いた。

「?!上か!!」

人間では考えられない跳躍をした鬼は、その勢いを利用し、上空でバック転する。

加速された金棒が命に向かって投げ下ろされる!!

「よける!!命!!」

地面に突き刺さる金棒を右に避け、命は空中で身動きの取れない鬼に向かい追撃する。

止めを刺さんと再び命は右手を掲げるが――

「な!!?なんだあれは!!」

鬼の右手には今投げたはずの、金棒が握られていた。鬼はそれを命の死角から振る!!

「くっ、間に合え!!」

今度は命の左わき腹を、ピンポイントで見えない盾が守る!!

しかし、その反動で鬼は命の攻撃範囲から逃れてしまう。

ほぼ同時に地面に着地する鬼と命。

「貴弘さん!!?今のは?」すかさず俺の前まで移動してきた命が問う。

「俺にだってわからん。さっきまでは確かに一本しか持っていなかったぞ」

俺はチラリ、とさっき突き刺さった金棒の方を見る。そしてそれは確かにそこにあった。

くそっ、これだから最近の鬼はっ!!

俺は着地した鬼の方を見る。鬼は無闇に攻撃するのは危険だと判断したのか、じりじりとこちらの隙を窺っている。

虚ろな目してる割には、戦闘能力だけは高いな。狂戦士ってか?

「命、お前はと思う？」

「正直わかりません。あれは私が今まで戦ってきたどんな鬼とも、違います」

そのとき、こちらが会話しているのを隙と判断したのか、金棒を構えもせずに鬼が突進してくる！

力でゴリ押ししてか、だつたらこつちも——！！

「命！！まずはあいつの金棒を切り裂け！！」

頷いた命は、瞬時に鬼との距離を詰めにかかる。

鬼は命の左側頭部を狙い得物を振る。

命は力強く地を蹴り、振り下ろされた金棒に手をつく。そしてその手を支点に、バック転！！

命は金棒の上空に逃れ、地に落ちる力を利用し金棒に斬撃を加える。すると、金棒はきれいに十一等分され、ばらつ、と崩れた。

一瞬うつたえる鬼、命はすかさず鬼の懐に入る。

「よしっ！！命！！そいつの腕を噛み千切れ！！」

命は鬼の片腕に食らいつき、噛み千切った。バランスを崩し、倒れる鬼。

「ゴオオオオオオオ！！！」鬼の咆哮。

・・・やったのか？

鬼は身動きしない。俺の前に命が戻ってくる。

「命、お前は一ノ瀬たちを探してきてくれ。たぶんその辺にいるはずだ」

「わかりました」

俺は倒れた鬼の方に近づいてみる。片腕を失った鬼は、大量の血を傷口から溢れさせ、白目をむいている。

それにしても、初めての実戦とはいえ、野生の鬼なんかこんなに苦戦させられるとは・・・これも今回の「気」となにか関係があるのか？突然金棒がもう一本現れるなんて・・・。

「？金棒がもう一本？？」

そのとき、いままで身動きしなかった鬼が突然起き上がり、残った

左腕を振るう！！

その手には、三本目の金棒が——！！

！！しまった——！！

咄嗟に自分に防壁を張る。しかし、一撃の目標は俺ではなかった。

「くっ！！狙いは——！！」

俺の背後で花梨の介抱を始めた——命！！

鬼は命に向け、金棒を全力で飛ばす！！

「命！！避ける——！！」

俺の声に振り返る命。しかし遅い！！俺も自分の防壁を張ったせいで、そのぶんのタイムラグが——！！

「！！美々子さん！！危ない！！」

叫び、命を庇おうとするのは、命と一緒に花梨の介抱を始めていた

一ノ瀬だ。

「な！？やめろ一ノ瀬！！」

俺は術式を使うとするが、間に合わない！

「！！きゃああああああああ——！！！！」

一ノ瀬の肉体が人型でなくなることが決定的になったこの瞬間、何かが起こった。

次の瞬間も一ノ瀬は、人型を保っていた。ということは、金棒のほうで、その形を失ったということになる。

事実、金棒はその形を失い、灰燼に帰した。

一ノ瀬の張った、その、燃えるような、紅葉色の、防壁によって——

な、なんだあれは？？あんなの、見たことないぞ！？

「——さあ、美々子さん。今のうちに、花梨を連れて離れてください」

一ノ瀬は、さっきまでの混乱ぶりとは対照的に、極めて冷静に、落ち着いて命に指示した。

な、なんだあの変わりようは？別人格？無意識に発現したのか？

啞然とする俺にも、一ノ瀬は冷静に指示をする。

「荒川君も、その怪物から離れてください。——みんなを傷つけたそいつを、私は許さない!!」

ありえない程の殺気が、一ノ瀬から放たれる。

鬼も同じように感じ取ったのか、片腕だけで立ち上がり、逃げようとする。

「！逃がさない!!」

防壁を解いた一ノ瀬が、ゆっくりと鬼へ向かい踏み出す。

そしてゆっくり、右手を掲げ、振り下ろす。

そこから生まれたのは、衝撃波か？淡く紅に輝くそれは、暗闇の通学路にくつきりとその軌跡を刻みながら進んだ。

ひたすら真っ直ぐに、鬼へと。

「——!!」

鬼は声を上げる瞬間すら与えられず、紅に輝く衝撃に飲み込まれた。

「・・・・・・」

一体、なにがどうなっているんだ？一ノ瀬のこの力は何だ？

「・・・・・・」

「・・・・・・砌・・・・」

命と花梨もただ啞然とその様子を見ている。

鬼の消滅を確かめた一ノ瀬は、花梨の無事を確かめる。

「・・・・よかった・・・・無事・・・・で・・・・」

安心したのか、気を失う一ノ瀬。ガクン、と膝から崩れる。

「！一ノ瀬!!」

「砌!!」

俺たちは倒れた一ノ瀬に駆け寄る。

「・・・・大丈夫、気を失っているだけだ」

ほっ、と安心する花梨と命。俺自身も安心する。

「とにかく、まずは砌さんを神社まで送りましょう。花梨さんもそこで手当てを」

テキパキ、と命が進言する。

「そうだな。・・・教文さんとも話し合わなくてはならないしな・・・」

俺は後半は命たちに聞こえない程度に、呟いた。

「？なにか言いましたか？」

「い、いや、なんでもない。花梨、歩けるか？」

俺はさつきからずっと立ち尽くしている、花梨に言う。

「え、うん。大丈夫だよ・・・」

花梨のその瞳には、強大な暴力から解放された安堵と、常識を逸脱した全てのものに対する不安と、そして、明らかな恐怖の色が浮かんでいた。

「・・・とりあえず、一ノ瀬神社に行こう」

俺は一ノ瀬を背負い、事態の收拾と今後の打開策を得るため、一ノ瀬神社へと向かう。

「！——砌っ！！」

ぐったりと横たわっている砌に、教文さんが駆け寄る。

「大丈夫、気を失っているだけです。命に別状はありません」

「そうか・・・。君たちも無事でよかった。怪我はないかい？」

安堵の表情で教文さんが問う。

「花梨が怪我をしています。——命、花梨の手当てと一ノ瀬の介抱を頼む」

「はい、貴弘さん」

命が一ノ瀬を持ち上げ、奥の部屋の襖を開ける。

「救急箱は戸棚のなかだ。詳しくは花梨君に聞いてくれ」

「わかりました」

答える命。花梨はうつむいたまま、何も喋らない。

「・・・花梨君」

部屋に入ろうとする命と花梨に、教文さんが声をかける。

「今回のことは、私や荒川君や、私の仲間です必ず解決する。だから、君は今日のことは忘れて、明日からいつも通りに振る舞いなさい。」

あまり人にこのことを話さないこと。無駄に混乱を招くだけだからね」

「！でもっ！・・・でも砌が、砌が怪我したんですよ！？」

戸惑いながらも、親友を傷つけた奴を放っておくことはできない、と抵抗する。

「では聞くが。君がいて、一体何ができるといふんだい！？」

普段とは違う教文さんに、花梨だけではなく、俺や命まで反応してしまう。

「・・・すまない。恐い声を出してしまったね。しかし、このことは、君は既に体感したと思うが、常識を超えた次元の話だ。一般人の君を、巻き込みたくない。わかってほしい」

花梨は再びうつむいて、しばらく何事か考えた後、

「・・・わかりました」

と答えた。そして、下唇をかみ締めながら、ちら、と一ノ瀬を見た。

「・・・だったら砌も、砌も巻き込まないでください。お願いします」

さっきの、砌の超常的な力が花梨を不安にさせたのか、花梨は教文さんに頼んだ。

「・・・もちろんだ」

神主は重々しく答える。その答えを聞いて花梨は、「良かった・・・

」と呟き、命と共に奥の部屋に入った。

「・・・一体なにが起こったのか、詳しく説明してくれるね？」

奥の部屋へと続く襖に目を向けたまま、神主が言う。

「もちろんです」

そして俺は事の顛末を、神主に出来る限り正確に伝える。それを聞いた神主は、「なんということだ・・・」と頭を抱えてしまう。

「そんな強力な鬼はもちろん、ただの鬼さえ、この地域には確認されていないというのに・・・。」
「気」の力がここまで濃いと・・・

「なにか対策は？」俺は一番聞きたかったことを聞く。しかし、そ

の返答は、根本的な解決ではなかった。

「・・・君はこのまま「気」の発生源を突き止めることに専念してくれ。村の警護は、私たちが交代で行おう」

「しかしそれじゃあ！」

「私たちが攻勢に出るには、この事件の根本を突き止める以外はない。それだけは確かだ」

「！！」

それは、最初からわかっていたこと。そして、事態が一切進行してない、証でもある。

「・・・それは、わかっています」

わかつてはいるが・・・。

「・・・大のおとなの私たちに見つけられないものを、若い君ひとりに押し付けるのは、正直、虫のいい話と思われるかもしれない」
神主は、眉間にしわをよせ、苦しそうに言い放つ。

「しかし、既に事態が私たちの手の届かないところにまで来てしまい、そして、この事態を解決できるのは、陰陽師として修行を受けた」

その瞳には、一点の曇りもない。

「君しかいないのも、確かなんだ」

「・・・」

俺は、この期待に答えられるのだろうか？俺は・・・

その大元の、その気配さえ感じとれていないというのに。

「不幸中の幸いか、今回死亡者はなかったし、なによりついに敵が姿を現した。活動が活発になるほどその痕跡は多く残ってしまうものだ」

神主はすつ、と立ち上がる

「私たちは、奴の「気」を感じることはできない、が、奴を見つけ
る作戦を立てることはできるよ。・・・ここは冷えるし、中に入る
う」

そして、奥の部屋に歩いていく。

今回ついに俺の目の前に姿を現した、鬼。

これは、俺たちが攻勢に出る唯一の方法である「『氣』の発生源である「黄泉の門」とその近くにいてと思われる「邪悪なる存在」を倒す」ことの出来る時間が、刻一刻と減り続けている、ということに他ならない。時間がないのだ。

「だが・・・その、肝心の「黄泉の門」が見つからない」

神主が、眉間を揉みながら、呻く。

そこが重大かつ根本的な問題だ。姿が見えさえすれば、10年前と同様に封印することができる。

・・・ん？待てよ？

「封印したってことは、10年前は見えたんですよね？姿が」

「ん？・・・そうだね、10年前は確かに見えていた。こんな、姿が見えないなんてことはなかった」

神主はじつ、と床を見つめている。

「え、じゃあ、今回のように「黄泉の門」が開くのは、一回や二回の話ではないのですか？」

「ああ、・・・「黄泉の門」が開いて、この世が黄泉の世界とつながってしまうのは、遙か昔から定期的にあった。間隔は10年、100年と非常にまちまちだがね」

「もちろん、姿は見えたんですよね？」

それは、一体どんな姿なのだろうか。空前の規模の『氣』を発している「黄泉の門」と、そこから這いずり出てきた「邪悪なる存在」とは。

「もちろんだよ。さっきも言ったが、今回のようなことは今までなかった。現れる度に姿を変えてきたがね」

「そ、それはどんな？」

「鬼のような人型だったり・・・、ただ、漠然とした気体だったり・・・、真ん丸の体にびっしりと目玉が付いていたり、それこそ様々だったようだよ。もちろん「邪悪なる存在」のほうだけだね。「黄

泉の門」も姿は変えるものの、一応は門の形をしているらしい。私も文献で調べただけなので真実かどうかはわからないが」

その姿は、どれも規則性がなく、妖怪のイメージからもかけ離れたものだ。

「しかし、なぜ毎回姿が変わるのに、それが「邪悪なる存在」だとわかるんですか？」

「それは、「気」だよ。奴らが発している『気』は、君も知ってる通り、どす黒いんだ。だからわかるんだよ」

そうか、だから毎回姿を変えて現れても、それが「邪悪なる存在」だとわかるのか。

「そうしたら、なぜ奴らは毎回姿を変えるのでしょうか。発している『気』でわかってしまうなら、そんなことしても無駄じゃないですか」

「ふむ、それは確かにそうだね・・・」

神主は顎に手を当て、考える。

「・・・もしかしたら、それは私達に見つからないためではなく、そういう奴らの「習性」なのかもしれない」

「「習性」・・・ですか？」

「うん。奴らは無意識のうちに、何らかの「習性」によって姿を変えるのかもしれない」

「すると・・・その変わる姿には、何か規則性があるのでしょうか」神主は顎に手を当てたまま、「それはどうかな」と答える。

「いままでの姿から規則性を見出すことはできないが・・・意外と盲点なだけかもしれない・・・。規則性というより、その姿が、何によって、あるいはどうやって決められるのか、と言うふうに考えたほうが適切かもしれない」

・・・その姿が、どうやって決められるのか。・・・か。

神主との話が終わり、花梨の様子を見に行くと、そこには美々子しかいなかった。

「あれ、花梨はどうした？」

「あ、貴之さん」

ひとり行儀よく座っていた美々子に尋ねる。

「花梨さんは治療が終わったあと、家まで送り届けました。疲れて
いるようでしたので」

「そうか・・・」

花梨の安全が確保されたことに、純粹に安心する。

「荒川君」俺の後を歩いてきた教文さんが、静かに言う。

「明日からも、花梨君や砌とは今まで通り接して欲しい」

——もちろん、そのつもりです。

「わかりました」

秋も終わりに近づいているのか。虫の鳴き声は、聞こえない。

第2章・紅の姫君・（前書き）

自作同人ゲーム用に書き下ろしたシナリオです。

制作ブログ↓<http://synthesize2.blog4.fc2.com/>

初めての長編作品なので未熟な点多々ありますが、よろしくお願いします。

異界の化け物との遭遇に、恐れを隠せない花梨。

一方、砌は貴弘にある決意を打ち明ける。

「私も荒川君と一緒に戦わせてください」と。

そしてまた、彼は3人目の少女と出会う。

砌と花梨の親友、病弱の少女。

—— 瀬田 あつみ（セタ アツミ） ——

あつみの学園復帰を祝って、歓迎会を企画する四人。

その日の放課後、貴弘はあつみと偶然出くわす。

極端な反応をするあつみに、貴弘は次第に好意を持ち始めていた。

そして夜。特訓を開始した砌とともに、彼は戦場へと戻っていく・・

第2章・紅の姫君・

夜のうちに空を覆っていたらしい。

その日の朝は、薄い雲のはった何となく憂鬱な天気だった。

「……………」

ゆっくりと体を起こす。結局一睡も出来なかった。

「一ノ瀬と花梨……今日は登校してくるのか……?」

きつと登校してくるだろう。そうやって、昨日のことを忘れようとするのではないだろうか。

日常は何も変わっていない。自分たちの住む世界は何一つ変わっていないのだ、と。

だとしたら、俺も行かなくては。唯一事情を知るものとして、俺には彼女たちの日常を守る義務があるだろう。

もそもそ、と制服に着替え始める。

「……?美々子の姿が見えないな」

いつもならこの時間は夢の中なのだが……、珍しいこともあるんだな。

「とにかく、今は学校に行かないとな」

「おはようございます」

「おっはよう、貴弘!」

まだ人影がまばらな教室に、一ノ瀬と花梨は、やはりいた。

「……あ、ああ。おはよう」

妙にぎこちなく挨拶を返してしまう。

「貴弘は傘持ってきた?今日の午後から雨だって、天気予報で言ってたよ」

一見、何事もなかったように振舞っているが……。

「あ、あの……」

考えていると、不意に声を後ろから声をかけられる。知らない声だ。

「ん？誰だ？」

「あ、あの・・・始めまして・・・」

振り向くと、見慣れない女生徒がひとり、申し訳なさそうに立っていた。

「そういえば、貴弘は会うの初めてだね。彼女は瀬田 あつみ（せだ あつみ）ちゃん」

「ちよつと病気がちで、荒川君が転校してきた日の前日から、学校を休んでいたんです」

二人に紹介され、赤面してしまう瀬田。

「ど、どうぞ、よろしく・・・おねがいします」

「ああ、こちらこそよろしく」

とりあえず無難に挨拶をしておく。

「と、いうわけで。今日からあつみも一緒にご飯食べるから」

「私たちいつも一緒にお昼ご飯食べてたんですよ」

「やったね貴弘！これで両手プラス片足に花だよ」

そうか、両手プラス片足に・・・

「なんだそりや！？花梨、お前本気で言ってるのか？」

「うん。・・・なんで？よく『両手に花』って言うじゃない」

ねえ、と一ノ瀬に同意を求める花梨。

「ま、まあ女の子が二人のときはそういうかもしれないけど・・・」

「だからって、何で三人のときは『両手プラス片足に花』なんだよ」

第一、片足に花ってどういう状況だよ」

予想していなかった質問に、キョトン、とする花梨。

「え？どういう状況かって？」

「そう。実際にやって見せてくれよ」

どう考えたっておかしいだろ、「片足に花」って。

「え、えと、あの・・・」

「花梨、ここは大人しく負けを認めた方がいいんじゃない？」

まったく蚊帳の外の瀬田と、嫌な予感がするのか、花梨をとめる一ノ瀬。

「うん、と、・・・こんな感じ？」

おもむろに、その健康そうな足を水平になるまで上げ、つま先をくいつくいつ、と曲げる花梨。

「・・・なにが？」

「いや、だから。足に花持つとしたらこんな感じ？」

「・・・この場合、やらせた俺が悪いのだろうか？」

「や、やめなよ花梨。はしたないよ」

花梨の奇行を一ノ瀬が慌てて止める。

「だってだって！貴弘がやれって言ったんだよ？」

「いいからいいから。とにかく足下ろして」

依然として上がったままだった花梨の足を、グイグイと下ろさせようとする。

「あ、ごめん。・・・と、とにかくっ！実演したんだから文句ないでしょ？」

不敵な笑みをする花梨。

「まあ、なんというか・・・マヌケだよな」

そんな花梨に、俺は率直な感想を返す。

すると花梨は、カアア、と顔を赤くしてしまった。

「・・・ふんっ、いいんだよ別に。どうせこれやるの貴弘だし」

勝手に決めないでくれ。ていうか、実際にやったら、だれか一人を足蹴にすることになるんじゃないのか？

それを聞き、咄嗟に止めようとする一ノ瀬。

「ダメだよ、はしたない。第一、荒川君がやったって・・・。あれ？・・・いいかも」

いや、いいくない。いいくない。なんなんだその間は。

「えと、その・・・先生来たよ」

「わ、わあ！！」

突然背後から声をかける瀬田。俺は思わず大声を出してしまう。

「あ、・・・ご、ごめんなさい」

「せっかくいいところだったのに。しょうがない、また後でね」

「では、またお昼に」

みんなそれぞれの席へ向かう。俺も自分の席に着くことにした。

「んん——！！やっぱり、ご飯は見晴らしのいい所で食べたほうがおいしいよね！」

ぐぐー、と体を伸ばし、満足げな花梨。

「そういえば、一番最初にお昼を屋上で食べようって言い出したの、確かあつみだったよね？」

ふと、思い出したように一ノ瀬が言う。

「え？・・・ま、まあ・・・うん」

予期していなかった問いに、少し戸惑いながらも答える瀬田。

「私、この村が好きだから。村を見渡せるこの場所で、花梨や砌と一緒に昼を食いたいなって、思ったの」

「・・・」

さつきまでとはまったく違う雰囲気の瀬田に、思わず見入ってしまった。

「・・・あ、もちろん、今は荒川君も・・・ですよ？」

いつもの雰囲気に戻り、おたおたし始める瀬田。

「おうおう、モテモテですねえ。妬いちゃうなあ、もう！」

花梨が俺の背中をバシバシ、と叩く。

「や、やめろよ花梨。瀬田が困ってるだろ」

瀬田は顔を赤くして俯いてしまっている。

「砌の次はあつみか。つは！と、いうことは、次は私！？お兄さんもやりますねえ。私はい・つ・で・もOKだからね」

妙にしなを作る花梨。もしかして色仕掛けのつもりか？

・・・いつでもOKねえ・・・。

「さあ、おふざけはそれくらいにして、そろそろお昼食べようよ」
様子を見ていた一ノ瀬が提案する。

「そうね。じゃあ、お昼にしましょう。ほら、貴弘もお弁当出して」
「わかったよ。そうせかすな」

さつさとしなをつくるのをやめ、俺の弁当箱を覗き込む花梨。

「・・・まったく。「花より団子」とはこのことだな。」

「今日はあつみもいるし、楽しみです」

「え・・・そんなことないよ・・・」

各自、それぞれのランチを広げる。俺はもちろん、典子さんの愛情（！？）たっぷりの特製弁当だ。

「うわー、相変わらず貴弘のお弁当は凄いな。これ作ってるの、やっぱりお母さん？」

と言いつつ、いい感じに半熟な卵焼きをひよい、と摘んでぱくつ、と食べてしまう花梨。

「・・・おい、花梨。なんで俺の卵焼きばかり狙うんだ？」

転校初日と同じ事をやられて、思わず聞いてしまう俺。

「まあまあ、元々私たちのお昼は、みんなのお弁当を共有して、自由に食べていたんですよ」

花梨の奇行について説明を加える一ノ瀬は、ちゃっかり花梨の弁当をつついている。

「元々って・・・。昨日までは普通に食ってたじゃないか！」

「今日はあつみが来たから、元々のスタイルに戻すの。今から」

わかった？というふうに、花梨がこちらを見る。

・・・納得できん。

「あ、あの・・・」

その時、背後から声。このパターンは。

「！！瀬田か！？」

がばつ、と背後を振り返る。予想通り、そこには瀬田がいた。

「え、ええ・・・。その、よかったら・・・わたしの卵焼きを・・・えと、どうぞ・・・」

可愛いサイズの弁当を、おずおず、と差し出す瀬田。

「え？貰っていいのか？」

「あ、はい。・・・もし、よかったら・・・ですけど」

瀬田は顔を真っ赤にして、上目使いでこっちを見ている。

「あ！私が狙ってたのに！あつみの卵焼き！！」

「な！花梨お前、俺の卵焼き食べたじゃないか！だからこれは俺のだ。・・・じゃ、ありがたく貰うぞ。サンキュ」

「え、そんな。・・・お口に合うかどうか」

瀬田の弁当箱から卵焼きを一切れ貰い、口に運ぶ。

・・・もぐもぐ、もぐもぐ。・・・！！

「あつみの料理はとってもおいしいので、きつと気に入りますよ」
う、うまい！！これはもしかしたら、典子さん以上かもしれない！
「うまいよ。この弁当、自分で作ったのか？」

「は、はい。いつも自分のお昼とかは自分で作ってます」

「あーん、もう！こうなるんだったら、貴弘の卵焼き食べるんじゃないかったー！」

もしかして、瀬田の料理を頂戴するために、今日から弁当を共有しよう、とか言い出したのか？

「ええ、そうですよ。あつみの料理は花梨にとって、一日の楽しみの一つなんです」

「じゃあさ、あつみの唐揚げ貰ってもいい？」

めげずに次の目標を確保する花梨。

「うん、・・・いいよ」

「・・・」

そうして、俺たちの昼休みは賑やかに過ぎていく。

やがて、全員あらかた食べ終わったところで、急に瀬田が席を立った。

「あの、私・・・お薬を飲まないといけないので」

そして、階段のほうに歩いていく。

不意に静かになる一同。

やはり、昨日のことについて、なにか言ったほうがいいのだろうか。陰陽師としてではなく、友達としての荒川 貴弘として。

「・・・えーと、花梨に一ノ瀬、俺の話を聞いてくれるか？」

二人ともビクツ、と体を震わせ、ついに来たという顔でこちらを見る。

周りに人がいないことを確認する。

「まず、俺のことから。・・・俺は、まさかと思うかもしれないけど、俗に言う「陰陽師」ってヤツだ」

二人は静かに、こちらをじっ、と見つめる。

「俺はこの村には、あるものを調査するために来たんだ。それには昨日の『アレ』も含まれるんだけど・・・」

「・・・うん、あの『化け物』のことでしょ？」

・・・化け物か、確かに間違っではない。

「そうだ。アレは『鬼』と呼ばれるものの一種で、たまに人の負の「気」が集まって発生することもあるが、ほとんどの場合、今俺たちがいる世界とは別の世界から、やってくる」

一ノ瀬と花梨は、その瞳を驚きの色に染めながらも、真剣に俺の話聞いてくれている。

否定したいが、昨日のことがあった以上、認めざるを得ない、だから少しでもその「認めたくない現実」について知りたい、といったところだろうか。

「・・・それって要するにアレが「地獄」から来たってこと？」

「それはわからない。だけど、まあ俺達の想像を超えた世界、ってことだけは確かだ。そして問題は、なんらかの原因でこの村がその「別の世界」と部分的に繋がってしまった、ということだ」

そこで一旦言葉を止め、二人の様子を伺う。

花梨の不安そうな瞳と対照的に、一ノ瀬の眼差しは何かを決意したように、強い。

「だが、その溢れた鬼どもを退治するために俺がいる。一ノ瀬や花梨はもちろん、村人の誰にも危害が及ばないようにする。だから・・・」

だから、安心していい、とか、もうかかわらないほうがいいとか――

言つべきことがたくさんありすぎて、結局俺はそこで言葉を切つてしまう。

「・・・貴弘は、一人でその鬼と戦つて、大丈夫なの？平気なの？」正直、俺だけでは力量不足は明らかだ。が、ここで心配させるようなことを言つてもしかたがない。

「もちろんだ。・・・だからこのことは、誰にも話さないでくれ。無用な混乱は避けたい」

「・・・ん、わかつた。貴弘がそう言うなら・・・でも、私たちにできることがあつたら、何でも言つて。協力するから」

花梨は昨日のことがあつた今でも、「友達」として俺に接してくれる。

「・・・ああ、そのときは、頼む。一ノ瀬も・・・」

「荒川君は、今日は神社に来ますか？」

それまで黙っていた一ノ瀬が、俺の言葉をさえぎる。

「え・・・ああ、行こうと思つてるけど・・・」

教文さんとも、いろいろ話さないといけないしな。

「じゃあ、そのときに聞いて欲しいことが・・・」

「ご、ごめんなさい！・・・お待たせした・・・みたいで・・・」薬を飲むと言つて席をはずしていた瀬田が、こちらへ駆け寄ってくる。

「・・・えと、まだご飯・・・食べてるんですか？・・・お昼休み、終わっちゃいます・・・けど・・・？」

「ん？まあ・・・な」

そのとき、瀬田の言つとおり、昼休みの終わりを告げるチャイムが、鳴った。

その後は、一ノ瀬や花梨もいつもと同じように過ごしていた。極度の混乱や悲観的になつてはいないようだったし、ひとまず安心といったところか。

そして、その日の授業が全て終わる。

・・・とりあえず、このまま直接一ノ瀬神社に向かうことにするか。昼休みに一ノ瀬が言いかけたことも気になるしな。美々子も、たぶんそこにいるだろうし。

俺は、ただ長く続く田舎道を、一ノ瀬神社に向かう。

いつ見ても、見事なもみじだな。

風もないのにもみじが降り続ける境内を、本堂に向かって歩く。

見えてきた本堂の、その縁側に、いつものように一ノ瀬は座っていた。

「・・・・・・・・」

一ノ瀬は俺を見つけると、ふっ、と微笑んだ。

「こんにちは、荒川君。こちらへどうぞ。祖父がお待ちです」

立ち上がり、俺と教文さんがいつも話をするのに使っていた部屋を示す一ノ瀬。

「・・・？なんかいつもの一ノ瀬と違うような？

「・・・・・・・・」

一ノ瀬の後について部屋に入る。

「やあ荒川君。・・・まあ座って」

「え、あの・・・」

俺はチラ、といまだ部屋を出ない一ノ瀬を見る。

今この村が置かれていた状況は昼休みに話したし、第一俺は一ノ瀬を巻き込みたくない。この場にはいない方がよいのではないだろうか。

「今日は砌からも君に話があるのだよ。昨日、私が知りうる全ての情報を砌に話した。その上で、砌が考え、決めたことだ」

一ノ瀬が、「黄泉の門」や「邪悪なる存在」のことを知った上で、決めたこと？

「まずはそれから話そうか。砌」

はい、と返事をした一ノ瀬が、俺の方に向き直り、正座する。

「お願いします。私も荒川君と一緒に戦わせてください」

「・・・・・・・・！！」

「え！？教文さん、これは一体！？」

「砌が自分自身で考え、決めたことだ」

教文さんは自分自身にも言い聞かせるように、しっかりした口調で言った。

「しかし！！」

「荒川君。・・・私の話を聞いてください」

一ノ瀬は静かに、力強く言う。そのいつもの一ノ瀬からは考えられない気迫を感じた俺は、大人しく話を聞くことにする。

「私は、小さい頃から普通の人よりも多くのものを、見ることが出来ました」

一ノ瀬はとつとつ、と話し出した。

「実は、荒川君がこの村に来る以前から、漠然とした不安を感じていました。村の日のあたらないところには、黒い何か得体の知れないものが満ち、村の動物達が姿を消しました。・・・そんなとき、

荒川君。貴方が現れたのです」

俺は思わず唾を飲み込む。

「猫の式神を連れた貴方は、私の、この村では何か起こっているのではないか、という不安を決定的なものにしました。もしかしたら、この不安の元凶なのではないか、と思ったほんです」

・・・学校で初めて会ったときの、あの態度にはこういう理由があったのか。

「でも、荒川君が逆に、この村に起こっていることを解決するために来たことを知って、なにかお手伝いできないかってずっと考えていました。そして昨日、私は覚えていないのですが、私の力で、あの鬼を撃退したのでしょうか？だから・・・」

一ノ瀬は一度俯いてしまうが、すぐに顔を上げる。

「だから、私も荒川君と一緒に戦わせてください。少しでも、私にできることがしたいんです」

一ノ瀬が本気であるか、などという問いは、まさに愚問だ。

「・・・話を聞いているならわかっていると思うが・・・はつきり

言つて、今の状況はこちらにとってかなり不利だ。勝てる保障なんてどこにもないし、「黄泉の門」や「邪悪なる存在」に勝つには、最悪命をかけなければならぬ。・・・それでもか？」

「はい。覚悟は出ています」

即答する一ノ瀬。その瞳には、昼休みに見た、決意の色が再びうかんでいた。

「神主殿はそれでも・・・？」

「ああ、私は砌の意志を尊重する。それにね、いざというときには荒川君、君が砌を助けてくれると、信じているからね」

そんなこと言われたら、断る理由がなくなってしまうじゃないか。

「身勝手なことを言っているとはわかってる。だが、君がしようとしていることは、一人では難しいことは明らかだ。そして、砌には君を助けることができる力がある。・・・これは誰にでもできることではない」

くやしいが、私にも、ね。と教文さんは付け加える。

「・・・」

「お願いです。私、頑張りますから」

いくら民間人を巻き込みたくないと言つても、俺が負けてしまえば、この村の住人はおそらく全滅してしまうだろう。そういう意味では、すでに彼らは今回のことに、強制的に巻き込まれていると言える。

俺が負けたら、全てが息絶えてしまうのだ。

「・・・わかった。一ノ瀬、よろしく頼む」

ぱつ、と顔を上げる一ノ瀬。

「はい！がんばります！」

「・・・砌」

教文さんは、ああ言いながらも、その表情はどこか複雑そうな色をしている。

「約束ですよ？嘘だったら、今度こそ一ノ瀬家に代々伝わる一撃必殺の秘術を百回プレゼントなんですから」

・・・もしかして、それがあれば万事解決しないか？

「その秘術は、人間にしか効かないよ。それに効力を発揮するには、かなり複雑な条件が合わないといけないしね」
かなり複雑な条件？

「そう、最たるものは、この術は自分が好意を抱いている相手でない」と効果を発揮しない、という条件だね。・・・この条件のおかげで、この秘術はめったに使われない。使われないほうが良いに決まっているがね。そもそも、実在しているのかさえわからないんだ」
実在していても、そんな矛盾した条件をクリアできる人間はそうはいないだろう。一ノ瀬家秘伝だし。やっぱり、そうそううまくはいかないものだな。

「ふむ・・・じゃあ、一ノ瀬は、自分の『気』を操ることができるのか？」

今回のような異界のものを相手にするには、自分の『気』を操り、武器として使えなければ話にならない。異界のものには、実体のある現代兵器は効果がないからだ。

「えと、おじいちゃんに昨日から、お札の使い方を教わっていますか・・・」

「いや、基本的なことだけだよ。私たちは結界などの、受け身の術しか使えないものだからね。攻めの術や詳しいことは、君のほうから教えてやってほしい」

・・・ホントに大丈夫だろうか？

「早速今日から荒川君のお供をしたほうが良いだろう。時間がないからね。もうすぐ日が暮れるし、実戦で体得するしかないだろう」
そのとき、玄関の方から声。

——誰だ！？

「こんばんはー！！誰かいませんかー！！」
がくつ。

「このまったく緊張感のない声は・・・」

「おじやましーす。こんばんは、教文さんに砌さん。・・・貴弘さんもいたんですか？」

予想を裏切らず、美々子が襖を開け現れる。

「も、ってなんだも、って。それより、今日は遅いんじゃないか？」

「何言ってるんですか。今日は貴弘さんが帰ってから行こうと思つて、わざわざ一度民宿に戻って待ってたんですよ？」

ぶう、と頬を膨らませる美々子。

「そ、そうだったのか。それはすまなかつた」

「そうですよ、もう。それで、今日はなんですか？」

くるり、と砌の方に向き直り、猫耳をぴこさせる美々子。

か、変わり身が早い……。

「ええ、今日は桜餅を買つてあります。みんなで食べましょう」

さつきまでの張り詰めた空気はどこへやら。一瞬にして部屋全体がリラックスマードだ。

美々子、おそるべし。

「そうだね。真夜中まではまだ時間があるし。お茶にしようか」

いいのだろうか。こんなにのんびりしていて……。

「荒川君。確かにこれから私たちは命を賭けた戦いに臨む。だけど、だからこそ必要以上の緊張はほくしておいた方が良いと思うよ。あまり緊張し過ぎていても、体が動かなくなるだけだからね。……さてと、私も準備を手伝うかな」

「あ、私も手伝いますー」

台所に向かう教文さんの後を追う美々子。二人の会話が聞こえてくる。

「いやいや、命様は向こうでお待ちください」

「そんな『命様』なんてやめてくださいよ。私はただの使い魔なんですから」

答えながら、ネコミミをぴこさせる美々子。

……確かに『命様』は似合わないな。

「しかし、私の数十倍は生きてらっしゃる。年上の方は敬われるべきですよ」

「そうですかー？にはは、なにか照れますね」

なんか面白くない。それに俺、教文さんとうまくやってるよな・・・？

「はい。おまちどうさまです」

お盆に桜餅を満載した一ノ瀬が言う。そのあとにお茶を搭載した教文さんが、そして美々子が続く。

「さあ貴弘さん！食べますよー！」

ちなみに、結局美々子は何も運んでいないのだった・・・。

昼の面影など微塵もなくなった、夜。

暗闇に染まった「負の気」がその濃度を増し、よりしつこく身体にまとわりつく時間。

その日の探索は、一ノ瀬の特訓初日ということもあり、村の周辺を探索することにした。

「そういえば一ノ瀬」

「はい？何でしょう」

隣を歩く一ノ瀬に聞く。

「一ノ瀬は、術式について、どのくらい知ってるんだ？」

まずはこれを知らない、特訓のやりようがない。

「本当に基本的なことだけです。でも、もう一度教えてもらえると、助かります」

つい昨日まで一般人だった一ノ瀬にとっては、確かにすぐに術式を理解することは難しいかもしれない。だが、昨日の一ノ瀬を見る限り、自分の『気』を操り、戦えるようになれば、心強い味方になるのは間違いない。

「そうだな。じゃあ、まずは『気』について説明しようか。『気』というのは、体の中に流れる『精神的なエネルギー』のことだ。別に体の中で、化学反応によって作られるわけではないから、主に精神の強弱や体質によってその大小は変わる。・・・ここまではいいか？」

こくん、と頷く一ノ瀬。

「そして、この『氣』を自然の物体に送り込んで、自然には起こりえない現象を起こすのが『術式』だ。これには教文さんたち神主が得意とする守備力重視のものや、昨日俺が使った対象の攻撃力を上げるものなど、すでにかんりの種類が編み出されている。熟練者ならなにも使わずに、対象に直接自分の『氣』を送り込めるが、俺のような新米は自分と『氣』を送り込む対象の間に、スムーズに『氣』を送るための『媒介』が必要だ。これはまあ、西洋魔術という杖や水晶みたいなものだ。これらは『媒介』のほかに、術者の『氣』を増幅させる『氣力増幅器』みたいな役割もあるから、後者の理由で、熟練者が使う場合も多々ある」

そこで一呼吸おく。ここからが長いんだよな・・・。

「そこで、俺たち陰陽師が一般的に、この媒介に使用するのが『札』だ。『札』は紙と筆さえあれば簡単に作れるし、個別に効果を変えることも出来る。基本的に使い捨てなのが欠点だけだ。『札』はそれに描く言葉の『言霊』によって、『氣力増幅器』の役割を果たす。『札』の使い方としては、自分の『氣』を『札』に流し込めばいいんだけど、まずはそこからだな。さっきも言ったけど、『氣』というのは精神的なものだから、目に見えない。だからイメージするしかないんだ。イメージとしては、『札』を自分の一部にして、そこに自分の中の『氣』を集中させるというか・・・すまん、なんか上手く説明できない」

俺はポリポリ、と頭を掻く。

その様子に、いままで一語一句聞き漏らすまい、と黙って聞いていた一ノ瀬がくすり、と笑う。

「実際に出来る人は、そういうものかもしれないね」

「とにかく、まずはこれが出来ないといけないに進めない。この辺を回り終わったら、神社に戻って特訓しよう」

「はい、わかりました」

「貴弘さん貴弘さん。なにかカマドウマの鳴き声が聞こえませんか？」

こいつ、やけに静かだと思ったら・・・そういえば、カマドウマって鳴くのか？

「命さん、周りの様子はどうですか？」

「はい。今のところ異常なものは感じられません」

「そうか・・・じゃあ神社に帰ろう。一ノ瀬の特訓をしないとな」

その後一ノ瀬神社に戻った俺たちは、しばらく一ノ瀬の特訓に付き合ひ、民宿「花月」に戻ることにした。

「今日も見つけられませんでしたね。『黄泉の門』と『邪悪なる存在』」

「花月」へ向かう道で、美々子が言う。

「そうだな。もうそろそろ動きがあってもいいと思うけどな」

昨日の鬼は、おそらく『黄泉の門』から溢れる『気』から自然発生した、いわば「イレギュラー」的な存在だろう。でなければあそこで俺たちを襲う理由が見当たらない。

「あんなに強力な鬼を、意識せずに生み出すほどの膨大な『気』を、一体どんな方法で隠しているんでしょうね」

問題はそこだ。その方法さえわかれば、こっちから打って出られるし、姿が見えるから、対策も立てやすいだろう。

しかし、その方法が皆目見当つかない。

俺だって、荒川家の跡取りとして、いままでその道のエリートになるための修行を積んできている。

・・・しかし、わからない。

この世界のものでないものが、この世界に存在するということは、それだけで何かしらの痕跡は残してしまうものだ。ましてやあんなに強力な『気』を隠し通すことは、並大抵なことではない。

「一体どんな方法で隠れているんだ？陰陽師が見当もつかないなんて、ありえるのか？」

「貴弘さん、貴弘さん」

深く考え込みすぎて、独り言を言っているのに気付かない俺の服を、

美々子が引つ張る。

「もう着きましたけど？」

見ると、いつの間にか「花月」に到着していた。

「ああ・・・そうだな」

俺は考えるのを中止して、民宿の扉をガラガラ、と開ける。

玄關では、典子さんが出迎えてくれた。

「おかえりなさいませ、荒川さん。今日はお夜食をお作りしましたので、良かったら召し上がってください」

典子さんが夜食を作ってくれるなんて・・・この五日間で初めてのことだ。まあ、単に俺が頼まないからなのだが。

「もちろん頂きます」

「はい、でしたらこちらへ」

「典子さん。もしかして、本当に作ってくれたんですか？」

先を歩く典子さんに、何事か話しかける美々子。

「ええ、もちろんです。他ならぬ美々子さんのお願いですからね。腕によりをかけましたよ」

「わぁーっ♪楽しみですよっ♪」

うきうき、と軽やかにステップを踏む美々子。

・・・おい、なんか嫌な予感がしてこないか？

そしてついに、いつも食事をする食堂に到着する。

その中央のテーブルに広がる料理は・・・

「はい。ジンギスカンです」

「やったー！ジンギスカン！ジンギスカンですよ貴弘さん！！」
乱舞する美々子。

・・・そう、なにを隠そう、ジンギスカンは美々子の好物なのだ。
——ジンギスカンとは、もともと成吉思汗と書き、蒙古帝国初代皇帝チンギスハンのことである。今に言うジンギスカンは、その昔、ジンギスカンが戦いの際に軍勢を鼓舞するために、野外で羊肉をあぶり焼いて兵士に食わせた、という伝説から「ジンギスカン」とよばれるようになった、いわば「ジンギスカン料理」とでも呼ばれる

べきものを略したものである――

「なにぼうつとしてるんですか、貴弘さん？」

はっ！しまった。夜食にジングスカン、というあまりの理不尽さに、つい現実逃避してしまった。

「・・・これ、夜食ですよね？」

「はい、連日の激務でお疲れでしょうから、スタミナをつけて頂こうかなと。それに、美々子さんが荒川さんもジングスカンが大好き、と言っていたので・・・」

で、夜食にジングスカン、ですか。・・・美々子やつ。

「はーやーくー！早く食べましょうよ貴弘さん！ジングスカンが悪くなっちゃいますよ！」

まあ、せっかく典子さんが作ってくれたんだもんな。すこし頂くか。・・・明日の胃袋が心配だが。

さつさと自分の席に座り、羊肉を焼きはじめ美々子。

「おおー、新鮮なお肉ですねー」おいしそうです」

・・・あれ？この村って今は外界と隔離されてしまっているんじゃない？

「実は商店街のお肉屋さんに頼み込んで、最後の一匹だったのを譲って頂きました」

と言ったって・・・この状況じゃあ羊肉はかなりの貴重品だろうに。っていうか『一匹』？

「いえ、いつもの倍積んだらアツサリ譲ってくださいました」

・・・倍？それってもしかして、組織のお金？？

「貴弘さん！食べないなら全部食べちゃいますよ！」

美々子から殺気がみなぎっているのがわかる。どうやればジングスカンに関わるだけでこんなに血の気を多くできるのか。まったく謎だ。

結局、美々子はなかなか箸の進まない俺を叱りながら、ちゃっかり俺の分のジングスカンを半分以上食らい尽くした。

美々子にこんな恐怖を感じたのは初めてだ。これが最初で最後であることを切に祈る夜だった・・・。

その後、最後の羊肉を食らってもまだ足りない、と喚く美々子をなだめて風呂に入れさせ、俺も風呂に入って床についたのは、次の日の出来であと数時間、という頃だった。

漆黒を極めた暗闇の中で、俺はぼんやりと『黄泉の門』とそれを守る『邪悪なる存在』について、考えてみる。

・・・いくら昨日の鬼が奴らの意思と関係なく、勝手に俺たちを襲ったものだとしても、奴らがいつまでも大人しくしているとは思えない。なにも異常がないからといって、安心するのは早い。

いや、むしろすでに敵はなにか手を打っていて、単に俺たちが気付いていないだけなのかもしれない。そうすると、敵はすでに俺たちを『敵』と判断したことになる。この村には俺や神主達という抵抗勢力がいる（奴らの眼中に入っているかは別として）から、俺や彼らに気付かれないように、なにか行動しているのではないだろうか。理由はなにか、と聞かれれば、奴らが俺たちを過大評価しているか、単に奴らの気まぐれとしか考えられない。

奴らが本気になれば、この村を消すことなど造作もないことだからだ。

「・・・こんなこと、いくら考えても意味ないか・・・」

とにかく、明日からはもつと周りに注意を払おう。

目を閉じる。今日も騒がしかったからか、眠りはすぐに訪れた。

同時刻――

また、人がひとり、食われた。

赤く濡れた唇を規則的に動かし、新鮮な生肉を味わう。

ばきばき、ばきん。くちゃくちゃ、じゅ、じゅ。ごくん。

その租借する音は、長い廊下に木霊し、やがて満ちる暗闇に溶けていった・・・。

「ぐうううあぁ・・・胃がぁあぁ・・・気持ち悪い」

朝一番に感じたものは、俺の胃の辺りから蔓延する、極度の胃もたれだった。

「貴弘さあん。胃が、胃があ。ムカムカしますううう——。はふう」

俺と同じように悶絶する美々子。量から言えば俺の3倍のジンギスカンを食べているわけだから、当たり前だ。

「うう、とりあえず着替えはしとかないと・・・」

昨日のような奇跡は二度は起きず、今朝もやはり遅刻ぎりぎりの時間だ。遊んでいる時間はない。

立つこともおぼつかないので、這って制服までたどり着く。すると、ガラリ、と襖が開いた。

「やっぱり胃もたれには、キャベ。ンが良いと思いますよ。というわけで、はい、どうぞ」

典子さんは突然現れたかと思うと、呆然とする俺に医薬部外品を手渡し、現れたのと同じように、突然襖の向こうに消えた。

・・・とりあえず、飲んでみるか。このまま地面を這いずって学校に行くわけにはいかないしな。・・・一応、典子さんに感謝しよう。

「どうしたんですか？ 顔色が良くないようですが・・・」

心配そうに俺の顔を伺い見る一ノ瀬。その心使いが素直にうれしい。

「貴弘、もしかして変なもの食べた？ 落ちていたものを拾って食べたとか」

俺の苦悶の表情を、半分面白いものを、半分ご愁傷様、といった感じの目で見ている。

「さ、さすがにそれはない、ぞ」

あながち外れてもいないが。

「ふーん。まあ、貴弘ならそうやって一日唸ってれば、明日には楽になってるんじゃない？」

「え？ 楽になる？・・・ってどういうこと？」

花梨の言っていることが、イマイチ理解できていない一ノ瀬。俺も

だけど。

そんな一ノ瀬の問いに、花梨はこう答える。

「こう、コロツ、と？みたいな」

おい、死んでないかそれ。

この歳で黄泉の世界に行く気はない。いつつ・・・ツツコんだらまた胃が・・・。

「え・・・、あの・・・」

もうおなじみの、背後からの声。

「おう、瀬田か。おはよう・・・」

振り向きながら笑いかけてやる。その笑顔は引きつっていたが。

「えう・・・あの・・・その・・・これ」

瀬田はおずおず、と手を差し出す。その手には、赤と白の錠剤が何粒か。

「・・・赤と白のつぶつぶ？なんの薬だ？」

「・・・えあ・・・その・・・ふく・・・うの・・・」

相変わらずどもってしまふ瀬田。・・・しかし、それだと先に進めないのだが・・・。

「たぶん、あつみがいつも携帯している、痛み止めだと思います」

見かねた一ノ瀬が通訳してくれる。正直ありがたい。

「そうか・・・いいのか？」

瀬田はボツ、と顔を赤くしたかと思うと、コクリ、と頷いた。

「じゃあ、遠慮なくいただくな」

瀬田の手から錠剤を取り、水なしで飲み込んでしまう。

「水なしは危ないですよ。薬が喉に張り付きちゃうんですから」

俺の様子を見ていた一ノ瀬が注意する。

「ああ・・・まあ、気を付けるよ。それより、よくこんなもの持ってたな。おかげでたすかったけど」

小さな錠剤のケースをしまおうとしていた瀬田に感心する。

「え？・・・え、え・・・じ、実は・・・」

「ほら、昨日も言いましたよ。あつみは、今ちよつと体の調子が悪

いんです」

「またもや一ノ瀬が通訳する。そういえば昨日言ってたかもな……。痛み止めの薬を持ち歩くなんて、そんなにひどいのか？」

それを聞くやいなや、慌てて否定するように手を振る瀬田。

「い、いえ、最近は落ち着いてきて、その、なんというか、……ごくたまに、痛くなることとかがあるから……」

それは大丈夫なのか？……今まで一度も倒れたことのない俺にはわからないのかもしれないが。

「う、うん。……ありがと」

「え？なにか言ったか？」

「う、ううん。……なんでも……ないです……」

「？」

今、確かに瀬田が何か言っていたような……。

「ちよつとおふたりさん。お取り込み中すみませんが。……先生、来てるよ？」

花梨の指差す先には、今まさに教卓にたどり着こうとする担任の姿があった。

「わ、いつの間に！花梨サンキュ。瀬田も、早く自分の席に戻った方がいいぞ」

「……え、う、うん」

体を反転させ、早足で自分の席へ急ぐ瀬田。

「……」

瀬田を目で追いつつ、俺も席へ着席する。

「よかったです。ホントに」

隣の一ノ瀬も瀬田を見ながら、俺に言った。その表情は、とても嬉しそうだ。

「……何がだ？何がそんなに良いんだ？」

「あつみですよ。昨日荒川君と始めて会ったときから、本当に楽しそうです」

思わず瀬田の方に顔を向けてしまう。彼女は既に席に着席し、じっ、

と正面を見つめている。

「・・・そうか？・・・まあ、一ノ瀬が言うならそうなのかも知れないが・・・」

以前の瀬田を知らない俺には、違いなどわかるはずもない。しかし、一ノ瀬は断言した。

「はい、もちろんです。ですから・・・」

一ノ瀬を見る。一ノ瀬は顔をうつむき加減にしていた。

「だから、友達としてでかまいません。私たちと同じように、彼女とも接してくませんか？」

一ノ瀬はなんだか深刻な顔をしているが、俺にはその理由がわからない。瀬田はどう見たっていい奴だ。そんな彼女を拒否するなんて俺はしないし、する気もない。

「・・・そうですか、よかったです・・・」

俺の答えを聞いて、一ノ瀬は一瞬顔を上げ、そして安堵したように微笑む。

「なにをそんなに・・・」

「こら荒川！！いつまでもよそ見してるんじゃない！！」

先生が教卓に着いても意に介さず、話を続ける俺たちにたまりかねた先生が怒鳴った。

「え？なんで俺だけ？」

「目に入ったからだ！わかったらさっさと教科書を開け」

そ、そんな理不尽な・・・。

ちら、と一ノ瀬を見ると、彼女は「ごめんなさい」というふうに顔の前で手のひらを合わせていた。

「ところでさっ、せっかくあつみが学校に来て全員揃ったんだからさ、なにかしようよっ！」

いつも通り屋上で、もうお馴染みのメンバーで弁当を食べていると、突然花梨が言い放った。

あまりに唐突だったので、俺たちは反応するのに一瞬遅れを取ってしまう。

その遅れを理解していない、と取ったのか、花梨はもう一度繰り返す。

「ねえ、せっかくだからさ、みんなでなにかしようよ」

「・・・いや、わかつてる。それはわかるが、するってなにを？」

「え？うーん、砌はなにがいい？」

何も考えずに言い出したのか、一瞬考えたあと、結局一ノ瀬に振る花梨。

「うーん、せっかくのあつみが学校に来たお祝いなんだから、あつみがしたいことをするのがいいんじゃないかな」

ふと、みんなの視線が瀬田に集中する。もちろん赤面する瀬田。

「え？・・・ええ！？・・・えと」

「あつみがしたいこと、なんでも言つてよ」

花梨のこの言葉に、一生懸命考えをめぐらす瀬田。しかし、なかなか考えがまとまらないようだ。

「・・・まあ。俺たちに出来ることならなんでもいいと思うぞ」

なぜかチラチラ、と俺ばかり見る瀬田に、俺の意見を言う。

「え？そ、・・・そうかな・・・じゃあ・・・」

「じゃあ、なに？」

花梨が身を乗り出す。俺と一ノ瀬も瀬田の言葉に意識を傾ける。

「・・・じゃあ・・・」

突然すつ、と指を指す瀬田。その先は。

「・・・山？」

それはフェンスを越え、その向こうに見える山々を指していた。

「・・・えと、うん・・・喜井山^{よしいさん}・・・一度・・・登ってみたい・・・な」

上目づかいでみんなの様子を見る瀬田。

俺にはどれが喜井山かわからないが、見たところどの山もあまり高くない。

「まあ、登れないこともないと思うが・・・二人はどうだ？」

一ノ瀬と花梨に同意を求める。二人は当然のように、首を縦に振った。

「もちろんオツケーよ。喜井山なら、中腹ぐらいまでなら日帰りも余裕だし」

「ここ数日天気も良いですし、きっと楽しいと思います」

「よし。満場一致のうえ、可決だな」

自分の意見が通るとは思っていなかったのか、驚く瀬田。

「・・・え？いいの？・・・」

「もちろんよ！あつみがしたいことしよう、って言い出したの私たちなんだし。それに、お金もかからないんだから最高じゃない！」

「では、いつにしますか？荒川君は、都合が悪い日とかがありますか？」
ポン、と手を打ち合わせた一ノ瀬が、俺に向き直る。

「・・・いままでの傾向から、鬼が昼間に出現する可能性は低い。だったら、一日くらいは大丈夫だろう。」

「いや、特にない・・・」

「やったー！じゃあ決まりっ！！」

俺の返答を聞き終わるかいなや、弾けるようにジャンプする花梨。なにげに高いし。

「じゃあさ、早速明日休みだし、行っちゃおうよ！」

「・・・え？・・・あ、明日？」

思いついたように言い出す花梨。

「そうだね、いいかもしれないね。荒川君とあつみは？どうですか？」

「俺は構わないけど」

「・・・わ、私も・・・大丈夫、です・・・」

顔を真っ赤にしながら答える瀬田。その指がありえないくらいに組まれている。

「そうと決まったら、早速四人で明日の予定を考えよう！」

こうして、俺たちは唐突に山登りをする事になった。一ノ瀬たち

は山登りには慣れている様子で、明日の準備話している。が、俺は山登りに関してあまりいい思い出がないので（この村に来るまでの山道含め）、正直あまり気乗りしない。

そんな俺が、なぜ山登りをすることに、あっさり賛成してしまったのか。

・・・なんでだろ？

やることのない俺は、そのことについて少し考え始めた。

・・・

結局、本格的な俺の参入はないまま、話し合いは終わった。

そして放課後、俺は村唯一の薬局でア。工軟膏を買おうか、真剣に考えていた。

明日の山登りの準備である。一ノ瀬たちは「何も必要ない」と言うが、やはり備えあれば憂いなしというし、応急セットぐらいは揃えておこうと思ったのだ。

一通りの薬品を買い揃え、俺は薬局を出る。外はもう夕暮れだ。冬が近づいているからというのもあるだろうが、俺がこの村に来てからの日没時刻の早まりかたは異常だ。おそらく『黄泉の門』と『邪悪なる存在』の仕業だろう。奴らとしても、やはり夜の時間が長い方が活動しやすいのだろう。

しかしいくら膨大な『気』を持っているからって、自然現象に干渉するなんて・・・。

思わぬところでこれから立ち向かう敵の強大さを感じ取ってしまい、しばらく呆然としてしまう。

「・・・あ、あのう・・・」

バツ、と勢い良く振り返る。このパターンは・・・。

「やはり瀬田か。どうしたんだこんなところで？」

制服姿の瀬田はビクリ、と体を硬直させていた。

「え、・・・いや、あの、・・・その」

必死に言葉を話そうとするが、まるでわからない。俺の振り向きの

ショックが瀬田をパニックにしているようだ。

「急に振り向いてスマン。とりあえず謝っておく。・・・だからまず落ち着け」

俺は瀬田の肩をポンポン、と叩く。もちろん俺は落ち着かせるためにやったのだが、何故か一層顔を赤くする。そんな顔を見ると、不意にカップラーメンが食べたくなってきた。そういえば最近食べてないな。

「・・・あわ、あわわ・・・あわわわわわわ・・・」

なんかやばそうな声が聞こえてくると思ったら、瀬田が自分の発した熱で茹で上がってしまうのではないか、と思えるほど顔を朱に染めていた。

「わっ！すまん瀬田！大丈夫か！？」

俺はバツ、と瀬田から離れる。瀬田の頭から湯気がぶしゅう、と立ち昇っているように見えるのは気のせいかな？

「・・・うん、あわ・・・あわわ・・・だい、じょう・・・あわ」
ついに臨界点を超えたのか、瀬田はパニック状態になってしまった。・・・人間の脳は自分の体温でオーバーヒートしない・・・よな？

「と、とにかく、ここは人目につく。あそこの公園に行こう」

俺は瀬田の手を取り、近くの公園に急ぐ。

瀬田はこくり、と頷き、俺に引かれるままになっていた。

「はあ、はあ。ここなら大丈夫だろ」

さっきの状況は、はたから見たら女の子を困らせる最低男にしかみえないものな・・・

そんな状況から抜け出すために、瀬田を半ば強引に引っ張って此处に移動したわけだが・・・

「瀬田も大丈夫か？」

後ろの瀬田に振り返る。

「はあ、はあ、はあ・・・だいじょ、う・・・ぶ・・・」

言葉とは裏腹に、膝からガクン、と崩れる瀬田。

「瀬田!!」

俺は全力で両手を差し出し、なんとか地面に着く前に瀬田の体を引き止める。

「はあ、はあ、はあ!・・・ほ、ほんとに、大丈夫・・・だから・・・」

真っ青なその顔は、俺に抱き止められたと知ると一瞬真っ赤に染まったが、すぐに真っ青に戻る。

「と、とにかく、ベンチに座って休もう。な?」

瀬田に肩を貸しながら近くのベンチに移動する。どこにでもある、普通のベンチだ。瀬田を先に座らせ、隣に俺も座る。

「はあ、はあ・・・ふう、はあ・・・」

ゆっくり深呼吸する瀬田。顔色も多少良くなったようだ。

「大丈夫か?あまり無理しないほうがいいぞ?」

「・・・うん・・・」

「今日はもう休んだほうがいい。なんなら家まで送ろうか?家、この近くか?」

俺は先に立とうとするが、不意に右手が引つ張られた。

見ると、瀬田が右手の裾を掴んでいる。

「瀬田?」

「大丈夫。もうちょっと休めば大丈夫だから。だから・・・」

引つ張られるまま俺は再びベンチに座る。すると瀬田がそっ、と寄りかかってきた。

「・・・だから、もう少しだけ、こうさせてください・・・」

「お、おう。それぐらいなら朝飯前だぜ」

普段は大人しい瀬田の、突然のイニシアチブに動揺する俺。それはわけのわからない返答となって現れた。

「・・・ありがとう・・・」

瀬田の顔がほんのりと上気しているように見えるのは、果たして夕焼けのせいだろうか。

・・・しかし、いくらパニックを起こしていたとはいえ、少し走っ

たくらいで倒れてしまふなんて。

瀬田の病気は、俺が思っている以上に深刻なのかもしれない。

しかし、だったらなぜ瀬田は学校に来ているんだ？せっかく治っていたのに、今俺が走らせたから再発した？いや、それぐらいだったら、まだ入院が必要なはずだ。

思考の袋小路に入り込んだ俺は、すぐ隣に問題の張本人がいることを思い出し、答えを仰ぐことにする。

「なあ、瀬田……」

「……すう……すう……」

隣の瀬田からの返答は、安らかな寝息だった。疲れて寝てしまったようだ。

「……まあ、いいか」

きつと杞憂だろう。こんな安らかな寝顔が出来るなら。

俺は空を見上げる。赤から紫、そして漆黒へと空の色が移ろいでいくのを、じつ、と見ていた。

しばらくして、普段の調子を取り戻した瀬田を見送った俺は、そのまま一ノ瀬神社に来ていた。もちろん美々子とも合流済みだ。というか、俺より先にここにいた。

「はぐはぐ。いやーそれにしてもこの桜餅はおいしいですねえ！」

「ふふ、それは良かったです」

例によって一ノ瀬の用意した和菓子を嬉々として頬張る美々子と、その様子を楽しそうに見ている一ノ瀬。

「……」

なんだかさつきから一向に進展がないのは気のせいかな？少なくとも美々子が桜餅を消費している限り、いずれ桜餅がなくなるはずなのだが……。

「……では、荒川君」

小一時間の後、ようやく一ノ瀬がこちらに向き直る。美々子はまだ食べているが。

・・・数量無制限？

時計を見ると午後六時。特訓開始の時刻だ。

「よし、まずは術式の基礎を練習したあと、村の探索に行こう」

はい、と一ノ瀬は返事をする、部屋の隅に置いてあった手提げ袋を手に取る。特訓に使う道具類をまとめて準備しておいたようだ。

「ほら、美々子。いつまでも食っていると置いてくぞ」

「ふあふ、ふあつてくらはいよー（あう、待つてくださいよー）」

俺が脅すと、美々子は慌てて食べるのを止め俺の方に来ようとする。

「・・・・・・・・」

しかし、はっ、と何かに気付いたように立ち止まった美々子は、未練がましく桜餅を振り返った。

「・・・・・・・・にゃ」

そして懷に桜餅を忍ばせる。よほどおいしかったらしい。

「・・・済んだなら行くぞ」

「にゃっ！！」

俺が既に先に行っていると思っていたのか、ビクリ、と体を振るわせる美々子。

「こ、これにはわけがありましたですね、あの、その・・・」

「わかった。わかったからさっさと外に行くぞ。一ノ瀬が待ってる」

神社の裏手では、既に一ノ瀬が特訓の準備を終えていた。教文さんの姿もある。

「遅かったですね。なにかありましたか？」

髪を後ろでまとめた一ノ瀬がこちらに気付く。

「まあ、ちよつと、な。一ノ瀬、アレは用意できてるか？」

「はい。あそこに」

一ノ瀬が指し示す先、そこには・・・習字セット。しかし半紙はない。

「・・・ああ、わかった」

・・・この際贅沢は言ってられないもんな。

それを確認した後、ようやく今日の特訓内容を説明する。

「今日から本格的に術式の基礎のひとつである「札」を媒介にした術を練習しよう」

こくん、と頷く一ノ瀬。そして質問する。

「でも、札がありませんけど……。どうするのですか？」

「その心配はない。これから一ノ瀬に用意してもらった習字セットで作成する。札の作成は、一日二日では習得出来ないから、とにかく札の扱い方だけマスターするようにしよう。質問がなければ、俺は練習用の札を作るから、ちょっと待っていてくれ」

俺は一ノ瀬が用意した習字セットの前に座り、懷から細長い紙を取り出す。札に使われる標準的なサイズの紙だ。

そこに術を施す。術といっても、紙の表面に、その術式が発動したときの効果などを説明した文と図形を織り交ぜた紋様を描き、そこに『氣』を送り込むだけだ。

なので、練習用札の作成は簡単に終わる。まあ、簡単といっても、札に描く紋様は術によって違うので、それを覚えなくてはならないし、氣の送り方もコツがあるので、初心者にとってはやはり難しいだろう。慣れればそんなことはないのだが。

「一ノ瀬、これに『氣』を送り込んでみてくれ」

札を受け取った一ノ瀬は、はて？、と首を傾げる。

「『氣』を送るのですか？この札に？」

「そうだ。一度やってみてくれ」

そう言われた一ノ瀬は、右手の親指と人差し指で札をつまみ、じ、と見つめる。

……。そのまま動かない。術式も発動しないようだ。

「……。わかった。一ノ瀬、ちょっとやめて貰っていいか？」

札をじ、と見るのをやめ、こちらを向く一ノ瀬。

「これから札に限らず、なにか人や物なんかには『氣』を送り込むときのコツを伝授するから、良く聞いてくれ。……。まず、『氣』を送り込むときは、あまり力まないでリラックスすることが大切だ。そしてイメージするんだ。『氣』は目に見えないものだから、それ

を移動させようとするときには、必然的にイメージするしかないわけだが、逆に言えばイメージ次第で簡単に扱うことも出来るというわけだ。で、そのイメージなんだが・・・」

俺も札をつまみ、目の前にかざす。

「あまり自分の『気』を流し込むことを意識し過ぎないで、指先がなんとなく暖かい感じぐらいの意識でいると、徐々に指先に『気』が集まってくるのがわかると思う。集まったら、今度はその気をそっと押し出すイメージで、ゆっくり札に流し込む。そうすれば自然に札に『気』を流し込めるハズだ」

「・・・はい、やってみます」

再び札をかざし、今度は目を瞑る一ノ瀬。

「・・・指先が、だんだんと・・・温かくなって・・・集まったら・・・押し出す・・・」

今俺が教えたことをぶつぶつ、と呟きながらひとつずつ実践していく。

「押し出す・・・自然に・・・押し出す・・・」

一ノ瀬の顔に一瞬力がこもった瞬間、札から火が噴出す。術式が発動したのだ。

「え？わ、きゃ！？」

突然のことに驚く一ノ瀬。手をぶんぶん、と振っている。

「札を放せ一ノ瀬！そうすれば止まる！」

俺の声が届いたのか、ぱつ、と手を放す一ノ瀬。すると火は収まった。

「はあ、はあ・・・ビククリしたあ」

肩で息をしている一ノ瀬。ほんのり涙目だ。

「でも、成功だ。やったな」

正直、一発で成功させるとは思っていなかったもので、俺も驚いていた。

「成功・・・私、やったんですか？」

「ああ、ちゃんと火が出ていただろ？あの札はああいう術式なんだ」

あんなに激しく噴出すようにした覚えはないのだが。俺の手違いか、それとも・・・

一ノ瀬を見る。彼女は自分がしたことが信じられない、という感じで自分の手のひらを見つめている。

「もう少し加減を練習しよう。ある程度コツがつかめてきたら、今夜も村の見回りに行こう」

一ノ瀬ははい、と返事をする、新しい札を取って特訓を再開した。・・・そういえば美々子はなにしているんだ？

さつきから姿の見えない美々子を探す。すると、境内の隅に丸まっている姿が。

「なにをしているんだ、あいつは？」

そー、と気付かれないように近づいてみる。が、うっかり砂利を踏んでしまった。その音に振り返る美々子。

「・・・にや・・・」

その手には桜餅がひとつ。そして口の周りにはあんこが付いている。

「・・・お前って奴は・・・」

「にやははは・・・ごめんなさい・・・」

一ノ瀬の特訓もある程度済んだので、俺たちは村の見回りに行くことにする。

今夜は以前に調査した、村はずれの廃病院にもう一度行くことにした。

美々子の話によれば、俺たちが調査した後にも、人が消え続けているらしい。

あの時は特に何も感じなかったのだが・・・、もう一度調査が必要だようだ。

「一ノ瀬。一ノ瀬はあの廃病院について、なにか知ってるか？」

真っ暗な道を、懐中電灯で足元を照らしながら歩いている一ノ瀬に聞く。

暗い夜道を、陰陽師の礼装を着た若い男と、巫女装束の少女と、ネ

コミミ装備の見た目幼女が、皆手に懷中電灯を持って歩いているのはかなり異様だ。

「うーん、詳しいことはあまり知らないのですが。あの病院は元々大戦中に作られた、軍施設のひとつだったらしくて、昔は色々な実験なんかしていたようです。でも、大戦が終わったあと、しばらくは国営の病院として利用されていたようですが、今はもう使われていません。私もここにお世話になったことはないです」

そんな情報は初耳だ。しかしこの建物、とても戦前に立てられたとは思えないのだが……。

「実は二十年ほど前に、再び医療施設として使えるように全面改装されたらしいのですが、何故か、結局使われないまま放置されているそうです」

以前この病棟の中で見た霊たちは、ただ単に病院で病死したとか、事故で助からなくて死んでしまった患者の霊だと思っていたが、もしかしたらそんな簡単なものではないかもしれない。

「とにかく、入ろう。なにかわかるかもしれない」

前回と同じように、正面玄関から中に入る。

「このあいだ調査したときには何もなかったが、人が消え続けている以上、この病院にはなにかあると考えたほうがいい。危険な事態になったら、一ノ瀬はすぐに逃げるんだ。いいな？」

「……はい、わかりました」

まだまともに術式の使えない自分が、戦闘に加わっても足手まといになるだけと理解しているのか、一ノ瀬は素直に頷いてくれた。

病院内は前回来た時と変わらず、人気はまったくない。そしてやはり真っ暗で静かだ。耳を澄ますと霊たちの苦しそうな呻き声が聞こえてくる。

今回は慎重に、一つ一つの部屋を見て回ることにした。

「でも、なんでいつもここでしか人を消さないんでしょうね」

ふと、美々子が言う。

「どうということだ？」

「だって、まるで自分の居場所を教えてるようなものじゃないですか。こんなことするのは、よほど頭が悪いかそれとも・・・なにか罠があるのか」

確かに、それはありえるかもしれない。用心するに越したことはないだろう。

周辺の警戒を強めるよう美々子に言おうとした、そのとき。

「シッ、貴弘さん。『負の気』です」

美々子が咄嗟に身構える。

「奴か？」

「いえ、まだわかりませんが、かなり強い『気』です」
ついにおいでなすったか。そう思った。

「発生源はこの病院内なんだな？」

コクリ、と頷く美々子。

「・・・よし。様子を見てこよう。一ノ瀬も後ろについて来てくれ。ひとりでは危険だ」

病室を出ると、そこには確かに微かな『気』が感じられた。

美々子は強い『負の気』と言っていたが・・・。力を抑えているのか？

暗い廊下を懐中電灯の明かりだけを頼りに、慎重に進む。

微かに感じ取れる『気』を辿っていく。時が止まったように静かな病院の中では、遠くで落ちる雫の音さえ良く聞こえる。その音だけが、今この時が止まっていなかったことを示していた。

ひとつの扉の前で美々子が振り返る。そこは一階の奥にある、重病患者用の病室だった。

俺は頷くと、扉に何の術式がかけられていないのを確認し、一気に踏み入った。

咄嗟に四方を見渡し、敵の姿を探す。しかし・・・

「・・・なにもいないぞ？」

病室には「邪悪なる存在」どころか、幽霊の一人もいなかった。

「え？おかしいですね、確かにここだったのに・・・」

美々子は目を閉じ、もう一度『氣』の出所を探る。

「！！貴弘さん！外です！」

「くそっ！俺たちに気付いて逃げたのか！！」

俺は廊下に飛び出し、『氣』の残滓を探る。しかし、まったく感じ取れない。

「命！」

「だめです、私にも感じ取れません！」

完全に気配を消したか。しかし早くしないと逃げられてしまう・・・。

「しかたがない。二手に分かれよう。俺は右を探すから命と一ノ瀬は左を頼む」

「はい、わかりました」

命と一ノ瀬は同時に返事をする、病室から向かって左、正面玄関の方に向かつて走り出す。

「深追いはするなよー！」

遠ざかる二人の背中に忠告する。その後ろ姿はあっという間に夜の闇の中に消えてしまう。

その姿を見届けると、俺は病院の奥に向かつて走り出す。まだ遠くには行っていないはずだ。

一つ目の角を曲がる。いない。次の角へ。

体全体を使ってうまくスピードを調節しながら、角を曲がる。その奥を見るとチラリ、とだが人影が見えた。どうやら外に出る気らしい。

「逃がすかつ！」

俺は一気に加速をつけ、人影が入った角を曲がる。しかしそこは行き止まりだった。

「！いない？」

真っ暗な室内にはやはり何の気配も感じられない。しかし引き返そうとしたその時、

「ごめんね、荒川君」

背後から声。そして同時に後頭部に鋭い痛み。

「つぐう！」

「おやすみ、坊や」

静かな、冷え切った声。まるで氷が喋っているような声だ。

「き、君は・・・まさ・・・か・・・」

振り返ることも叶わないまま、俺の意識は遠のいていった・・・。

「・・・ひ・・・さん・・・ひろさん・・・」

「くん・・・らかわく・・・しつかり・・・」

う・・・ん、なんだこの声は・・・？

「貴弘さん！貴弘さん！！」

「荒川君！しつかりしてください！」

目蓋を開けると、美々子と一ノ瀬が心配そうに俺を覗き込んでいた。美々子にいたっては額と額がくつきそうなほど近い。

「命？それに一ノ瀬・・・痛っ！」

起き上がるうとすると、後頭部に鋭い痛みが走った。そうだ、俺は・・・。

「ダメですよ、まだ動いちゃ！怪我をしているんですから、ちゃんと寝ていないと」

美々子に再び布団に寝かされる。一ノ瀬が薬と水を持って来てくれた。

「ここは・・・一ノ瀬神社？」

「そうです。荒川君、あの後病院で倒れているのを私たちが見つけて、急いで家まで運んで来たんです。・・・どうぞ、痛み止めです」
何粒かの錠剤を渡される。俺はそれを一緒に渡された水と一緒に流し込む。

「目が覚めたようだね、荒川君」

神主が廊下から姿を現す。その手には湿布が摘まれていた。

「本当は医者に診てもらわなければいけないのだが・・・現状ではこれが精一杯なんだ。許してほしい」

神主が俺の頭に湿布を貼る。ヒヤリ、とした感触を後頭部に感じた。
「つつ・・・大丈夫ですよ。これでも頭だけは固いんで」

「そうですね。貴弘さんは小さい頃、鬼ごっこをしているときに、鬼を交代したい一身体、友達の登っていた柿の木を頭突きでなぎ倒したんですから。頭の硬さは私が保証します」

ふふん、となぜか自慢げに胸を張る美々子。なぜお前が自慢げなんだ。しかし、今思い出すとなかなか壮絶な話だよな。子供のおかげで遅かったんだなあ、俺。

「とにかく無事でよかったです。倒れている荒川君を見つけたときにはどうなるかと思いました」

一ノ瀬が柔らかに微笑んでくれる。

「心配かけてすまないな。今回は完全に油断していた」
俺が謝ると、一ノ瀬はふるふる、と首を横に振った。

「いいんですよ。それよりも何か食べますか？おかゆ作ってきますよ」

立ち上がり、台所へ行くとする一ノ瀬。それを神主が引きとめた。
「いいから、おかゆは私が作ろう。砌は明日に備えて寝なさい。喜井山にハイキングに行くんだろう？」

神主も立ち上がると、一ノ瀬を自分の部屋に向かわせようとする。

「で、でも・・・」

「命様も、明日に備えてぐっすり休んでください。少なくとも、今日はもう襲ってはこないでしょう」

「え？しかし・・・」

ちら、と一ノ瀬と美々子が同時にこちらを見る。

「休んどけよ。俺はもう大丈夫だから」

俺にこう言われた以上、引き下がるしかない一ノ瀬と美々子。

「わかりました・・・では、おやすみなさい」

「くれぐれも無茶しちゃだめですよ」

大人しく自分の部屋へ向かう一ノ瀬。美々子も一緒に部屋に寝かせてもらうことにしていたので、一ノ瀬の後について大人しく部屋を

出て行った。

「では、私はおかゆを作ることにするかな。荒川君は大人しく寝ているんだよ?」

そう俺に言い残すと、神主も部屋を出て行った。

・・・言われなくても、今はとてもじゃないが動く気にはなれなかった。

病院で俺を襲った犯人について考えていたからだ。

・・・なぜ、なぜなんだ。なぜ、あいつが。

そう、俺はもう、犯人の正体に気づいていた。ただ、信じられないのだ。

犯人は確かに「荒川君」と俺の名前を読んでいた。だとすると、かなりの手がかりになるわけだが、それは同時に犯人が俺の知り合いであるということにもなるのだ。

そしてあの声は、いつもとは感じが180度違うが、確かに・・・頭の痛みがひどくなってきた。後頭部がズキンズキン、と痛い。俺は神主には悪いと思いつつ、もう一度眠りにつくことにした・・・。

目覚めると外は既に明るく、今が朝であることを告げていた。

「ん・・・もう朝か・・・」

ゆっくりと体を起こす。痛みはもうほとんどない。

「ふぁ・・・この天気なら今日のハイキングも大丈夫そうだな」
布団から起き上がろうと手を動かす。

ふに。

「・・・・・・は?」

右手に何かの感触が。見てみると・・・。

——　　一ノ瀬がいた。

どうやら昨日教文さんに自分の部屋に行かされた後、教文さんが眠った隙に起き出し、今まで俺の側にいてくれたらしかった。右手はその頬に触れていた。

「！！」

俺は咄嗟に右手を離す。頭は突然の事態にパニックを起こしかけていた。

「あ、一ノ瀬。これはその、違うんだ、ていうか、はは、天気がいなああ・・・」

もうなにがなんだかわからないが、必死に弁解する俺。

「すー、すー・・・んん・・・」

一ノ瀬からの返事は安らかな寝息だった。どうやら寝ていたらしい。・・・はあ???。なんだ、寝てたのか。つい安堵の溜息をついてしまう。なんだ、寝ていたのか。

一ノ瀬は本当に安らかな顔をして眠っている。布団に覆いかぶさっている上半身が規則正しく上下している。

気分が落ち着くと、今度はわざわざ戻ってきてくれた一ノ瀬に対する感謝の念が湧き上がってきた。

「そうか・・・一ノ瀬だって疲れていたはずだもん・・・」

早朝の柔らかな光が、一ノ瀬の顔を照らしている。そのせいか、いつもより無防備に見える。

一ノ瀬にとって昨日のことは、実際に戦闘はなかったとはいえ、初めての実戦だ。緊張からくる精神的な疲労はかなりのものだったろう。

しかし、こうして一晩中側にいてくれた。

「・・・ありがとな、一ノ瀬・・・」

一ノ瀬の艶やかな黒髪に触れようと手を伸ばす。そのとき、ガラッ。

「貴弘さん、ごはんですよー。そろそろ起きてくださいーい」

美々子が突然襖を開ける。俺は慌てて伸ばした手を引っ込め、なんでもない顔を作った。

「お、おう。もう起きてる。すぐに行くから、先に行つてくれ」
「わかりました」

美々子はすっ、と廊下の右手に消える。ほっ、と胸を撫で下ろす俺。

何で俺こんなに挙動不審なんだ？別に美々子に一ノ瀬と一緒にいるところを見られたって、ちゃんと説明すれば済むことじゃないか。

「あ、それと」

ひよこっ、と顔だけ襖から覗かせる美々子。

「なんでそこに砌さんがいるんですか？」

ドキッ。

「え？ああ、これは昨日の晩、看病していてくれたのさ」

「ふーん。そうなんですか」

心なしか美々子の視線が痛いんだが・・・。

「とにかく、ごはんですから。早く来てくださいね」

今度こそその場を離れる美々子。普段の生活の中で、あんなに鋭い視線を向けられたのは初めてだ。

「・・・なんでだ？」

しばらくそのことについて考えていると、一ノ瀬が目覚めたので一度部屋に戻し、俺は顔を洗うことにした。

「さあー！今日は待ちに待った喜井山ハイキング！」

花梨が既に今日何度目かわからない「宣言」をした。ちなみに俺が集合場所である学校に着いてから、まだ十分ほどだ。

「それにしてもあつまったら遅いですね。なにかあったのかな」

心配そうに言う一ノ瀬は私服姿だ。もちろん俺も花梨も私服だが、巫女装束の印象がある一ノ瀬の私服姿は新鮮だ。

「あ！来たよ。あーつーみー！！こっちこっち！」

花梨が手を振る。その先には瀬田がいた。

「はあ、はあ・・・ごめん・・・おそく・・・なっちゃって・・・」
急いできたのか、瀬田の息は荒い。

「いいよ、そんなことは。それより大丈夫？少し休む？」

一ノ瀬が瀬田に駆け寄る。俺はその様子を黙ってみていた。

「なにぼーっ、としてののよ」

肩をばんばん、と叩かれる。花梨だ。

「そ、そうか？」

「朝からそんな調子じゃあ、これからの山道楽しくないよ？もつとテンション上げて！ね？」

花梨は朝っぱらからそのテンションを維持するつもりなのだろうか。信じられん。

「んん、・・・大丈夫。・・・ちよつと息が・・・上がっただけ・・・だから」

「本当に大丈夫？」

「・・・うん」

「じゃあ楽しいハイキング大会、開始！」

瀬田の無事を確認すると、花梨は高らかに宣言した。

喜井山は、村を囲む山々の中でも比較的低い部類に入る山だ。

しかしそれゆえに気軽に登山が可能で、よく村の人々が気晴らしに登っているそう。小学校の遠足などでも登るそうで、子供達の遊び場にもなっているらしい。

今はもう紅葉の盛りも越え、どことなく色彩を欠いているが、それはそれで俺たちの目を楽しませてくれる。

花梨と一ノ瀬は登りなれているのか、獣道よりちよつとマシな程度の山道をためらいもなく登っていく。時折立ち止まって俺と瀬田のペースに合わせるくらいだ。

「瀬田は喜井山には登ったことないって言ってたっけ？」

俺は隣を歩く瀬田に声をかける。瀬田の表情はつらそうというほどではないが、決して楽そうではなかった。

「・・・え？・・・はい、そうです・・・」

「どうして？」

「私は・・・生まれつき、体が・・・弱かった・・・ので」

瀬田は恥ずかしそうに顔を俯けてしまう。しまった、失言だったか。

「あ、すまん、別に深い意味はないんだ・・・」

「違っんです。その・・・今はもう元気になって、それでこうやって・・・」

瀬田が顔を上げる。そこには恥ずかしさの中に、確かな喜びが浮かんでいた。

「みんなと一緒にことができる。それがうれしいんです」

「・・・・・・」

「あつみー！貴弘ー！もうすぐだから頑張ってー！」

先を進む花梨が俺達に呼びかける。いつの間にか距離が離れてしまっていた。

「さあ、俺達も行こうか」

「・・・はい」

俺と瀬田は舞い散る落葉を踏みしめ、歩を早めた。

「うーん、気持ちいいですね！」

「ほんとほんと！今日来て正解だったね！」

丁度お昼ごろにたどり着いた中腹の休憩所からの眺めは、まさに絶景だった。

「うわ、これはすごいな・・・」

「ふふ、でしょでしょ？ここからの景色は村で一番きれいなんだから」

花梨の解説を聞くまでもなく、俺は景色の美しさに圧倒されていた。

「さあ、時間も丁度良いですし、お昼にしましょう」

一ノ瀬が提案する。その手には既に弁当箱が握られている。

「いいね、お腹もすいたし。あつみも！ご飯だよ」

俺と同じように景色に圧倒されていたのか、じ、と村を見下ろしていた瀬田は花梨の声にはっ、と顔を上げる。

「う、うん・・・」

一ノ瀬のところに行くと、既にビニールシートが敷かれていた。各々それに座る。

「さーて、みんなお待ちかねの、お弁当お披露目大会の時間です！

まずは砌から！」

花梨を司会として、いきなりお披露目大会なるものが始まる。・・・
みんなお待ちかね、か？

「じゃあ行くよ、それっ」

なぜか勢いをつけて弁当箱のふたを開ける一ノ瀬。その中身は・・・
「うまそうじゃないか」

神主の家に育っただけあって、その内容は完璧な「和食」だ。焼き
魚と一緒にエビフライが入っているような中途半端な弁当とは違う。
そして梅干にきんぴらにひじきに浅漬けと渋いセレクト。思わず唖
つてしまう。

「むむ・・・さすがだね、砌。次はあつみ！お披露目どうぞ！」

「え？・・・う、うん・・・す？、えいっ」

息を吸った後、やはり勢いをつける瀬田。弁当のお披露目ってそん
なに勇氣があるものなのか？

弁当箱の中を覗いてみる。それは一般的な弁当と言えよう。ただし
主食は米ではない。麦だ。

「おお、サンドイッチか」

少し大きめの弁当箱に入っていたのはサンドイッチだった。中身の
セレクトは、卵、ツナ、トマト、ハムなど一般的だが、種類が多い。
これだけ作るのは大変だったろう。

「はあ??。あつみもやっぱりすごいね。・・・貴弘に負けるのは
シヤクだから先に出しちゃお！エントリーナンバー3番、有坂花梨
！行きまーす！」

バツ、とふたを開ける花梨。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「・・・えーと、その・・・なんだ、これ？」

俺は花梨の弁当箱の中に満ちている赤い物体について問う。

「え？なにつて、エビチリ」

「・・・エビチリ？」

あの中華料理の？

「そつだよ。ご飯はまた別にこつちにあるから」

はい。とタツパに入つた飯を茶碗によそり、はい、と俺に差し出す花梨。他の二人はなんと云つていいか判断を迷っているようだ。無理もない。

「・・・なんでまたエビチリなんだ？」

「簡単だよ。私の得意料理なんだ、エビチリ」

当然でしょ？といった顔で俺を見る花梨。

「・・・・・・・・」

簡単か？どこの誰が花梨「エビチリが得意つてわかるんだ？

「さ、次は貴弘の番だよ」

「俺の弁当はいつもと同じだよ。ほら」

いつもより大きめの弁当箱の中身、そこには・・・

「わあ、今日は気合入ってますね！」

・・・どこの旅館の懷石料理でしょうか、これは。

「ていうか、あそこは旅館で典子さんは旅館の女将だったな・・・」正直、すっかり忘れていた。今日の朝、着替えるために戻ったときに渡されたのだが、ハイキングに行くとは言っていない。きつと事前にこの情報をキャッチして、腕によりをかけてこの弁当を用意したに違いない。卵焼きもいつもの1.5倍だ。

情報の提供者は美々子か・・・

「よし！全てのお弁当が出揃つたところで、いただきますーす！」

その後の弁当争奪戦は、一言でいうなら『壮絶』だった。

「いいじゃんいつもより多いんだからさ。いただき！」

「あ！花梨お前人のぼっかり取るな！お前のもよこせ！」

「ほーら砌、私特製のエビチリですよー。たーんとお食べ？」

「わあ、ありがとう花梨。あつみのサンドイッチもおいしいよ。特にこのタマゴサンドの味付けが絶妙だね」

「う、うん・・・実は・・・隠し味に、バニラ・・・エッセンスが・・・」

「あー！花梨俺の魚の煮物食べたな！返せ！」

「一足遅かったわね。それはもう帰らないの。あきらめなさい」
・・・まあ、騒いでいたのは俺と花梨だけなのだが。

昼のお弁当お披露目大会、もとい争奪戦を生き残り、山を降りたときには既に周りの景色はみな赤く染まっていた。

「・・・今日は・・・楽しかった・・・ですね」

学校までの帰り道で、隣を歩く瀬田が話しかけてきた。

「ああ、こんなに楽しかったのは初めてだ」

「ほんと・・・楽しすぎるよ・・・」

「瀬田？どうした？」

瀬田は目を細め、辛そうな顔で少し先の地面を見つめていた。

「どこか具合が悪いのか？」

瀬田はふるふる、と首を横に振る。だったら一体・・・

「い、いえ・・・なんでもないんで・・・」

「こおらー！！貴弘ー！！」

足？

「ぐふっ！」

花梨の『助走つきドロップキック改』が顔面にヒット。仰向けにダウンする俺。

・・・なんで？

「あつみを泣かすたぁいい度胸じゃん？・・・血い見るわよ？」

ポキ、ポキ。

「い、いや誤解だ！俺はなににも・・・」

「問答無用！成敗するよ！！」

そのとき、俺に襲い掛かろうとする花梨の肩に、そっと手が置かれる。瀬田だ。

「やめて、花梨。なんでもないの。荒川君のせいでもない。・・・だからやめて」

「本当に大丈夫？家まで送ろうか？」

心配そうに瀬田の顔を覗き込む一ノ瀬。しかし、瀬田はその申し出を断る。

「大丈夫。家までは・・・すぐそこだから。・・・ありがとう」

すると足早に道を行ってしまう。俺たちはその後ろ姿を見つめるしかなかった・・・。

その夜、俺と美々子、そして一ノ瀬は、再び例の廃病院に来ていた。『黄泉の門』の手がかりらしきものが他にない以上、当然といえば当然なのだった。それに、昨日の人影が村人の行方不明事件と関係があるのかもわかっていない。

「来るたびに思っんだが、この病院ってかなり村のなかで浮いてるよな」

真っ白い外壁を、着々と侵食しているツタ植物を見上げながら言う。

「そうですね、この村の建物の中では一番新しいですし、国の公共事業ということで、かなりのお金がかかっているみたいです」

「だから今でもある程度綺麗なんですね」

今日も俺達が来るであろうことは、昨日の人影もわかっているだろう。無意味に隠れたりせず、昨日と同様に正面玄関から入ることにする。

「おじゃましてーす」

と小声であいさつする美々子を先頭に、続いて俺、一ノ瀬という順番で中に入る。

病院の中は相変わらず暗いが、ところどころでは月明かりが差し込み、まるでぼんやりと発光しているようで薄気味悪い。

「とりあえず、昨日人影を見つけた病室に行こう」

あまり物がない廊下を奥へと進む。月明かりのせいで浮遊する埃が良く見える。

「今日も現れるでしょうか」

一番前を注意深く進みながら、美々子が聞く。

それは正直、五分五分だと思っている。それに昨日の人影が『黄泉

の門』と関係があるのかもわからない。

それはそのまま、ここでもうしていることが意味のある行動であるのか、その確率だ。

単純計算で25パーセント。

俺は、正しい選択をしているだろうか。俺の選択如何でこの村は・

・「ちよつと荒川君？大丈夫ですか？」

いつの間にか横に並んでいた一ノ瀬が、心配そうに俺の顔を覗き込んでいる。

「なんだかこわい顔してましたよ・・・」

そして、一ノ瀬は怯えているようだった。そうだ、頼みの綱の俺が弱気でどうする。

「・・・すまん、一ノ瀬。なんでもない・・・」

そうだ、昨日の声は・・・空耳かもしれないじゃないか。きっと・

・「美々子。どうだ？」

「もうすぐ昨日の病室ですが・・・今のところ何も感じられないです
すね」

キヨロキヨロ、と周りを見渡しながら慎重に進む。

だが、もし今日もこの病院にいるとするなら、こんなにすんなりとここまで進入を許すだろうか。

俺の胸に不安がよぎる。もし、他の場所に移動してしまっていたら。そして、ついに病室に着く。見た目は何も変化はない。果たして中には・・・

「では、開けます」

美々子は扉の前でしばらく中の様子を探った後、俺たちに確認するようにつづ。

俺はただ頷き肯定の意を表すのと同時に、一ノ瀬に札を準備させる。戦闘、開始だ。

美々子がドアノブを捻るのと同時に、中に踏み込む。一ノ瀬も一歩

遅れて後続く。しかし、

「……いない、か」

病室は、ただの病室だった。もちろん強大な『気』を持つ人影なんていない。

「うーん、逃げられましたかねえ」

「かも、しれないですね」

がっかりした様子の美々子に対して、ほっ、とした様子の一ノ瀬。俺はといえば、どちらかといえばほっ、としていた。

……よかった。いなくて。

いたら、やはり戦闘になっただろう。そうならば、あの人影に攻撃しなければならぬ。あの人影はもしかしたら……

「汝らは、何者だ」

！！　そのとき、声。

「誰だ！？どこにいる！？」

「貴弘さん、廊下です！」

慌てて廊下に飛び出す。そして廊下の奥、昨日俺が人影を追っていた角に。

昨日の人影が、立っていた。その表情は逆光でわからない。

「……わく……ん……げて……あ……ら……」

その人影はブツブツ、と何か呟いている。なんだ？　なんと言っている？

「貴弘さん、下がって」

その隙に美々子が前に出る。一ノ瀬も後ろについたようだ。

「……らかわ……くん……げては……やくあ……」

なんだ？　なんと言っている？　俺は耳を澄ませる。すると、

——　荒川君、逃げて、早く。

はつきり聞こえた。同時に背骨にぞわ、と悪寒を感じる。

「御珠上、命！！」

叫んだ瞬間、俺の目の前で閃光が瞬く。一瞬で距離を詰めてきた人影の斬撃を、命が防いだ光だ。

そして、その場にいる全員が、その顔を確認した。

人影は反動を使い後退する。その顔が月明かりの元、晒された。

「・・・嘘だろ。・・・瀬田・・・!!」

それは、瀬田あつみの顔をしていた。

「はあ、あなたたちは、妾と知り合いですか」

瀬田は俺たちを興味深げに観察する。

「あつみ？私よ、砌よ？いやだな、冗談はやめてよ」

「やめろ。今のあれは瀬田の人格じゃない」

瀬田に近づこうとする一ノ瀬を手で制する。すると瀬田はクス、と笑った。

「へえ、貴方頭の回転速いのね。そう、妾はこの小娘とは違う」

「・・・鬼」

真名を呼ばれた命は、瀬田を睨みながら告げる。

「え？なにが？」

未だ状況が飲み込めない一ノ瀬。しかし今は説明している暇などない。

「貴様、人鬼か」

「左様。妾は左大臣藤原齊彬が娘、紅姫」

人鬼。^{ひとおに}人間の身から深い悲しみや憎悪によって鬼になった者は、古

くは菅原道真が祖と言われている。その後、立地条件から建築物の配置にまで、最も呪術を反映した平安京で急激にその数を伸ばす。

そして何を隠そう、当時跋扈していた魑魅魍魎どもと共に、力をつけ出した人鬼に対抗するために生まれたのが、陰陽道の中でも「荒川流」と呼ばれる破邪の術式計百十四式である。

つまり、荒川家はこうした人間から鬼になった者、またはその霊を専門に繁栄してきたと言える。

「自分を裏切った主上を呪い殺し、我が15代当主を喰い殺してもまだ足りないのか」

そういう理由から、この人鬼「紅姫」についても、話には聞いていた。

「もう理由なんて忘れたわ。妾は、妾がしたいことをするだけ」
瀬田の顔をした紅姫は、人を見下したような目で、悠然と構えている。

「ねえ、あれは・・・あの人はあつみじゃないの？」

「一ノ瀬はじ、と瀬田を見つめたまま、信じられない、という顔をしている。無理もない。」

「・・・体は、おそらく瀬田のものだろう。実体なのかは釈然としないが・・・今表に出ている人格は、未だこの世に未練を残す人喰い鬼だ」

「人喰い、とはひどいわね。私はただ食事をしているだけよ。その対象がただ人の形をしているだけ」

瀬田の顔は笑っているが、紅姫の目は怪しく光っている。

「貴弘さん、もう我慢できません」

その瞳に確かな怒りと憎しみを湛えた命が、体を震わせている。

「待て、まだ紅姫を瀬田から引き剥がす方法が・・・」

「そうね、私たちに共存はありえない。こうやって話していること自体、無駄な行為と言えなくもないわね。わかってるじゃない、その使い魔」

「やめろ！命！」

瞬時に隠していた爪を引き出し、紅姫に飛びかかろうとする命。それを言霊で制する。

「ぐっ！・・・しかし貴弘さん！」

「なんだ、来ないの？つまらないわね」

紅姫は口を尖らせ、不満げな顔をする。

「そっちから来ないんじゃない・・・」

そしてその口を、ニヤリ、と大きく裂いた。

「こっちから行くわ」

その体が、消える。

「貴弘さん！！危ない！！」

叫ぶと同時に左前方でキーン、という甲高い音が。

「くそっ！我が名、貴弘の名において律する！！御珠上 命！！奴を・・・」

奴を・・・？どうするのだ？

「命さん！！」

紅姫の斬撃に押し負けた命が廊下の壁に叩きつけられる。

「・・・奴を・・・捕らえろ！！」

むくり、と体を起こした命は、頭上に振り下ろされた第二撃を、右に跳んでかわす。

「ほら、どうしたの？そんな命令じゃあ、言霊の力が弱すぎるんじゃないの？」

紅姫は命を追って斬撃を繰り返す。その手に持っているのは・・・小刀か？

確かに言霊の力は、その言葉の強さに比例する。要するに言われたらシヨックな言葉ほど強いということだ。特に生死に関する言葉は言霊の力が群を抜いて強い。

俺がいつも命を律するときに「切り裂け」などの強烈な言葉を使うのはこのためだ。

「命！！なんとか瀬田の体を傷つけずに、紅姫だけを瀬田の体から引きずり出せ！！」

「し、しかし一体どうやって・・・」

ただでさえあまり言霊の力を得られていない命は、紅姫の連続攻撃に対し成す術がない。

「やめて・・・！！やめてあつみ！！」

まだ炎の術式しか使えない一ノ瀬も、命と紅姫が接近戦をしている現状では、成す術がない。そして、なにより、体は、瀬田のものなのだ。

「くそっ！！一体どうすれば・・・」

「ははは！ほらほらどうしたの？」

ひたすら斬撃を繰り返す紅姫。それは単純な直線の往復だが、敵の体が瀬田である上に、力の足りない命は徐々に追い詰められてしま

う。

「きゃっ・・・!!」

そしてついに、斬撃の反動を殺しきれず、窓のガラスに叩きつけられてしまう。

「命!!」

外の暗闇に消えた命からの返事は、無い。

「・・・つまらないわね」

しばし暗闇を見つめていた紅姫は、命が戦闘不能になったと判断すると、次は俺に照準を合わせる。

「本当に、つまらないわね」

一気に距離を詰め、俺の喉元に小刀を突きつける。

「荒川君!!」

一ノ瀬が咄嗟に身を乗り出す。

「おっと、あなたはじっとしていて」

紅姫は顔だけを動かし、一ノ瀬を睨みつける。

「!?!え、か、体が!?!」

霊的耐性がまだ充分身についていない一ノ瀬は、あっさり紅姫の呪いにかかってしまう。

「さて、あなたはどうするの?」

顔をゆつくりと俺に向きなおす紅姫。その瞳には明らかに瀬田とは違う光が宿っている。そしてその頬には・・・眼球・・・か?

「・・・そこまでこの体が大切?」

俺がなんら抵抗をする様子を見せないでいると、痺れをきらしたのか、紅姫がゆつくりと小刀の切っ先を移動させながら、言った。

「だったら・・・こうしてあげる」

紅姫は小刀を逆手に持ち直し、自分の左手、つまり瀬田の左手に突き立てる。

「やめろ!!」

「ははは!あなたがぐずぐずしているから、大事な大事な体が傷ついちゃったわよ?」

紅姫は楽しそうに目を細める。事実、楽しんでいるのだろう。しかし、その瞳からは・・・涙？

心底楽しそうに笑う瞳から一筋の涙が流れ落ちていた。

・・・もしかしたら、まだ瀬田の意識が残っているのか？

「瀬田！！目を覚ませ！！瀬田！！」

瀬田の意識を呼び覚まそうと、名前を叫び始める。

「瀬田！！頼む、瀬田あ！！」

「・・・興ざめだわ。まったく」

紅姫は腕から小刀を引き抜くと、俺の左腕に突き刺した。

「ぐ・・・瀬田、瀬田！！」

焼けるような痛みが走るが、かまわずに叫び続ける。

「次は・・・ここかしら？」

続いて右腕、左足。しかし、それでも俺はかまわずに叫び続ける。

「瀬田！！目を、覚ましてくれ・・・！！瀬田！！」

すると、あきれた、と呟き、紅姫が攻撃の手を止める。

「何言ったって無駄よ。いい加減あきらめたら？」

「はあ、はあ・・・なんでそんなことがわかるんだよ」

「なぜって・・・妾と一体になることは、この小娘が望んだことだからよ」

当然のことを言うように、紅姫は言った。

「そんなこと・・・あるわけないだろう。なにより理由が無い」

「あるわよ。この子もう死んでいるもの」

・・・な、に？

「だから。この小娘は三日前の夜、急激なショックによって、死んでいるの」

「二日前の・・・夜？」

それは俺が瀬田とはじめて会った日の・・・夜ってことか？

「そう。その日を境に、今まで生きることをあきらめかけていたこの子が、急に生に固執し始めた。心拍数は跳ね上がり、代謝も増加し始めた。でも、そのことは今まで死に向かっていた体にとっては、

急激なショックでしかなかったみたいね。次の瞬間、この娘は死んだ。生きようとして死んだなんて、皮肉ではあるわね」

紅姫はくすくす、と笑う。俺はいまだ事実が理解できない。いや、認めることができない。

「まあ、この小娘の病気の原因である、妾たちが言えた義理じゃないけどね。その時、今までこの小娘の中に潜んでいた鬼を通して語りかけたの。『あなたを生き永らえさせてあげる』ってね。生に固執し始めた小娘はもちろん私の話に乗ったわ。妾が人を生き返す秘術を提供するかわりに、小娘はその体を差し出す、という取引にね」

瀬田は生まれつき体が弱いと言っていた。今の紅姫の話からすると、瀬田は何らかの理由で生まれつき体の中に鬼を宿していた、ということだろうか？

鬼が人の体内に侵入すること自体、まずありえることではない。そして『悪性の気』の塊である『鬼』が体内に存在するということは、それだけで人体にかなりの悪影響を及ぼす。

つまり今紅姫が言った話は、瀬田が死んでしまった『原因』が、瀬田を生き帰させる『救世主』になる、ということだ。

「そんな胡散臭い取引、信じられないだろ」

「でも小娘は応じた。そこまで強く『生きたい』と願っていたのね。それに事実妾は二日間この小娘を生かした。それはあなたが一番理解しているでしょう？もちろん、それ相応の報酬は貰ったけどね」
相応の、報酬・・・？

「一日生きるごとに、人間一人」

——最悪の、事実だ。本当に、最悪だ。

「この小娘は『生きよう』とする意思が強かったから、前に使った男よりも長く持った方ね。おかげで充分な『気』が回復できたわ」
紅姫は唇に指を当て、朱をひくようにゆっくりと移動させる。いまままで飲んだ生き血の味を思い出しているようだ。

「そこまでして何をしたかったのか、妾には関係のないこと。でも、

さすがにそのためだけに関係のない人を喰い殺し続けることは、小娘にとつてはかなりの負担だったようね。今夜になつてついに完全に妾に支配されたわ。妾としてはそれが狙いだったから、そうでない都合が悪いのだけど」

そして「お話はここでおしまい」と言った。

「もうすぐ死ぬ人間に話したつて時間の無駄なものね。早めにあなたを殺して、ゆっくり味わうことにするわ。一人食べ尽くすのつて、意外と時間がかかるのよ」

再び左手で俺の肩を押さえ、右手のナイフを高く掲げる紅姫。

「なにか言い残すことはある？ 特別に聞き届けてあげるわ」

そのとき、俺は傷口からの出血と、信じられない事実のショックによつてほとんど頭が働いていない状態だった。しかし、そんな状態でも言わなくてはならないことが一つだけある。

「せ……だ。瀬田……そんな、鬼に負ける……な」

ぴくり、と紅姫の顔が引きつる。

「……そう。じゃあ、さようなら」

小刀が、真っ直ぐ俺の左胸目がけて、振り下ろされる。

「あつみ!!」

最後の気力を振り絞り、叫ぶ。

その瞬間、紅姫の瞳が見開かれた。そして、小刀は肘を中心にし、勢いをとどめることなく円弧を描いた。

「……ぐふつ……な、なぜ……!!」

小刀が瀬田の腹に突き立っている。そこからはドクドク、と鮮血が溢れていた。

紅姫の動きが、止まった。

「……今だ!」

俺は右手に忍ばせていた札を全力で振り抜き、瀬田の頬に取り付いている眼球を切り裂く。

「き、貴様……!! よくも……」

瀬田の頬に寄生していた低級の鬼が溶解し、瀬田の瞳から怒りと殺

気が消えていく。

・・・初めに気づくべきだったのだ。

人間から鬼になっていたとはいえ、紅姫は平安時代の人間、つまり既に『霊』になっているのだ。その紅姫が死亡した瀬田の体、つまり『死体』に直接憑依することは不可能だ。

そこで紅姫は、生まれつき瀬田の体内に潜伏していた『低級の鬼』を媒介として、瀬田の体に憑依し、同時にその鬼を使い瀬田の肉体を管理、活動させていたのだ。

この橋渡し役の『低級の鬼』を倒せば、紅姫と瀬田の繋がりも断たれ、瀬田は紅姫から解放される。

「この娘・・・を・・・殺すと、言うのか・・・」

しかし、それは同時に、瀬田は生を保つことができなくなるということ。それはつまり、

瀬田の死を意味していた。

瀬田の瞳から完全に紅姫の光が消えた。

「瀬田・・・、すまない、すまない・・・！」

俺は、俺の上に覆いかぶさるように倒れる瀬田に、謝る。

「・・・なんで荒川君が謝るの？」

ゆつくりと顔を上げる瀬田の口元は、血で真っ赤だった。

「これは私のわがママが・・・招いたことなんだもの。むしろ荒川君が・・・がんばってくれたおかげで・・・私はこれ以上関係の・・・ない人たちを、犠牲にしなくて・・・すむ・・・」

「わかったから・・・！！わかったから黙ってくれ！！」

瀬田の息は荒い。その息は、紅く染まっているように見えた。

「私が・・・なんで・・・死んでしまっても・・・たとえ・・・鬼に魂を売っても・・・生きようと・・・した・・・か、聞きた・・・い？」

瀬田はいたずらっぽく口で笑みを作る。しかしその瞳には涙が溢れ、既に焦点はずれていた。もう見えていないのかもしれない。

「・・・ただ、私の想いを伝えたかった・・・一目見てわかった・・・」

「私の・・・大切な人に・・・」

「瀬田・・・！！お願いだ！！もう・・・やめてくれ・・・」

「・・・私の、わがまま、また・・・聞いてくれる？」

瀬田の傷口を手で押さえるが、次々に溢れる鮮血を留めることは不可能だった。

——・・・貴弘・・・くん・・・って・・・呼んで・・・いい・

・・・？——

「ああ・・・もちろんだ・・・もちろん・・・」

瀬田はもう顔の表情すら動かせないのか、瞳だけで笑った。

「・・・さ・・・最後に・・・あ・・・つみって・・・よん・・・
でくれ、て・・・うれし・・・かつ・・・た・・・」

「これからいくらかでも呼んでやるよ！だから・・・だから・・・最後なんて・・・言っな・・・」

強く瀬田の体を抱きしめる。

「あつみ！あつみ！あつ・・・み・・・！！！」

瀬田の瞳にはもう、光は無い。

「あつ・・・み・・・あつみ——！！！」

瀬田から返事が返ってくることはもう、無い・・・

第3章 - 邪悪なる存在 - (前書き)

自作同人ゲーム用に書き下ろしたシナリオです。

制作ブログ↓<http://synthesize2.blog44.fc2.com/>

初めての長編作品なので未熟な点多々ありますが、よろしくお願いします。

第3章 - 邪悪なる存在 -

俺は、取りかえしのつかないことを、してしまった。

朝、昨日の天気が嘘だったように、その日は朝からじめじめ、とした秋雨が降っている。

どんより、と空気を圧迫する灰色の雨雲は、まさに今俺の心に押し掛かっているものを連想させる。

ざあざあ、とモノの熱を奪う冷たい雨は、まさに今俺の心に降りしきる感情を思わせた。

「・・・結局、何も・・・出来なかった・・・」
あつみ・・・

結局昨日は一睡も出来なかった。出来るはずもなかった。

俺がもっと早くに気付いていれば・・・

俺にもっと力があれば・・・

あつみを、救えたんじゃないのか？

俺が・・・

考えることはただそればかり。延々と繰り返していると、東の空がだんだんと白み始め、気付けば朝になっていた。

・・・俺は、なにをするためにここにいるんだ？

俺は、自分に好意を抱いていてくれた女の子一人救えない。こんな俺は、一体どうすればいいんだ？

こんな俺じゃあ、どう考えたって『邪悪なる存在』に勝てるはず無いじゃないか。

「じいちゃん・・・早く来てくれよ・・・俺じゃ、無理だよ・・・」

「こら、男の子がいつまでも泣きごと言ってもんじゃないですよ？」

・・・ん？

「・・・え？典子さん？」

いつの間に入ってきたのか、典子さんが俺の頭上から顔を覗き込ん

でいた。

「ほらっ、今日も学校ですよ。早く着替えて、朝ごはん食べないと彼女が待ってますよ」

「え？彼女？」

無理矢理起こされて未だはつきりしない頭で、ぼんやりと考える。誰だろう？

そんな俺の様子を見て、典子さんはにこ、と笑い、廊下を指差す。

「ほら、そこに」

・・・え？

「おはよう。荒川君」

「い、一ノ瀬！？」

そこには学校の制服を着た、一ノ瀬がちょこん、と立っていた。

「え、え？なんでここが？俺教えたっけ？」

さつきまでぼんやりとしていた頭を、今度はいきなりフル回転させて思い出そうとする。

すると一ノ瀬はふるふる、と首を横に振った。

「いえ、荒川君が組織の人間としてこの村に来たのなら、この村に引っ越してきたのではなくて、どこか宿をとっているのではないか、と思つて。この村に宿はここしかありませんし、典子さんとは知り合ひだったので、聞いてみたら案の定この宿に泊まっていた、ということです」

「え？典子さんと？」

いままで考えもしなかった繋がりに、少し驚いてしまう。

「というか、人口が3桁のこの村じゃ、村人全員が知り合いみたいなものね」

にやーにやー鳴きつつ、未だ布団から離れようとしなない美々子を引き離しながら、典子さんが答える。

村人全員が知り合い・・・って、こんなところで『引っ越してきた』なんて嘘、すぐにバレるじゃないか。

もつとまともな嘘考えとけよ、じいちゃん・・・

「ほら、ぼー、としている場合じゃないんですってば」

一ノ瀬が俺の手を引いて立ち上がらせる。

柔らかくて、暖かい手。ふわり、と舞う黒髪。

一ノ瀬は・・・なんとも無いのだろうか。昨日、親友が・・・あつみが、死んだのに・・・。

「早く顔を洗ってきてください。このままだと遅刻しちゃいますよ？」

一ノ瀬は微笑む。

「じゃ、行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい」

典子さんに見送られ、『花月』を後にする。

結局美々子は今も寝ている。昨日消費した『気』の量を考えれば仕方がないことだ。

今のうちに『気』を回復しておいてくれないと困るし。

決戦の時は近づいている。

「・・・荒川君？どうしました？おなかでも痛いのですか？」

「あ、いや、そういうわけじゃない・・・けど・・・」

「そうですね？なんだか恐い顔していたので・・・なんでもないのでいいのですが・・・」

そんなに思い詰めた顔をしていたのか。気をつけないと。一ノ瀬を不安にさせるのは心外だし。

「ああ、なんでもない・・・あ」

「え？どうしました？やっぱりおなか痛いのですか？」

「いや・・・弁当忘れた・・・。しまったな、いつもは典子さんが手渡してくれるから忘れないんだけど・・・」

俺は後ろを振り返り、引き返そうか考える。

「あつ、あの」

「ん、どうした一ノ瀬？」

一ノ瀬は鞆からバンダナに包まれた箱を取り出し、俺に差し出す。

「よかつたら、これ・・・お弁当」

確かに、それはお弁当だった。

「だってこれ、一ノ瀬のだろ？俺が貰うわけには・・・」

「いえ、いいんです。今日は二つ作ってきたので・・・」

すると一ノ瀬はすこしはにかんだように笑う。

「・・・二つ？何で？」

弁当を作ってくれるのは確かに嬉しいが、俺にはその理由が思い当たらなかった。

すると一ノ瀬は、今度は顔を赤くしてしまう。

「え、えと、今日は材料が余ってしまったので・・・」

一ノ瀬は慌てて言い繕う。

そんな一ノ瀬を見ていると、思わず俺も笑んでしまう。

「はは、でもよかつた。一ノ瀬は元気そうだな」

そのとき、ぴた、と一ノ瀬の動きが止まった。

「まあ、そうだよな。悔やんだってしょうがない。一ノ瀬は強いな・

・・・」

「・・・強くなんか、ない・・・」

一瞬の、沈黙。

え？と顔を上げると、背を向けた一ノ瀬の肩が細かく震えていた。

「強くなんか、ないですよ。今だって、あつみのことを思うと・・・」

「

一ノ瀬がゆっくり振り返る。その目には・・・

「ほら。泣いちゃダメって、思うのに・・・」

透明な雫が、溢れている。しまった・・・と俺は思った。

「今日も、戦いが無い時くらい、なるべく明るく、楽しく過ごしたいと思ったからなのに。悲しんでも、あつみは帰ってこないから・・・。あつみもその方が喜んでくれるって思ったから・・・」

そう言つて、一ノ瀬は顔を伏せてしまう。瞳に溢れていた雫が地面に零れていく。

「・・・ごめん」

そんな一ノ瀬の気遣いに、気付かなかった……。俺はバカだ。でもそんな俺の謝罪の言葉に、一ノ瀬は首を横に振ってくれる。

「いいえ、いいんです。ただ……」

「……ただ？」

一ノ瀬は少し顔を上げ、少し躊躇った後、上目使いでこちらの様子を伺う。

「その……貴弘くんって、呼んでもいいですか……？」

その言葉に、不覚ながらもドキッ、と心臓が高鳴る。

「お、俺のことを……？」

って俺以外の誰がいるんだよ。俺ってバカか！？

「私たちが、死んでしまったあつみの分も生きないと。楽しまない、と、あつみも救われれないと思うんです。やっぱり、好きな人の悲しげな顔なんて、見たくないから……」

一ノ瀬は真っ直ぐ俺の顔を見る。

「それに私も……荒川君を「貴弘君」って呼びたいんです」

「……」

そう言われたら、俺には断る理由など無い。

それがあつみのためにもなる、と言われたらなおさらだ。

「ああ、いいぜ……。だったら俺も一ノ瀬のことを「砌」って呼ばなきゃな」

予想外だったのか、俺の提案に、え？と今度は一ノ瀬が俺を見る。

「精一杯今を生きて、平和な日常を取り戻そう。あつみのためにもよろしく、砌」

一ノ瀬は瞳に溢れた雫を拭くと、

「——はい！」

満面の笑みで、笑ってくれた。

なんだか、かなり久しぶりにこの教室に来たような、そんな気がする。

扉から一步入り、ふと思ってしまった。

「?どうしたんですか?」

戸口に立ち尽くす俺に、砌が声をかける。

「・・・」

俺はゆっくりと教室を一望してみる。何かが違う気がして。

・・・しかし、教室の様子は俺の知っている教室そのままだ。

ただ、二つの空席を除いて。ひとつは、あつみの席だ。そしてもうひとつは・・・

「・・・なあ、花梨はどうした?」

「・・・え?」

言われた砌は、同じく花梨の空席を見る。

「本当だ。どうしたんでしょう。花梨が学校を休むなんて・・・。

何の連絡も貰ってないのに・・・」

砌が狼狽する。花梨が休むことはそんなに異常事態なのか。

「はい。花梨は五才のときから、病気というものにはかかったことがないんです。もちろん、学校も欠席無しです。遅刻は結構ありましたか・・・」

「欠席無しか。それはすごいな。だったら今日も遅刻かもしれないじゃないか?」

「そうですね、そうだといいのですが・・・」

心配そうに花梨の席を見つめる砌。

「ほら、授業始まるぞ。席につこう」

いつもの元気ハツラツな花梨しか知らない俺は、あまり気に止めず、自分の席につく。

そのとき丁度教師が教室に入ってきた。

「起立、礼」

当番が号令をかけ、いつものように授業が始まる。

・・・授業が終わるまで、砌は心配そうな顔をしていた。

昼休み。俺と砌はいつも通り屋上にいた。

「「「・・・」」」

いつもの習慣というものはなかなか変えられないもので、自然な流れでここまで来たわけだが・・・。

「・・・」

深く沈んだ、気まずい雰囲気。

授業中は他のクラスメートのおかげで、あまり意識せずに済んだが、四人で集まったこの場所に来ると、どうしても二人のことを考えずにはいられないのだった。

砌は、というとしじつ、と考え事をしながら、栗きんとんをつついている。

あつみを失った悲しみと、休んでいる花梨への心配は、やはり隠しきれないようだ。

・・・あつみ。出会ってからたったの四日しか経っていないが、彼女は確かに俺のかけがえの無い親友だった。

そう、四日。この間であつたことといえば花梨の「両手プラス片足に花」発言や砌の参戦、美々子の畏、シンギスカン喜井山ハイキング、そして・

・
考えてみれば色々なことがあつた。しかし、その大半は、正確には「一度死んだあつみ」との思い出だ。

俺に好意を寄せてくれた、女の子。

正直、都会では色恋沙汰なんかは珍しいことではない。しかし、彼女のことは一生忘れられないだろう。

一度死んでしまっても、俺に想いを伝えるためだけに、鬼に魂を捧げてまで、生きようとした、女の子。

彼女のその勇氣は、俺の陰陽道なんかよりも一途で力強く、その想いは、眩い光を放って俺の心を揺さぶった。

だが、俺は果たしてその想いを受け取る権利があるのか？

あつみの人鬼化ひとおにに気付くことが出来なかった俺が。

たった四日とはいえ、その傾向は確かにあつた。俺が。俺が気付かなかったただけだ。いや、あつみが生来、体が弱かったのを理由に、無意識に目を背けていたのかもしれない。

しかしそんなもの、「対人鬼の専門家」である荒川家、その御曹司である自分が、目の前の人鬼に気付かなかった理由にはならない。俺が——俺があつみを見殺しにした、その理由には。

もっと早くにあつみの死に気付いていたら。もっと早くにあつみの体に潜む鬼に気付いていたら。もっと早くにあつみの——想いに気付いていたら。

少なくとも、こんな結末にはならなかったんじゃないのか？

俺は——

「・・・荒川君？」

顔を上げると、砌が心配そうに見ていた。

「・・・すまない」

砌はふるふる、と首を振る。

「そんなに自分を責めないで。これからのことを考えましょう」

・・・そうだ。今朝、砌と約束したばかりだ。

あつみのために、精一杯生きようと。

俺がこの村に來たそもその理由を思い出せ。

——『黄泉の門』——。これを、閉じること。

——『邪悪なる存在』——。これを、倒すこと。

十年前、この地に開いた『黄泉の門』、そこから現れた『邪悪なる存在』。

『黄泉の門』はその向こうにつながった異世界から、超高純度の『負の気』を溢れさせ、付近の悪性の靈的存在たちを活性化させた。

『邪悪なる存在』は理由もなくその強大な力で、破壊と殺戮を繰り返した。

そして、今。

奴らはまた、同じことをしようとしている。もちろん、その対象は俺たちを含めた村人全員、果てにはこの世に生きるものすべて。

俺は、あつみを救えなかった。

だから、砌や花梨、村人たちを救わないのか？

いや、違う。俺は、みんなを救いたい。

確かに、俺程度の力じゃ救えないかもしれない。だが、救おうとすることはできるはずだ。

あつみは死んだ後も、生き続けたいと願った。それが死ぬことよりもつらいことでも。

——想いを伝えるために。

俺は、その想いを受け入れたい。

そして、その想いを受け取った俺は、死ぬわけにはいかない。

傲慢だ、と言われるかもしれないが、あつみの想いに応えるためには、それしかないと思える。

——精一杯生きよう。あつみのためにも。

「——そうだな。ただでさえ時間がないのに、ウジウジ考え込んでも仕方がないし」

俺は砌の瞳を見据える。砌も俺の瞳を見た。

「生きよう。必ず『邪悪なる存在』を倒して、みんな揃って生き残るんだ」

砌は、俺の突然の宣言に驚いたようだったが、すぐに頷いてくれた。

「——はい。一緒に、必ず倒しましょう」

いまだに『黄泉の門』の位置は特定できていないが、今までどおり『門』の放つ『負の気』にあてられた連中を倒していけば、いずれその大元である『門』にたどり着くはず。そしてそのそばにいてあろう『邪悪なる存在』も。

あつみは、俺に微笑んでくれた。その微笑みのために、俺は負けない。

その日の夜。俺たちは昨日までと同じように、一ノ瀬神社に集まった。

「……はむはむ。このようかんもおいしいですねえ！」

すでに美々子の特等席になりつつある縁側の一角で、そうすることが当然のように、美々子は和菓子を食べている。

「そうですか？まだたくさんあるので、たくさん食べてくださいね」

そして、これまた当然のように和菓子を追加する砌。

どうやらいつもの調子を取り戻したようだ。完全とはいかないだろうが・・・、それはこれから徐々に取り戻せばいいことだ。

まだ時間がかかりそうなので、俺はすでにあたりを完全に包んだ虫の声に、耳を澄そうとする、が。

「今夜は、どのあたりに行く予定ですか？」

神主、一ノ瀬教文氏がいつの間にか隣にいた。

「え、ええ。今日は村の中心である商店街を中心に回ってみようかな、と。確かに例の廃病院には魑魅魍魎も多くいますが、それらに気をとられて、村人が殺されては意味がないと思ひまして」

俺は驚きの表情が顔に出ないようにしながら、答える。

「それは確かにそうだね。正しい判断だと思うよ」

言つと、教文さんは俺の横に並ぶ。そして誰に言うでもなく、口を開いた。

「虫は、良いね。特に、秋に鳴くこの虫たちは」

予想もしていなかった言葉に、俺は思わず教文さんを見てしまうが、教文さんは構わずに続ける。

「彼らはただ鳴くことが出来る。ただ、愛する者のためにね。ひたすら鳴き続ける」

俺は教文さんの真意がわからず、ただその顔を見上げる。

「私はそういう生き方に憧れるんだ。愛する者をひたすらに愛し続ける。ましてや傷つけることなど決してない、そんな生き方に・・・」

「

教文さんはそれきり黙ってしまう。

「？」一体教文さんはなにが言いたいのだろうか。彼には砌がいる。それとも彼女を孫として愛していないとも言いたいのだろうか。

「教文さん・・・あなた・・・」

「貴弘さあーん!!」

「!!!ぐふあっ」

俺の右わき腹にクロスチョップの構えでタックルを食らわす猫が一

匹。

「さあ！いい具合にお腹も落ち着きましたし、見回りに出発しましょう！」

美々子が高らかに宣言する。

「美々子さん！待ってください」

少し遅れて砌もやってきた。そして、

「・・・」

丸太のように地面に横たわり、微動だにしない俺を発見。一瞬の硬直の後、

「・・・大丈夫ですか？生きてますか？」

と、恐る恐る俺に手を伸ばそうとする。

「・・・とりあえず、生きてはいる」

砌、気付いてくれて、ありがとう。

「貴弘さん！行きましようようーっ！」

美々子はすでに鳥居の下まで移動していた。そこから手を振っている。

お前のタツクル、結構バカにならないんだぞ！

「いつつ・・・」

わき腹を押さえながら立ち上がろうとする。

そのとき、すつ、と差し出される手。

「大丈夫ですか？」

一ノ瀬が、少しかがんで俺に左手を差し出していた。・・・なんだか逆な気もするが・・・。

「ああ、ありがとう。・・・よつと」

言ってしまったから「年寄りくさいかな」と思ったが、まあ無事に立ち上がることに成功する。

「い、いえ。・・・どういたしまして・・・」

「貴弘さん！早く、早くにゃー」

鳥居の下でピョンピョン跳ねる美々子。

「ああ今行く！・・・砌、行こうか」

「はい、そうですね。早く行ってあげないと」

俺たちは鳥居に向かって歩き出す。

それにしても痛いな・・・今日の和菓子は特別うまかったに違いない。

他の場所に比べて、昼の間日常生活に密接している分、夜の商店街は、他の場所以上に別世界にいるような錯覚を与える。

威勢のいい掛け声が響いた八百屋も、魚特有の強烈な臭いを漂わせていた魚屋も、今では重いシャッターを下ろし、沈黙を守っている。あるのはただ静寂のみ。

そしてもちろん、昼間より二倍は広く感じるメインストリートには、昼間の零倍の人間しかいない。

「人が、まったくいないな」

まだ東京では「夜」の時間帯である。夜遊びをする若者たちなどで、まだまだ騒がしい頃なのだ。

しかし、誰もいない。まあ、水商売に関しては、みんな知り合いのこの村にあつては、やりにくい商売なのだろうが・・・

などとくだらないことを考えながら、砌の後について歩く。美々子今日は別行動をすることにした。今のところ中心部で鬼が出現した、ということは聞いていないので、大丈夫だろうと判断したからだ。

「そういえば、荒川君はどうして一人でこの村に来たのですか？」

ふと、唐突に砌が聞いてきた。確かにもっともな質問だ。

「うーん、まあ、要するに人手不足だな。今回『ヤツ』の放った『気』はシャレにならない量で、しかも冗談みたいな範囲にばら撒かれたクセに、詳しい発生源が特定できなかったから、調査するのにも人数が必要だったんだ」

ただでさえ人手がない『組織』は、俺みたいな新米まで単独の任務に投入し、そして新米の俺は単独で「当たり」を引き当てた。

・・・冗談きついで。

「そのうえ、外界との連絡手段もなくなってしまったんですね・
・。あれ？すると学校への転入手続きは貴弘くんが全部自分でやつたのですか？」

砌が、はて、と小首をかしげる。またもやごもつとも。

「いや、まだ俺がこの村に来て二日目までは連絡が取れたから、『組織』の人が手を回したんだと思う。この件はウチのじっちゃんの発案だから」

俺は、あの最悪の目覚めだった朝を思い出した。あのときの式神は通信連絡用（すなわち超遠距離操作系）で最強の部類に入るものだった。

「・・・今考えると、あの時すでにかなり危険な状態だったのかもしれないな。」

「ウチのじっちゃんって・・・貴弘くんのおじい様ですか？」

回想に入りかけた意識が、砌の声によって我にかえる。

「うん？ああ、そうだけど・・・」

「貴弘くんのおじい様って、『組織』では偉い方なんですか？」

今更なにを、と思ったが、そうだ、砌にはまだ話していなかったな。てつきり教文さんが教えていると思ったが・・・

「俺のじっちゃん、荒川 貴信たかのぶは、『組織』の会長だ」

なにでもなく言う。正直、じっちゃんが『組織』の会長であることで、損したことはあるが、得したことなど一度もない。

それは『組織』の活動内容上、『組織』のトップが否が応でも実力主義になつてしまうからであり、つまりは『世襲制』というシステムがないことに起因する。あとはじっちゃんの性格とか、いろいろ理由はあるのだが。

「・・・え？会長・・・ですか」

会長という言葉に、驚く砌。まあ無理もないか。

全国の陰陽師を統べる『組織』の、そのトップの孫なんて、（俺自身）が言うのもなんだが）正常な一般人なら、ぶっちゃけ引く。

「・・・といつても、まあ、実はそんなにたいしたことはないんだ

けど」

まったく、なんでウチのじっちゃんはこんな『聞くと思わず引いてしまう』地位についているんだよ。引かれる孫の身にもなってくれってんだ。

しかし、砌の驚きは一瞬のみで、次の瞬間にはいつもと変わらぬ調子で聞いてきた。

「じゃあ、いろいろと大変ではないですか？」

「・・・あれ？引いてない・・・？」

「いや、全国の陰陽師といったって、そんなに数はいないし、やることも勝手なまねをしないように見張るだけだから、自治会とたいして変わらないんじゃないか？」

はあ、そうなのですか、と納得する砌。意外とこういうのには動じないのか？

そこまで考えて、そうだ、と思い当たる。砌の祖父である教文さんは、この辺り一帯の神主達のリーダー的存在だったな。

神主のリーダーも陰陽師のリーダーも、イメージ的には大して変わらない。

「なら、もう助けが近くに来ているのでしょうか・・・？」

砌がうれしさを隠せない顔で聞く。

「ああ、助けは来ているだろうな。ただそれは・・・」

途中まで言いかけて、思わず口をつぐんでしまう。

そう、助けは来ているだろう。だが、来ているそれは「人間」だ。

教文さんが言っていた通り、今この村は大自然の化身ともいえる「精霊」によって外界と隔離されているため、「人間」ごときでは村に入ることもすら不可能だろう。

村を隔離する原因を取り除かない限りは。

「ただ・・・なんなのですか？」

砌は突然口をつぐんだ俺を見て、不思議そうに首をかしげる

「・・・それは」

「あれ？砌さんじゃないですか？」

突然背後からかけられる、声。

「ああ、やっぱり砌さんだ。お久しぶりです」

見ると、そこには中年の男。商店街には似つかわしくない直衣^{のうし}に身を包んでいる。

・・・神主？

「あ、こんばんは、永田さん。この間の集まり以来ですか」
気軽に挨拶を返す砌。ってことは・・・

「貴弘くん、紹介しますね。こちらは、隣村の神社で神主をしている永田さんです」

砌に紹介され、どうも、と会釈する永田さん。

「そしてこちらが・・・」

「存じてます。荒川貴弘君・・・ですよ？」

永田さんが俺の顔を覗き込む。俺ははあ、とうなずき、

「そうです。今回『組織』から派遣されました」

「ええ、お話は伺っています。頼りにしていますよ」

「・・・」

俺は、うなづくことができない。

そんな俺を見て、砌が助け舟を出してくれる。

「永田さん、一体こんな時間にどうしたんですか？」

永田さんは一瞬心外そうな顔をして、

「村の見回りですよ。戦っているのは砌さん達だけではありません。
我々神主も、微力ながらお手伝いさせてもらっています」

そうだ、俺が来るまでは、彼らが『黄泉の門』から溢れ出る『負の
気』を押し留めていたんだ。

「では、他の神主さんも見回りを？」

「そうです。私と教文さんを含めて6人ですが。荒川君が来てから、
教文さんの提案で、効果の薄い『気』の押さえ込みはやめて、変わ
りにこの見回りをはじめました。」

「そうですか・・・」

もつともといえ、もつともだ。つい1週間前に来た俺よりも、彼

らの方がこの村を救いたいという気持ちは大きいだろうし、なににより土地勘がある。『氣』の通り道や、怪しい場所なども、もちろん知っているだろう。俺がやるよりも効率的だ。

だとすれば、なぜ教文さんは教えてくれなかったのだろう。この神主達が村を見回っているのなら、中心部ではなく、もっと村の怪しい箇所を見回ったのに。

「ですので、今日はもう休んだらどうです？ 昨日も大変だったそうじゃないですか」

「ええ・・・まあ」

一瞬、あつみの顔が頭をよぎる。

・・・もう、大丈夫。あつみ。俺は君の想いを受け止められるようになるまで、前に進むよ。生き残るために。

「・・・そうですね。今日のところは、一度帰って作戦を立て直したほうが良さそうですね」

予想外の出来事もあったことだし、ここは一旦戻ろう。

「あの」

永田さんに背を向け、歩き出そうとした俺に、砌が言う。

「その、帰る前に、花梨の家に行ってみませんか？」

そうだ、花梨は今日学校を休んでいるんだっただ。やはり、親友の容態が気になるのだろう。

しかし、いつもあんなに元気な花梨が、そんなに深刻な病気にかかるだろうか？

そのとき、思い出す。あの、商店街で会ったとき、自転車のかごに入っていた大量の、薬。

・・・なにかあったのか？ 花梨に。

「行ってみよう。家は遠いのか？」

「そうですね。村のはずれだから・・・」

「花梨の家って、有坂さんの家ですか？」

会話に入る永田さん。思い出したように言う。

「そつえば、あの近辺一帯は、見回りしていませんね」

その一言に、俺と砌は驚く。

「え？なぜですか？」

「教文さんが言ったんですよ。必要ないって。なんでも、あの一帯は『負の気』に犯されるのが最後になるだろうから、それよりも他のところを重点的に見回ったほうがいいだろうって」

「おじいちゃんが？」

砌がかすかに眉をひそめる。教文さんにとって、花梨は孫ともっとも親しい友達だ。その花梨の家を見回らない……？

いや、だからこそなにか強力な結界のようなものが張ってあるのか。「とりあえず、行ってみよう。永田さん、見回りお願いします」

わかりました、と言って俺達が来た方角とは逆の方角に歩いていく永田さん。

「じゃあ砌、道案内頼む」

砌のほうに振り向く。

「……砌？」

「……え？あ、はい。任せてください。裏道は使わないほうがいいですよ？」

はっ、と我に返り、歩き出す砌。なにか気にかかることでもあるのか。

「……いや、とりあえず今は、花梨の家に急ごう。」

明かりが、まったくない。

もちろん、こんな山奥の村だから明かりはもとも少ないのだが、

花梨の家近辺はさらに少ない。というか無い。

そして、なにより家に明かりが灯っていない。

繰り返すが、今はまだ「夜」の時間帯だ。女子高生にとってはまだまだこれから、という時間帯のはずだ。

「あれ……花梨、寝ちゃったのかな……」

砌も、少し腑に落ちないようだ。

でもまあ、花梨の家は果樹栽培をしている農家だっていうから、寝

るのも早いだろうし、花梨だって大事をとって早く寝たんだろう。見たところ、強力な結界のようなものが感じ取れないのが気になるが、きつと新米の俺には感じ取れないような、巧妙に細工されたもののなのだろう。

「砌、今日は一旦戻ろう。花梨は今日はもう寝たみたいだし、今日ぐっすり寝れば明日には元気になって、学校にも来るさ」

本当に、ただの風邪かもしれない。時間帯が時間帯だし、確証がないのにご両親を起こすのも悪いだろう。

「ええ・・・そうですね」

砌は一度、二階の部屋（おそらく花梨の部屋）の窓を見上げたが、すぐに歩き出す。

「じゃあな、花梨、また明日」

俺も砌が見ていた窓を見上げ、そうつぶやいた。

砌を一ノ瀬神社まで送り、花月に帰った俺は、すでに戻っていた美々子と、今後の方針について話し合うことにした。

「貴弘さん貴弘さん聞いてください！今日はなんとですね！他の村の・・・」

「神主に会った。だろ？」

興奮している美々子の言葉を遮り、言う。

「え？その様子では、貴弘さんも？」

「ああ、商店街を歩いているときにばったり、とな」

「そうだったんですかー。だったら早く言うてくださいよ。もう」
お前の方が少し早かったただけだったの。

「とにかく、この村近辺の神主達が、村の中心部を中心に見回りをしていた。これはかなり大きな意味を持っていると思う」

「そうですね。そもそも、そんなに大きな村とはいえないですからね。中心部だけだとしても、村全体のかなりの範囲をカバーできます」

そうなのだ。ただでさえ人口が少ないこの村では、基本的に中心部

に人が集まっている。でないと生活に支障がでるのだ。

その中心部を、すでに神主達が見回っていた。そしてここ数日なにも被害が聞こえてこないということは、まだ中心部では被害がでない、ということになる。

すると、『黄泉の門』と『邪悪なる存在』は村のはずれ、山間部にいるのか？

しかし、すでに神主達の力では抑えきれないほどにまでなっていた『邪悪なる存在』が、殺戮の対象である人間のいない山間部で、大人しくしているだろうか？

事実、奴等はすでに村の時間を狂わせている。すでにかなりの成長を遂げているだろう。

なぜ？なぜ本体が見つからない？そこまですべてになっているのなら、もう隠れる必要なんてないはずだ。

わからない。一体なぜなんだ？

・・・どちらにしろ、もうこちらから攻めても勝ち目はないかもしれない。時間が経ちすぎた。

それよりは、自分に有利な場所で持てる戦力をフルに使って、待ち受けたほうが効果的かもしれない。

「はい、そのためには、神主達との連携が必要だと思います。一ノ瀬神社はこの村でダントツに霊的な性質が良いですし、神主達も戦力になります」

それは、そうだ。今は少しの戦力でも集めないと、奴には勝てない。だが、しかし、

「なぜ、教文さんは見回りのことを教えてくれなかったんだ？」

一番気になるところだ。今は味方同士、協力し合わなければならぬのに・・・。

「とりあえず、明日教文さんに直接聞いてみよう。今後のことも含めて」

正直、先手を打てなくなったことで、もう俺の手には負えなくなった。

まだ神主達がこの村に残っているならば、彼らの知恵も借りよう。
「・・・そうですね。それが、今できる最善の策だと思います」
よし。今後の方針は固まった。

あつみ、見ててくれ。俺は絶対にこの戦いで生き残ってみせる。あつみの分まで。
きつと。

「おはようございます。貴弘くん」

「おはよう、砌」

朝、砌は今日も迎えに来てくれた。やはり弁当持参だ。

「今日のメインはわらび餅なんですよ」

「そうか。わらび餅か」

「ええ、そうなんですよ・・・」

「・・・」

ダメだ。いろいろ考えるべきことが多すぎて、まともに会話ができない。

「花梨、大丈夫かな・・・」

砌がポツリ、とつぶやく。

「大丈夫さ、花梨なら。きつともう元気になってるって」

「でも、今朝もいつもの集合場所に来なかったんですよ?」

そうだ。おとといまで、砌と花梨は一緒に学校に来ていたんだ。

「それは・・・きつと先に学校に行っているんだろ。きつと」

俺にだって確証はない。しかし、こう言わざるを得なかった。砌の辛そうな顔を見ると。

「さ、早く学校に行こう。きつと俺達より先に学校に行つて、驚かせるつもりじゃないか?花梨は」

必死に言葉を並べる俺。でも、花梨ならありえない気もする。

「・・・はい。そうですね」

自分を納得させるように、砌が頷く。

そうだ、きつとそうに決まっている。

——しかし、花梨はいなかった。

朝早い教室。まだまだ人口密度の低い時間帯だが、花梨の姿は見えない。

「そん、な・・・」

何度も教室を見回す、しかし、いない。

「貴弘くん、職員室に行ってみましょう」

そうだな、職員室なら・・・。

廊下に飛び出そうと、扉に手を掛ける。すると、向こうから開けられた。

「おっと、君は・・・荒川君か」

丁度、教室に入ろうとしていた担任教師と鉢合わせた。

「先生！花梨は・・・有坂さんはどうしたんですか？」

砌が担任教師に詰め寄る。その気迫にも、担任教師は落ち着いた声で、

「落ち着けーノ瀬。有坂ならまだ具合が良くないから欠席すると、今朝連絡があつた」

「・・・え？欠席？」

担任教師のあつけない物言いに、きょとん、としてしまう。

砌も同じようで、信じられない、という顔をしている。

「まあ、今まで皆勤賞の女王と言われた有坂だったが、今年はその名も返上しなくちゃな」

担任教師は砌の肩に手を置くと、言い聞かせるように言った。

「いいか？完璧に出来ている人間なんていないんだ。今まで病気の一つもしたことない花梨だが、たまには風邪くらいひきたくなくなるつてもんだ。そんなに心配するな」

「・・・はい」

砌は、小さく頷いた。

「よし。・・・おら、お前ら。ホームルーム始めるぞ。さっさと席に着け」

担任教師は顔を上げると、騒ぐクラスメートを鎮めながら、教卓に向かう。

「ただの風邪・・・ですよ？」

「ああ。今までひかなかったぶん、今ひいただけだよ」

誰だつて風邪ぐらいひく。今までの花梨がすごかっただけだ。皆勤賞の女王と言われるくらい。

「だといいんですけど・・・」

まだ納得いかない様子。やはり本人に会わないと安心しないのだろう。

「だったら、帰りに花梨の家に行こう。放課後なら花梨もまだ寝てないだろうし」

な？、と砌に提案する。砌は俺の顔を見上げて、

「え？・・・いいんですか？」

「ああ、もちろん。親友の花梨のためだからな」

「でも・・・いつ敵が来るかわからないのに・・・」

「だからさ。いつ奴等が来るかわからないから、心配事は一つでも減らしておかないと」

眼で砌に同意を求める。砌はまだ少し迷っていたようだが、やがて頷いた。

「そうですね。放課後、行ってみましょう」

そうだ。今日も連絡があつたということは、花梨一家は無事だということだ。少なくとも。

「おほん」

突然の咳払い。振り返ると、

「あー、お取り込み中に申し訳ないが・・・。ホームルームをはじめめても？」

俺たちが席に着かないために、朝のホームルームをはじめることが出来ない担任教師と、そして。

・・・くそつ。眼が合っちゃった。

クラス全員の、好奇の視線だった。

「あの一、ご結婚はいつ頃？」

「新居はもう決められたんですか？」

「ご両親の了解は？」

「披露宴の料理はフランス料理メインで、よろしく」

「お色直しはたくさんやってくれ。その方が見えたえがある」

俺と眼が合った瞬間、勝手なことを喚くクラスメート達。

「おい、ちよつと待て。なぜそうなる。ほら、砌も言ってやれ」

「きゃー！『砌』だって！もう名前で呼び合う仲に！？」

「……いや、ほんとにどうかしてくれよ。」

救いを求めて砌に振り返るが……。

「……」

ダメだ。顔を真つ赤にして俯いてしまっている。……逆効果では？
そしてもう一度前に向き直ると、顔を真つ赤にしている人物がもう一人。

「……こちらは意味合いがまったく違うが。」

「……貴様ら」

そう、結局ホームルームをはじめられない、担任教師。

「ホームルームをはじめると言ってるだろうが！！」

かくして、今日の一日は始まった。

夕陽は、もうほとんど沈んでしまっている。

『邪悪なる存在』、こいつがその強大な力を行使して、時空を捻じ曲げたためだ。

放課後。すでに薄闇が迫っている田舎道を、俺と砌は有坂家に急いでいた。

「くそつ、思ったより昼間が短い。懐中電灯を持ってくるべきだったな」

ほんのり赤味がかった地面を、目をこらしながら歩く。

「もうすぐ花梨の家ですから。ご両親に言えば、懐中電灯も貸してくれるはずですよ」

「そうだな。急ごう」

しかし、花梨は毎日この道を往復して学校へ通っているのか？
・・・どうりで丈夫なわけだな。納得。

「貴弘君、着きました」

砌の声に顔を上げる。そこには昨日とまったく変わらない、花梨の家。

「・・・明かりが・・・無いな」

そう、昨日とまったく変わっていないかった。

「・・・！」

瞬間顔を見合わせると、玄関へ走る俺達。ドアノブに手を掛けるが、回らない。

「花梨！花梨！いるなら開けて！」

ドンドン、とドアを打ち鳴らす砌。くそっ、ブチ破るしかないか・・・！？

そのとき、パツ、とつく玄関の明かり。ドアノブがゆっくりと回った。

「なあに？どんどん騒いで、砌。それに貴弘」

怪訝そうな顔をした花梨が、ドアを開けて出てくる。

「花梨・・・！無事だったの！？」

「・・・ん？無事だったのって・・・。私はただ風邪ひいて寝てただけ・・・。って砌！」

「よかった。よかったよー。花梨に何事もなくて」

「・・・」

うれしさのあまり花梨に抱きつく砌。そして完全に蚊帳の外の俺。

「・・・まあ、いいけど」

「ちよつと貴弘！砌をどうにかして・・・きゃあー！」

バランスを崩し、地面に倒れるご兩人。正直痛そうだ。

「おい。大丈夫かー？」

頭をさすりながら起き上がる花梨。

「大丈夫なわけないでしょ！・・・いつつ」

「ごめん花梨。ついうれしくて・・・」

今度は砌が、腰をさすりながら起き上がる。

「いいんだよ砌。悪いのはなにもしなかった貴弘なんだから」
俺かよ。

「そうかどうかは置いて。元気そうじゃないか、花梨」

着ていたパジャマの埃を叩いている花梨に言う。

「そりゃそうよ。健康なことが、わたしの一番の取り柄だからね」

「でも、もう起きて大丈夫なの？二日も学校休んじやっただし」

「もう大丈夫。ピンピンしてるよ」

砌の言葉に、胸を張って答える花梨。

「それならさ、お茶の一杯でも入れてくれよ。せつかく見舞いに来てやっただぜ？」

そのとき、花梨の眉がピクツ、と動いた。

「ごめん、それがさ、私の風邪が親にも移っちゃったみたいで。今二人とも寝てるから、悪いんだけど話なら外でしない？お茶は今すぐ入れて持っていくからさ。ちょっと待ってて！」

そこまで一気にまくし立てると、回れ右して家の中に入ってしまう花梨。一体どうしたんだ？

思わず顔を見合わせる俺と砌。仕方がないので、その場で花梨を待つ。

「おまたせー。待った？」

しばらくして、湯飲みを三つ、盆にのせて持ってくる花梨。

「当たり前だ。待ってるって言ったのは花梨だろうが」

「あはは。そうでしたー」

「・・・花梨、今日はちよつといつもと違うけど・・・大丈夫？」
なんだかいつもと雰囲気がちがう花梨に、戸惑っている様子の砌。

「え、・・・そうかな。風邪のせいかも」

ピタ、と額に手をやる花梨。

「おい、大丈夫か？なんなら、迷惑なら俺らは帰るから、早く家に入った方が・・・」

「だ、大丈夫だよ！だからさ、ちよつと外で話しょ？」

本人にそう言われたんじゃ仕方が無い。俺達は近くにあったベンチに座る。おそらく、花梨の両親が、農作業の合間に休むために置いたのだろう。

入れたての緑茶を俺達に手渡し、まず花梨が言う。

「まずは、ごめんね。何も言わないで学校休んじゃって。心配掛けちゃったね」

「いいさ。花梨が無事ならな。学校への連絡はご両親がやったのか？」

「う、うん。そう。私寝込んでさ」

花梨は漠然と前を見ながら答える。

「そう、か。じゃあ、ご両親に風邪がうつったのは今日のうちか」

「え？どうしてわかるんですか？」

「今風邪こじらせて寝込んでいるんだろ？ご両親。俺達の話し声も迷惑になるくらいだから、それなりに重い症状だろうし。もし昨日のうちに二人とも風邪だったんなら、どうせしばらくは花梨も学校に行けないだろうから、昨日のうちにしばらく休むって連絡するんじゃないか、と思って」

花梨を見る。花梨は何度が頷いて、

「その通りだよ。さすが貴弘、鋭いね。まるで名探偵だよ」

そして、わずかに微笑んだ。

「そうだったんだ。だったら私も看病手伝う？一家全員風邪なんだったら、大変でしょ？」

砌が提案する。確かに、病み上がりの花梨には、二人の看病はツライだろう。

しかし、砌の提案に、花梨は口元の笑みはそのままに、視線だけ少し下げて答える。

「ありがと、砌。でも、砌にまでうつたらヤだし、それにもう二人とも峠は越えたから、一人でもだいじょうぶ」

「そうか、でも、無理はするなよ？」

花梨には申し訳ないが、砌は重要な戦力だ。いつ戦いが始まってもおかしくない現状では、他のことに手を回している余裕はない。

「大丈夫だって。私はもう元気なんだから。・・・それよりさ」

花梨は視線を上げ、満天の空を仰いだ。

「砌と貴弘は・・・その・・・」

一瞬言いよどむ花梨。しかし、意を決したように俺たちに顔を向けた。

「あの、この間の化け物と、戦っているの？」

「・・・」

予想外の言葉に、二人とも返事が出来ない。

しかし、花梨はたった五日前、花梨の言う化け物――

凶暴化した『鬼』に殺されかけている。

あの時は教文さんが口止めをしていたが、むしろ、よく今まで一度もそのことを口にしなかったものだ。

人が多い場所ですそのことを話すことは、俺や砌にとって都合が悪いのだと考えてくれたのだろう。

「・・・それは、言えない」

「貴弘君・・・」

だが、花梨を巻き込むことは絶対にできない。

・・・それが、ますます花梨を不安にさせることになっても、だ。

「！なんで？私だって、もう巻き込まれているんだよ？少しくらい・・・」

「少しくらい。・・・知ってどうするんだ？」

「・・・！それは・・・」

「知っても、どうしようもないこともある。それに少しくらい知ったところで、余計混乱するだけだ」

どうしようもないこと、か。俺が言えるセリフじゃないな。

「でも、でも・・・！」

「花梨」

辛そうに視線を下げながら、砌は言う。

「もう止めて。これ以上私たちを困らせないで。花梨のためでもあるんだよ?」

砌の言葉に、ぐっ、と拳を握る花梨。

「でも……! だったらなんで、なんであつみは……」

……な、

「あつみは……死んじゃったの?」

……どうして。

「あつみのことを知っている!？」

俺は思わず立ち上がる。花梨も、本当は言う気はなかったのか、はっ、と驚いた顔をしている。

あつみのことをはじめ、今回の『邪悪なる存在』に関係した一連の異常事態は、教文さん達、神主達がなんとか情報操作をして、村人達が混乱しないように隠蔽しているはずだ。実際あつみも、持病が再発して学校を休んでいるということになっている。

「……」

砌は、もうなにも言えない。完全に顔を俯いてしまっている。

「……花梨、俺達に内緒で、一体何をしてたんだ?」

再びベンチに座りなおし、問う。

「……ごめん」

申し訳なさそうに、しゅん、とうなだれる花梨。

「あの化け物に襲われた次の日から、放課後別れた後、二人のあとをつけてたの」

『鬼』に襲われた次の日。砌が特訓をはじめ、村はずれの廃病院に行き始めた日だ。

「そしたら、二人して村はずれの病院に入っていくでしょ? 最初は病院の中明かりがないし、怖くて中には入らなかったんだけど、二日前覚悟を決めて入ってみたら……」

ぼろぼろ、と花梨の瞳から涙がこぼれる。

「……貴弘、とあつみ、が……! ……戦って、て……」

「もういい。……もうわかったよ、花梨」

花梨の肩に手を乗せ、それ以上の言葉をとめる。

四日間も毎日あとをつけられていたなんて。くそっ、なんで気づかなかったんだ！！

「・・・ねえ、なんで？・・・なんで、あつみは・・・死んじやつたの？」

「・・・」

「ねえ、答えて、よ。・・・答えてよ貴弘！！」

掴みかかるような勢いで、身を乗り出す花梨。

・・・それは、俺が不甲斐ないからだ。弱いからだ。

このことを隠したところで、村人が助かるわけではない。むしろ知ってもらって、誰か他の陰陽師と変えてもらいたい。・・・いれば、そうだとっても、花梨達一般人を巻き込むわけにはいかない、このことに変わりはない。

「なんで？なんで教えてくれないの？・・・それは」

花梨が俺の瞳を見つめる。俺も、その視線をまっすぐ受ける。

「それは、私に『力』が・・・ないから？」

五日前のあの日、襲われたのは、ここにいる三人だった。

俺は陰陽道を使つて『鬼』と対峙した。

そして、砌は、無意識であるが、強大な『気』による力を使つて、『鬼』を撃退した。

その俺と砌が、共に、二人だけでよくわからないことをしている。それに対して、花梨は襲つてきた相手の素性もろくに教えてもらえない。

俺達と花梨の違いはなにか。

つまりは、そう考えたのだろう。

「・・・花梨。それは違う」

「じゃあ！じゃあなんで砌を巻き込むの？なんで私にはなににも教えてくれないの？」

「・・・」

そうだ。いくら砌の力が強大であっても、いくら砌自身が志願した

からといつても、保護者である教文さんが許可したからといつても、砌をこの戦いに巻き込んでいい道理は、ない。

「私にだって・・・」

「花梨！！」

砌が叫ぶ。普段の砌からは考えられない表情に、思わずその顔を見失ってしまう俺と花梨。

「やめて。だってそれは、花梨の代でなくなっちゃったんでしょ？」

「・・・ちがうわ。実はちがうのよ。砌」

「・・・なにを話しているんだ？・・・まさか、

「花梨、お前にも・・・」

まさか、人外の力が？

「そう。その通りよ。・・・やっぱり、貴弘は探偵か刑事の方が向いてるよ」

「花梨。やめてよ。その力のせいで、花梨のご先祖様はこんな山奥に追われちゃったんでしょ？ねえ、お願いだから・・・」

ついに泣き出してしまふ砌。花梨を戦いに巻き込みたくない、この想いは砌も同じだ。

「それに、花梨自身も言つてたじゃない・・・。私には、まったく・・・力が継承されていない、みたい・・・だって・・・」

「・・・そう、思っていたよ。だって、今まで生きてきて、たったの一度も発動しなかったんだもの」

——俺は、黙って聞いていることしか、出来ない。

「それがね、おととい、ふと、ほんとに、ふつ、と」

「花梨・・・」

「・・・発動しちゃったのよ」

そんな、なんでこんなタイミングで・・・！

・・・もしかして、こんなタイミング、だからこそなのか？

「ね？私にだって・・・」

こんなタイミング・・・？

「なあ、一つ聞いていいか？」

花梨はおととい、力が『発動しちゃった』、と言った。

「学校を休んだのは、本当に風邪のせいなのか？」

「……！！」

ぐつ、と息を呑む花梨。それがすべてを語っていた。

「やっぱり、な。今まで発動しなかった力が、思いがけず発動したんだ。体に何らかの変化があつて当たり前だ」

「……」

俯き、黙つたままの花梨。俺は続ける。

「この発動が、今回の一連の出来事に、関係があるのかはわからないが、ご両親は花梨の、突然発動した力に当てられたんだろう」

「……それが、なんだつて言うの……？」

地面の見つめ、花梨はつぶやくように言う。

「……制御できないんだろ？……力を」

「！！……そ、それは……」

「だったら、今日は一ノ瀬の家に泊めてもらえ。ご両親の看病には典子さんに来てもらうか、あとは教文さんに相談……」

「やめて！！」

叫ぶ花梨。だが、今度もそんなつもりはなかったのか、口に手を当て、驚いている。

「え、いや……その」

「なにがダメなんだ？このままにしたつて、しょうがないだろ？教文さんなら、きつとなにかいい考えがあるさ」

「ちがうの、そうじゃなくつて……」

えつと……と何かを考える花梨。

「私の親が、私の力のせいで具合が悪くなっているなら、私が離れれば元気になると思う。だから、典子さんや他の人にも、来てもらう必要はないと思うよ」

「……確かに、一理ある。どうするか——」。

迷つた俺は、砌に目線で意見を求める。その眼は、

——今は、花梨の言うとおりにしましょう。

そう、言っていた。

今の花梨は、少し精神的に不安定だ。あまり刺激しないほうがいい、か……。

「……花梨がそう言うなら、そうしよう。でも、本当に大丈夫なんだな？」

確認する。とは言っても、あとで俺自身で、ご両親の状態を確認する必要があるだろう。

「うん。でもちよつと待って。砌の家に泊まることを伝えるついでに、少し看病してくる。でも二人とも寝ているだろうから、様子を見てくるだけ、だけどね」

そう言つと、そこで待っててすぐ行くから、と花梨はまた家に入ってしまう。

「……大丈夫でしょうか」

「花梨のことか？それとも、花梨の両親のことか？」

「もちろん両方です。でも、花梨の方は私たちがいますが、ご両親の方は……」

「もちろん、このままにはしておかないさ。一応典子さんにも今日中に言っておくし。花梨自身も大丈夫と言っているんだし、そんなに心配しなくても大丈夫だろう。それより、花梨は俺が一ノ瀬神社まで連れて行くから、砌は先に行つて準備をしておいてくれないか？」

口に手を当て、少し迷っていた砌だったが、納得したようだ。

「わかりました。では先に行つてますね」

「ちよつと待った。一人は危ない。今命を呼び出すから、一緒に行つてくれ」

砌が持つ潜在的な『氣』の量は計り知れないからな。『鬼』どもにも狙われやすい。

「……わが名、貴弘の名において律する。御珠上 命、直ちに我がもとへ参上せよ！」

空間をショートカットして現れる命。しかし……

「・・・・・・・・」

「はへ？はうえふか、ははひろひゃん（あれ？なんですか、貴弘さん）」

現れた命。・・・と、大量のどら焼き。

「・・・お前、一ノ瀬神社にいたな？そうだな？」

ぎくつ、と過剰反応する命。慌てて口に入れていたどら焼きを飲み込もうとする。

「ダメじゃないですか、命さん。勝手に今日の分のお菓子を食べちゃ」

メツ、と命を叱る砌。重ねて断っておくが、命は砌よりも70周くらい年上だ。いや、ホント。

「・・・まあ、今はいい。それよりも、命、これから砌と一緒に一ノ瀬神社に行ってくれ。詳しい説明はあとだ。俺もあとから合流する」

「？よくわかりませんが、また戻ればいいんですよね？」

ようやく、口に入れていた分のどら焼きを飲み込んだ命は、はて？と首をかしげる。

「そうだ。しっかり砌を護衛しろよ」

「了解です、貴弘さん。じゃあ砌さん、さっそく行きましょう」

怒られるのではない、と悟ったのか、命は妙に上機嫌だ。

「・・・はい。わかりました。よろしくおねがいます、命さん」

了解ですー、と歩き出す命。しかし、砌は一度こちらを振り返る。

その顔は、心配の色が隠しきれないでいた。

「貴弘君・・・その・・・」

「わかってる。花梨はちゃんと俺が一ノ瀬神社に連れて行く。花梨のご両親だって、典子さんや教文さんをお願いすれば、大丈夫さ」

砌は、そうですよね・・・、と再び自分を納得させると、顔を上げ、命についていく。

「あ、命さん、歩きながらも食べちゃ行儀が悪いですよ」

「うあにゃー。ちよっとくらい見逃してくださいよう」

徐々に遠ざかっていく二人。命がついていれば、ひとまずは安心だろう。

それよりも、今は花梨だ。

家に入ってから結構経つが、大丈夫なのだろうか。

心配になった俺は、玄関口から声をかける。

「おい花梨！大丈夫か？なにか手伝うことあるかあー！」

「騒がないでつて言っただでしょー！すぐ行くから待っててー！」

・・・そういえばそうだったな。手伝うつもりが邪魔してしまっ
は、本末転倒だ。

俺は、知らなかった。知らなかったんだ。

花梨の父親が、玄関のすぐ横の居間で。

――安らかに、眠っていることを。

陽は完全に稜線の向こうへ追いやられ、欠けた月が我がもの顔で、漆黒の空に君臨している。

あたりは、静かだ。もうここ数日は、虫たちの鳴き声も減り続けているようだ。

夜の空気も、いつの間にか、ひんやりと足元をぐり抜けるようになった。

冬が、近い。

「・・・ねえ、もうそろそろ教えてくれない？」

花梨の家を出発してから、一度も言葉を発さなかった花梨が、口を開く。

「・・・教えるって、なにを」

「貴弘、君が一体何者なのかって、ことだよ」

俺は花梨の様子を伺う。花梨は、純粹に俺のことが知りたいようだった。

それがどういう意味なのかも、承知して、だ。

「俺は・・・陰陽師だ」

「つぶ。くくく・・・」

・・・おい。なぜそこで笑う？

「花梨、真面目な話だぞ？お前が知りたいって言うから・・・」

「くくく・・・。ごめん、わかってるよ。たださ、あんまり予想ど
うりだったって言うか」

花梨は笑いのあまり出てきた涙をぬぐう。

「なんか特別情報機関とか秘密結社とか、そういう、なんか言われ
ればありそうなものより、陰陽師の方が笑って済ませられそう」

まだ笑いの余韻が残っているのか、微笑む花梨。

「済むかつ・・・でもまあ、こんな非現実的なことをしているの
は、やっぱり陰陽師か魔法使いぐらいしか考えつかないよな、普通」
「そうよ。だから変に納得しちゃった。・・・本当に陰陽師なんだ
ね。貴弘・・・」

ああ、そうだ。それも代々陰陽師の家系の生まれという、生粋のな。

「あ、だからって、花梨をどうこうするってワケじゃないぞ？」

「？どうこうって？」

「なんというか、保護とか、異端狩り、とか。陰陽師は、基本的に
面倒事にはちよっかいはいは出さないんだ」

現在の陰陽師は、社会の裏でひっそりと生きる者。やたらとちよっ
かいを出して、世間に存在を知られるとやっかいだからだ。

その陰陽師が、なぜ今回こんな面倒事にちよっかいを出したかと言
うと、規模が大きすぎたためだ。

・・・要するに、『全人類がいなくなってしまうのであれば、隠れ
てたって意味がない』。そういうことだ。

「えー？貴弘が？私を？」

「だから、しねえって。まあ、俺になにか出来ることがあったら、
なんでも協力するけど」

「え？・・・ほんと？」

花梨は、一足俺の先に回ったかと思うと、クルリ、と反転して俺の
瞳を覗き込む。

「あ、ああ。もちろん」

どんな無理難題が来るのかと身構えていたが・・・。

「・・・やつぱり、いいや。やめやめ」

背を向ける花梨。いつたinnanなんだ？

「おい、それはないぜ。そこまで言いがかつておいて」

うーん、と一瞬考え、やつぱりダメ、と答える花梨。

「自分の胸に手を当てて、じつつくり考えてみれば？」

おい。俺のせいだよ。

「そうだよ。みんな、みんな・・・」

目線を下げる花梨。懐中電灯の明かりだけでは、それ以上の表情は見えない。

「みんな、君が中心なんだよね・・・」

「・・・」

そう、だ。俺がもつとしつかりしていて、実力があれば、もつとスマートな、だれも犠牲にすることのない、解決策を考えついたかも知れない。

「なあ、花梨・・・」

「だからね？私も、なんとか君や砌に迷惑かけないように、一人で何とか力を制御しようとしたんだけど・・・無理だった・・・」

俺は懐中電灯の明かりを、花梨の顔に向けたい衝動に駆られた。だが、突然の刺激は、今の花梨にはよくない。

「大丈夫さ。一ノ瀬神社なら、俺や砌、教文さんに命までいる。あ、命っていうのは俺の式神なんだけどな。あそこなら俺たちで力の制御もしてやれるし、慣れないこととして疲れただろ？今日はゆつくり休めよ。な？」

不安な気持ちを紛らわすために、まくし立てる俺。

「うん。そうだね」

そんな俺に、花梨は夢く笑った。

「・・・そうだよな。私は貴弘や砌、それにあつみ。みんなと一緒になんだよね」

その微笑みは、俺達の知っている花梨とは、やはりちがっていた。

「みんなとの思い出が、やっぱり一番楽しかったよ……」
その一言が、痛い。

夜のノ瀬神社。その石段の前に、砌と命、そして教文さんが出迎えに出てくれていた。

「おお、花梨君、そして荒川君。待っていたよ。無事でよかった」
「あの……お世話になります」

どこか他人行儀に、頭を下げる花梨。

「なに言っているんだい、今までだってたくさん泊まりに来てくれたじゃないか」

「そうだよ花梨。疲れているなら、おじいちゃんか貴弘くんの背中に乗せてもらいなよ」

教文さんや砌が話しかけるが、花梨は首を振る。

「大丈夫です。歩きます」

「平気か？なんなら肩とか貸すぞ」

「大丈夫だってば。ここまでだって歩いてきたんだから」

花梨はぽん、と足を叩いて強がる。だが、その顔には疲れがにじんでいた。

「そうだったら、早く中に入ろう。もう夜が冷えるようになったからね」

「そうだね。さ、早く入ろ、ね？」

花梨の手を取り、先導する砌。

「う、うん……」

「お風呂は沸いてるから、すぐに入れるよ。砌も一緒に入っておいで」

「うん。わかった」

ゆつくりと石段を登っていく砌たち。そのあとに続こうとした教文さんが、振り向く。

「そうだ。せつかくですから、命さんも一緒にどうですか？三人ぐらいなら入れる広さですから」

「わあ、ほんとですか？ならお言葉に甘えて・・・」

「いえ、命は私と一緒に調査の続きがありますので……。それに一度花月に帰って、典子さんに、花梨のご両親の看護について話さなくては・・・」

美々子は喜んでついて行こうとしたが、俺はそれを止める。

「・・・そうですか。では、よろしくお願いします。花梨君のご両親の件は、私が誰か行かせるようにします。貴弘君に命さんも、風邪を引かないように、気をつけて」

一瞬何かを探るように目を細めた教文さんだったが、すぐにいつもの微笑みに戻ると、では、と言って石段を登っていった。

「行くぞ。命」俺も、石段に背を向け、歩き出す。

「ちよ、ちよっとまっすぐくださいよう、貴弘さん」
なにか、なにかが蠢いている。

この村で、『黄泉の門』が？『邪悪なる存在』が？

そうだ。それが蠢いているのは間違いない。

だが、なにかがちがう。姿は見えているのに、掴めない、『まぼろし』のような・・・。

いや、逆だ。もう姿を現している、もしくはその兆候が現れているのに、俺が認識できないでいる。

・・・そんな感じだ。

学校まで歩き、校庭の真ん中に立つ。そして、周りに誰もいないことを確認する。

「???なにしてるんですか？貴弘さん？」

「命。今夜、お前は、この村を囲む山々を、もう一度調査してくれ」

「・・・山を、ですか？」

ゆっくりと命に振り向き、うなづく。

もう一度。俺なりに調査をしない必要がある。

「しかし・・・このあたりの山々は、そのほとんどが精霊たちの張った結界の境界付近なので、ただでさえ『気』が溢れています。詳しく調査するのは困難かと思いますが」

「構わない。俺の考えでは、おそらく、奴らは山にはいない。ただ、その確証がほしいんだ」

命は俺の意図を探る。俺の言っていることは、俺自身が今までやってきたことを否定しているようにも聞こえるからだ。

「いない、とわかってるのに、探すのですか？」

「だから、その確証がほしい。俺は今夜、村を見回っている神主たちと接触する」

「……」

命は、じつ、と俺の話を聞いてくれる。俺の考えを理解するために。
「そして、明日は……それは今日の結果によつては、考え直すかもしれないが……」

一瞬言いよどんでしまうが、言う。

「お前は一日、教文さんの様子を、見ていてくれないか」

「……！！貴弘さん、それは……」

さすがの命も驚いたようだ。そうだ。確かにこれは……
「今までの共闘関係を、崩しかねない。これは賭けだ。だが、やらなくちゃいけない」

「貴弘さん。あなたの考えには賛成できません」

きつぱりと言う命。そんな命に、俺は周りをもう一度確認した後、俺の考え、その根源にある一言を口にする。

「……教文さんは、何かを隠している」

「……！そんな……」

「教文さんが、なんとなく不可解な行動をしているのは、お前も知っているだろ？」

これは俺だけではなく、命も実際に感じてきたことだ。

「神主さんたちが、実は村の見回りをしていたことですか？」

「それもあるが、神主たちに、花梨の家の見回りをさせなかったことも、気になる」

俺の未熟さゆえに、奴らが見つからないなら、まだなんとかなる。だが、もしも……。そんな考えを持ったまま、この戦いに望みた

くない。それだけなんだ。

「・・・わかりました。でも、私は本来偵察が専門ではありませんので、見つからないためにはかなり距離をとらないといけません。・・・」

そのために、あまり詳しい情報を収集できない・・・か。

「それはもちろんわかっていて。・・・頼む」

「やめてくださいよ。どこに自分の式神に頭下げる人がいるんですか。貴弘さんらしくないですよ」

俺らしくない・・・か。まあ、こんな厄介事に首を突っ込んでいる時点で、すでに俺らしくない。

「では、周りの山々を一周したら、花月に帰ります」

一言そう言つと、瞬時に移動する命。

「さてと。俺も刑事ごっこでも始めますか」

・・・はじめから俺らしくないのなら。

いいだろう。最後まで付き合つてやる。俺には刑事の才能もあるらしいしな。

——もう、誰も死なせはしない。

村を見回っている神主は、簡単に見つかった。もともとそれほど大きい村ではないから、明かりの無い中でも、ぐるぐる回っていれば見つかった。

白い神主服が、目立ったということもある。

「すみません。お役に立てなくて」

しかし、収穫があつたかというところ、そうは言えない。

神主達は、何も知らなかったのだ。ただ、教文さんの指示に従つただけ。

「・・・・・・・・」

「あの、善井山には、行つたのですか？」

何も言わない俺に、気まずそうに神主が声をかける。

「ええ、まあ」

「どうでした？今では、ハイキングロードなんかも整備されていますが・・・」

・・・あれ？ハイキングロード？そんなものあったのか？

「・・・そうですね。景色もきれいだっし。楽しかったですよ」
くそ、花梨め。すべて片付いたら覚悟しろよ。

「楽しかった？真面目にやっているのですか？」

あ？真面目にハイキングしてどうすんだ？楽しんで何が悪いんだ。
喧嘩売ってるのか、この神主。

「いや、そんなに睨まないでくださいよ。ただ、あの場所は10年前の戦いがあつた場所ですから、重点的に調査をしてもらわないと・・・」

・・・ちよつと待て。もう一度言ってみろ。

「え？ですから、善井山は10年前、『黄泉の門』が現れた場所で、『黄泉の門』から出現した、『邪悪なる存在』との決戦が行われた場所でもあるのです。・・・知らなかったのですか？」

知らなかった。知らされなかった。こんな基本的なことさえ。

「まあ、教文さんの話では、奴らはもうそこにはいないらしいですけどね」

「・・・当時のことが知りたい。なにか知っていますか？」

すると、神主はいや・・・、と首を横に振った。

「あの決戦に参加して、生き残つたのは教文さんだけなのです。その関係もあつて、当時の記録は、すべて一ノ瀬神社に保管されています」

そうだ。いままですっかり忘れてしまっていたが、この戦いは、二度目なのだ。

前回の記録を調べることなんて、調査の常識中の常識だ。

「やっぱり教文さん、か・・・」

すべての力ギは、やはりあの人が握っているのか・・・。

「すみません。お役に立てなくて」

しょんぼりと肩を落とす神主。どうりで、この神主をはじめとした

神主達が、みな若いわけだ。

「いえ……。みなさん、10年前の戦いのあとにこっちに来た、ということですか」

「そうです。あの戦いで、この付近の神主は、みんな亡くなってしまいましたから。教文さんを除いた全員が、あの戦いのあと、特例として神主庁から派遣されてきた神主です。まあ、教文さんも、当時もう引退していたらしいのですが、当時の神主であつた息子さんを、あの戦いで亡くしてしまったので、また神主をやっているらしいです」

息子さん……。砌の父親か。

「その息子さんは、教文さんの実の息子なのですか？」

「いえ、本当はふもとの池田大社の跡取りらしいです。こっちの、一ノ瀬神社の神主も兼任、ということでしょうね」

兼任か。だったら大変だっただろうな。移動するには、山を往復しなくてはいいけないし。

「ええ、そのせいで、大半は池田大社の方につきっきりで、あまりこちらには戻っていないかったようですよ。10年前の戦いを生き残つた村人たちにも、彼の顔を覚えているものはいません」

「え？一人もいないのですか？」

そんなことがありえるのだろうか。

「ええ、そうなのですよ。私もよく、前の神主さんのようにやってくれ、と言われるので、自分なりにその人がどういう人なのか、調べてみたのですが、不思議とその人の顔が写っている写真が、まったく見つからないのですよ」

神主という職業柄、もともと写真を撮る機会はそんなにないだろうが……。

「いい人だったらいいのですがね。あの戦いの後、教文さんが砌さんを引き取ってから、池田大社ともまったく連絡を取っていないみたいです」

参っちゃいますよね、と神主はため息をつく。……この神主さん

も苦労してるんだな。

「じゃあ、他になかったら、もういいですか？また明日ということ
で」

「あ、はい。いろいろ参考になりました」

「まあ、このぐらいしかお役に立てませんが。では」

見回りに戻る神主。その背が見えなくなるまで、じつ、と見送る。

・・・やはり、教文さんは怪しい。まだ、その理由が見つからないが・・・

明日、ダメもとで10年前の記録を見せてもらえるよう、頼んでみるか。

よそ者の俺が10年前の戦いを知るには、どのみちその記録を見るしかない。

もし見せてもらえないようなら、忍び込んででも・・・。

突然の寒気に、体を振るわせる。・・・早く花月に戻ろう。

「ただいま」

「貴弘さん。お帰りなさい」

花月に戻ると、夜も遅いのに典子さんが出迎えてくれた。

「典子さん、いいんですよ、こんな夜遅くに出迎えなんて」

典子さんはふるふる、と首を振る。

「いえいえ、女将として当たり前のことをしているだけです。それより、命さんがお待ちかねですよ」

「わかりました。では、おやすみなさい」

典子さんに挨拶し、階段を上がる。

命は先に帰っていたか。となると・・・。

俺たちが泊まっている部屋の、ふすまを開ける。

「あ、貴弘さん！お帰りなさい！」

布団の上でゴロゴロ寝転がっていた命が、ぱつ、と起き上がる。

「あまり時間がかからなかったところを見ると、やはり・・・」

「・・・ええ、周辺の山々のなかで、特に変わったものはありません

んでした。やはり、精霊たちの強大な『気』の前では、詳しい調査は不可能でした」

それはもうわかってる。しかし、もし奴らが潜伏しているのなら、詳しく調査しなくても、わかるだろう。

「これで、確証が持てるな。やはり、周辺の山には奴らはいない」
「そうだ、山といえば・・・」

「命、善井山には行っただか？」

「善井山、ですか？」

「そうか、命はどの山が善井山かしらないんだっただな。」

「あ、いえ。村人から情報収集をしていたときに、聞きました。もちろん調査しました」

「で、どうだった？」

「どうだったかと言われても・・・。他の山と、特に変わったところはないも・・・」

「善井山自体には、もう何も手がかりはない、か。」

「わかった。とりあえず、今日はもう寝よう。明日は大変になる」

——息遣いさえ聞こえない空間に、墨染めの闇は浸透し続ける。それは光を奪い、熱を奪い、人々の魂を奪う。

そして、その時にはすでに、一つの魂が、闇に導かれようとしていた。

蠢く闇、そのものによって——

「・・・・・・」

目覚めは、良いわけなかった。

考えることだらけだ。もうなにかから手をつけていいのか、正直わからない。

くそっ、時間が足りない。とりあえず今は・・・

「貴弘君！！貴弘君起きてますか！！？」

「あら、どうしたの砌ちゃん、そんなに大声出して」

？階下から声。どうやら砌が今日も来てくれたようだが・・・様子がおかしい。

ダダダ・・・、と階段を駆け上がる音が聞こえると、ふすまが開いた。

「あ！貴弘君！起きてた！？」

「いや、どつちにしろ、あんなに大声出されたら起きるって」

「いいから来て！花梨が！」

・・・え？

「早く！！花梨が！！花梨がないの！！」

なん、だって・・・！？

一ノ瀬神社の一室。奥の居住用のスペースにある、砌の部屋。

仲良く並べて敷かれた二組の布団には、花梨の姿はない。

「私が隣に寝ていたのに・・・なんで」

昨日別れたあと、風呂に入って夕飯を食べた花梨は、とても落ち着いていて、機嫌が良かったらしい。

今まで張りつめていた神経を、存分に休ませていた様子だったと言う。

そして、いつも泊まりに来るときと同じように、砌の部屋に並べて布団を敷き、おしゃべりして、やがて眠りについた。

はずだったのだ。

「とにかく、手分けして探そう。教文さんは？」

「おじいちゃんは、もう村にいる神主さんたちを集めて、花梨の行きそうなところを探してます・・・けど」

神主たち総出で探しているという事は、おそらく、もうめばしい場所を探し始めているだろう。

「命。お前は教文さんのところへ。わかったな？」

命に「昨日話した通りに」と目線で伝える。

「わかりました。・・・貴弘さんも気をつけて」

窓から飛び出し、すぐに見えなくなる命。

そんなに大きい村でもないし、村の外には出られない。ならば教文さんについていた方が早く見つかる可能性が高い。

・・・教文さんがこの件に関与している可能性も、高い。

「なんで・・・私が隣に寝ていたのに・・・黙ってなんて・・・、それに、わたし、何で気づかなかったの・・・？」

「砌。それは花梨を見つけて、本人に聞くしかない。今は花梨を探そう」

「私、花梨がどんなに傷ついているか、わかっていなかった・・・」

おそらく、昨日花梨が上機嫌だったのは、砌や俺たちを心配させないためだろう。

「自分を責めるな。それよりも、俺たちは花梨の家に行こう。ご両親も心配だし」

神主たちもあそこは見回っていないはずだし、見落としているかもしれない。

砌は潤み始めていた瞳を拭くと、こくん、と頷いた。

時間は丁度登校時間。村のあちこちから、生徒が学校に集まっている。

「おう、一ノ瀬に荒川。どうした夫婦そろって？」

「駆け落ちか？」

「手伝うか？」

どうして、会う男子生徒はみんなこんな奴らなのだろうか。

「きゃー！砌！教文さんはまかせて！私が慰めて差し上げるから！」

・・・女子も変わらんか。

「ちよつと悪い。今急いでるんだ」

説明はあと・・・にするときつと手遅れになるが・・・仕方がない。

今は一秒でも早く、花梨の家へ。

昼間に見る花梨の家。それは、昨日とまったく変わっていなかった。

ドアノブを回すと、カギが開いていた。

「……………」

一瞬迷ったが、中に入る。部屋中のカーテンがあり閉めてあり、暗い。

「花梨ー！いるなら返事してー！」

砌は階段を昇り、真っ先に花梨の部屋へ向かう。

俺は一階から調べることにした。

見た感じ、特に以上があるようには感じられない。

しかし、微弱だが感じる。

「微かだが・・・間違いない。『気』だ」

ある程度時間が経っているが、ここで『気』による、何らかの力の行使があつたと見て、間違いない。

花梨の制御できない「力」が、ここで発動したのだろう。

だが、一体何が起こったんだ？花梨の「力」とはどんな能力なんだ？

・・・思い出す。

花梨は、この「力」が発動したことによって、俺たちと一緒に行動したい、と言った。

花梨は、俺たちがしていることを、身をもって知っている。それがどれだけ危険なことなのか、も。

・・・まさか。

「貴弘くん！！」

二階から駆け下りてくる砌。どうやら二階に花梨はいなかったようだ。血の気が引いて真っ青な顔をしている。

「どうした？花梨がいらないんだったら、他の場所を・・・」

「花梨はいなかったけど・・・」

砌は一度深呼吸すると、言った。

「ねえ、ご両親、いた？」

「……………！！」

そして、気づいた。

こんなに大騒ぎしているのに、物音一つ聞こえていない。

一階は、このリビングルームと、残りはおそらくトイレやバスルームくらいなものだろう。

ふと視線をおろすと、テレビに面するように配置されたソファの上。

まるで昼寝をするように、不自然に並べられている、セーター、ズボン、靴下。

・・・男性用の洋服、一式だ。中身は、ない。

くそっ！くそっ！くそっ！

村の中をがむしゃらに走りながら、必死で花梨の居場所を考える。

「早く、早くしないと・・・！！」

・・・おそらく花梨は、「制御できなかった」んだ。

自分の意思とは無関係に。そして、花梨は自分の能力を詳しくは「知らなかった」。

結果として。それは残酷にも、その本来の能力を発揮した。

そして、花梨は俺や砌を求めた。

・・・一人にしないで、と。

しかし、俺はの方が良いと判断したとはいえ、結果的に花梨を拒絶した。

・
一気に多くのものを失ってしまった、と感じた花梨は、おそらく・・・

最悪の場合、自ら、命を絶ってしまうのでは、ないか。

今、花梨の力は不安定な状態だ。しかし、それは「制御しよう」とするが、「思い通りにならない」から「不安定な状態」なのだ。だったら、「制御しよう」とする意思を、失くしてしまったら・・・くそっ！

ひたすら前に進む。どこを走っているのかすら、わからない。

「貴弘くん！」

花梨の家を突然飛び出し、ひたすら走り出した俺に、砌が追いつく。
「そっちは私の家です！」

「!!」

砌の言葉に、急停止する。

「はあ、はあ、はあ・・・むやみに走り回っても、しかたがありません」

砌は俺の隣まで走ってくると、息を整えつつ、言った。

「・・・考えましょう。これだけ探してもいないということは、なにか見落としが・・・」

独り言のように言う。この言葉は、自分に言い聞かせてもいるようだ。

そんな砌の様子を見て、俺は必死に理性を取り戻し、考える。

「・・・そうだ、昨日の花梨の様子を、もう一度思い出そう。そこから、推測するんだ。」

昨日花梨の家に行ったとき、花梨は無理に明るく振舞っていた。きつと暗く沈んだ心を隠すために、無理をしていたんだろう。

そして、俺と砌のしていることについて問い、あつみの死を知っていたこと、四日間俺たちをつけていたことを暴露した。

もしかして、あの廃病院？

「・・・いや、違うな。花梨が布団を抜け出したのは昨日の夜。

昨日の夜も、神主たちがあの廃病院を見回っているはずだ。

特に、あの廃病院は、前々からの化け物出現情報もあるし、この間の件もあつたから、重点的に見回っているはずだ。

すると、そのあと。

花梨は俺たちの手伝いをしたいと言った。そして、俺はその申し出を拒絶。

花梨の感情はさらに不安対になり、ついに自分の「力」が発動したことを暴露した。

俺は花梨の話から、花梨が自分の「力」を制御できないことを見抜き、花梨に一之瀬神社に泊まるように説得。

「・・・ここまでは、場所につながるような要素は見つからない。

そして、泊まる準備が整った花梨と一之瀬神社に向かった。

そこで、話したこと。俺が陰陽師だということ。俺は花梨の味方だということ。

その最後に、花梨は言った。

「・・・そうだよ。私は貴弘や砌、それにあつみ。みんなと一緒になんだよね」

「みんなとの思い出が、やっぱり一番楽しかったよ・・・」

花梨、俺、砌、あつみ・・・みんなと一緒に。

そして、そのみんなとの思い出・・・。

この4人が全員集まった時間は、そう多くはない。

・・・善井山か！

あの善井山ハイキング。弁当争奪戦や、なぜか俺が蹴られたりと、ハプニング続きだったが、一番楽しかった。

「砌！善井山だ！善井山に行くぞ！！」

その楽しかった場所で、楽しかった思い出と共に。

きつと花梨は、最後を向かえようと考えたに違いない。

待つて。すぐ迎えに行くから。

・・・少しだけ、待つていてくれ・・・！！

静かに、ただ静かに。

善井山は、俺達の動揺などお構いなしに、変わらずそこにあった。

・・・くそつ、この間はどこから登った？

確かにこの辺りから山に入ったはずなのだが・・・。

なんだ？山が・・・俺を拒否している・・・？

「貴弘くん！！こつちです！」

後ろから追いついた砌が、迷わずに山に分け入っていく。

・・・そうだ、立ち止まっている暇はない。

気を取り直し、山の茂みに分け入る。

だが、なんなんだ？この、来るものすべてを拒絶するような、濃厚

な『気』の膜は。

花梨の『気』がいくら制御できないほど強大とはいえ、こんなにはないはず。

しかも、かすかに黒い。まわりつくような気持ち悪さもある。

・・・いやな予感がする。とてつもなく、いやな予感が。なんだ？なにが起こっている？

そして、その予感を確信に変えるように、現れたのは。

「！！なんで、お前がここに！？」

「あ！貴弘さん！丁度いいところに！」

教文さんをマークしていたはずの、命だ。

「命さん！花梨は見つかりましたか！？」

命に気づいた砌が、命に呼びかける。

「花梨さんは頂上にいます！急ぎましょう！」

・・・え？

「なんで知っているんだ？知っているなら俺たちより先に・・・」
横を走る命に言う。

「・・・教文さんも、いるんです。頂上に」

・・・な。偶然なのか？それとも・・・。

「教文さんが到着したのもたった今です。そうしたら頂上には花梨さんがいて・・・」

「もう教文さんは花梨のところに？」

「はい。かなり距離を置いていたので、詳しくはわかりませんが・・・、なにか話していたように見えました」

・・・ただ話していただけ・・・か。それだけだったら、なにも怪しいところはないな。

「そして、ちょうど判断を仰ぐうとしていたところに、貴弘さんと砌さんが来たのです」

・・・そうなると、確かにそんなに時間は経っていない。急げば間に合うはず。

その瞬間、煌めく閃光。一瞬あとに襲い掛かる『気』の濁流。

「きゃああ!!」

物体に影響を及ぼすほどの、いうなればゼリー状の『気』が、波動となって俺たちを押し流そうとする。

「ど、どんな規模だよこれは!」

本来、そこにあるだけならなんの影響も及ぼさない『気』に、俺は押し流されまいと耐える。・・・冗談じゃねえぞ。

しかし、それは一瞬でなくなる。まさに一陣のつむじ風が吹きぬけただけかのように。

「ど、どうしたのでしょうか・・・」

「とにかく、今のうちだ!一気に頂上まで行くぞ!」

・・・『気』が一瞬だけ増大し、すぐに消えたということは。まさか、力が暴発・・・!?

いや、それはない。断じて、ないに決まっている。

もう道など関係ない。足の裏に感じる傾斜の上へ。前進する。止まっていい道理などない。ひたすら前へ。

「貴弘さん!もうすぐです!」

前に見える木の密度が、薄れていく。陽の光がまぶしくなってきた。

「花梨!!」

一足先に頂上にたどり着いた砌が、叫ぶ。

一気に拡がる視界。そこには・・・。

「か、花梨・・・」

倒れ伏す花梨。砌はすでにそのそばに駆け寄っていた。

花梨の顔色は青い。やはり・・・

「花梨!花梨!」

「花梨!ねえどうしちゃったの?一体何があつたの!?!」

呼びかけても反応しない花梨。力なさげに、砌に体を預けてしまっている。

・・・また俺は、救えないのか・・・?また?

目の前で、大切な人が、消えようとしているのに?俺は・・・そのとき、手に当たる微かな、風。

・・・これは・・・花梨の、吐息？
とっさに花梨の脈をとる。・・・ある。本当に微かだが、確かにある。

花梨は、まだ生きている。

「砌！生きてる！」

俺の声に、砌も花梨の胸に耳を傾ける。

「・・・はい。生きてます・・・」

ほう、と胸を撫で下ろす砌。

「じゃあ、早く一ノ瀬神社に連れて行きましょう！治療をしないと・

・・・」

「いや、ここまで衰弱してしまっているなら、そんな時間はないだろう。早く応急処置をしないと・・・」

「でも、どうやって？」

ここには電気ショックの装置も、栄養剤もない。どうしたら・・・考えるんだ。俺にできること、俺に出来ること、俺にデキルコト・・・

「・・・そうだ。砌！力を貸してくれ」

「え？は、はい！」

いちかバチか、やってみるしかない。

「砌の『気』を、花梨の体の中に送り込む」

「え・・・？」

・・・『気』とは、本来血液と同じように、常に体中を巡っている。それはいうなればエネルギーであり、生命の源だ。

その『気』を、花梨は大量に消費してしまい、生命活動を維持できなくなっている。

・・・ならば、外から『気』を補充してやろう、というわけだ。しかし、この方法はリスクが大きい。

肉体の治療をし、自身の『気』を作り出す力を取り戻させる、一般的な治療とは、順番が逆だ。

つまり、普通なら『内から発する』ものを、『外から加える』こと

になる。

今花梨に必要な量、きっちり、正確にそれだけを加えなければならない。

その量以下だと、花梨の生命活動は回復できないし、以上だと拒絶反応が考えられるし、第一、花梨の場合、また力が暴走しかねない。・・・そして、もう一つ、心配なのは。

山のふもとで感じた、微かな『負の気』。もし花梨が『負の気』に汚染されていたら。

砌の持つ『善の気』と反発作用を起こす可能性がある。

・・・だが、やってみるしかない。

「砌の体にある気を集めてくれ。量の調節は俺が指示する」

「でも・・・」

「ある程度の調整は、術式と同じ要領だ。微調整は、俺がする」

「だったら・・・！貴弘くんが」

「いや、花梨の生命活動を再開させるには、かなりの量の『気』が必要だ。俺の場合、それだけの『気』を集めるだけでも精一杯で、

『気』の調整までしている余裕はない」

「・・・」

砌の顔からは戸惑いが消えない。

「確かに、この方法を今すぐ行うためには、『送りこむ気を用意する人』と『送り込む気の量を常に監視し、調整する人』が必要です」

「命さん・・・」

見かねてか、命が進言する。

「砌、頼む。時間がない」

「・・・花梨・・・」

砌は一度花梨の顔を見ると、頷いた。

「・・・はい。やってみます」

「よし。まずは『気』を集めてくれ」

その間に、もう一度花梨の様子を確認する。・・・まだ大丈夫だ。そして

「・・・非常事態だ。許してくれ」

花梨の鎖骨と鎖骨の間に、右手の人差し指と中指を置く。

「砌、集まったか？」

「はい、いつも術式を扱うときぐらいには」

「よし。じゃあ俺の左手と砌の右手を組んでくれるか？」

向かい合うようにお互いの手を組む。

「そうしたら、『気』を集めつつ、俺に流し込んでくれ」

「・・・ここからが正念場だ。」

花梨の様子を見ながら、花梨に必要な『気』の量を見極めなければならぬ。

左手を通じて、砌から『気』が流れ込んでくる。

「・・・すげえな。この短時間でこんな・・・」

砌から流れてくる『気』はすさまじい量だった。

体質的なものなのだろうが、他の人間は一気にこれほどの『気』を流し込まれたら、ひとたまりもない。

「砌、もう少し流しこむ『気』の量を減らしてくれるか？」

「・・・え？あ、はい。わかりました」

「・・・よし。あとは・・・」

少しずつ、花梨に『気』を流し込んでいく。

「・・・まだ変化はない、か。」

花梨はまだ顔色も青く、脈も弱い。

「・・・もう少し、量を多くしてもいいかな？」

「・・・くしゅん」

そのとき、砌がくしゃみをした。

「・・・あ！？」

と同時に、流れ込んでくる『気』の濁流。

「マズい！！砌！！『気』を止める！！」

「え？・・・あ、え・・・？」

ダメだ、間に合わない！！

『気』の濁流は、俺が開けた通り道をさらに広げ、花梨に流れ込む。

一気に大量の『気』を流し込まれ、ビクンツ、とのけぞる花梨。
慌てて右手を離すが、その分左手を砌から離すのが遅れた。

俺の体内に大量に残る『気』。早く処理しないと俺の体が保たない。
砌はまだモタついていいるし、花梨は論外だ。こんなに大量に流し込んでら、死んでしまう。

すると残るは・・・

「命！！・・・死ぬなよ！！」

「？なんですか貴弘さん？」

俺と命の間にある『気』の供給路に、通常の何倍もの『気』をブチ込む。

「！！ちよつと貴弘さん！？これは・・・あわわ！」

流れこむ異常な量の『気』に抵抗する術がないまま、虚しくクルクルと回り、やがて倒れる命。

「きやあ！命さん！！」

・・・ちよつと可哀想なことした・・・かな？

「・・・ん」

すると、微かな声。

「あ・・・れ、貴弘・・・砌？」

見ると・・・花梨が、目を覚ましていた。

「！！・・・花梨！！」

うれしさのあまり、花梨に抱きつく砌。

「わわ・・・なんなのいったい？私は・・・」

「そりゃこつちのセリフだ。・・・なんで勝手にいなくなったりしたんだ？」

「そうですね花梨さん。もう少しで死んじゃうところだったんですから」

「あ・・・それは・・・」

状況を理解したのか、口ごもる花梨。

「・・・まあ、今は取り合えず一ノ瀬神社に戻ろう。花梨、立てるか？」

「う、うん。・・・よいしょ」

肩を貸して、花梨を立ち上がらせる。

「花梨、大丈夫？もう少し休んでいたほうが・・・」
砌が反対側を支える。

「大丈夫だよ。怪我してるわけじゃないし、すぐ良くなると思うし」

「ああ、花梨の言うとおり、外傷はないようだから、治りは早いと思う。それに、花梨には悪いが、早くここから離れたい」

「え？どうして？」

首をかしげる砌。変わりに立ち直った命が説明する。

「今の騒ぎで、奴らが動き出す可能性があります。早めに移動したほうが良いでしょう」

「え、まさか」

「特にさっきの『気』の波は、奴らを刺激するには十分だ。いままで動きがなかったぶん、いつ動いてもおかしくない」

「・・・」

花梨は黙って俺達のやり取りを聞いている。内容は理解できないはずだが・・・。

「とにかく、急いで移動するぞ。命、周辺の監視、頼むぞ」

四人揃って下山する。そのとき、俺は気づいてしまった。

・・・教文さんは、どこだ？

「良かった。みんな無事だったようだね」

一ノ瀬神社の長い石段の前には、教文さんをはじめ、神主たちが集まっていた。

「大規模な『気』の氾濫が、善井山であったようだね。これから向かおうと思っていたところだよ」

「俺たちはなんとか無事です。善井山に行くなら、奴らがすでにあそこにいる可能性があります。注意しないと」

「わかっています。とりあえず、奴らがいるかだけでも確認してきます」

若い神主の一人が答えると、数人が善井山に向かって歩き出す。

「・・・すいません、ご迷惑かけて」

俺たちの後ろから、自分で歩けるほどに回復した花梨が前に出る。

「・・・花梨君も、無事だったようだね」

「・・・」

「とにかく、花梨は早く私の部屋に行って、休もう？ね」

「そうだね。今日はもうゆっくり休むといい。神主の皆さんには引き続き、通常通り見回りをしていただくということで・・・」

教文さんが、集まっていた神主たちに言う。その様子を見て、俺は命に耳打ちする。

「・・・命。こちらが変わらず、だ。いいな？」

「大丈夫です。わかってますよ」

言うつと、命は近くの茂みに消えた。

「貴弘くん。貴弘くんも中に入りましょうよ」

石段の上から声。俺の仕事はこっちだ。

・・・花梨から、今朝の一連の騒動、その一部始終を説明してもらわないとな。

もし、『邪悪なる存在』となんらかの関係がある場合、本気で『邪悪なる存在』が動き出したのかもしれない。

奴らに対抗する手段。それを一刻も早く考えなくては・・・。

今日の和菓子、生クリームが入った、特製どら焼きだった。

砌が淹れてくれたお茶を飲み、甘いものを食べた花梨は、かなり落ち着いたようだった。

「・・・ごめんね。砌や貴弘にまで迷惑かけちゃって・・・」

「まあ、いいさ。それより、どうして黙って消えたりしたんだ？」

「・・・」

言いにくそうにうつむく花梨。

「貴弘くん、それはもう少し間を置いてから・・・」

花梨の様子を見て、砌が提案する。しかし、花梨自身がその提案に

反対する。

「・・・大丈夫だよ、砌。みんなに心配かけちゃったんだから、ちゃんと説明しないと」

ふう、と一息おくと、花梨は昨日の夜の出来事から、説明をはじめた。

「・・・実は、声が聞こえてきたんだ」

「・・・声？」

いきなり怪しい。というか予想外だ。

「うん。内容はよく覚えていないけど・・・」

「それはこの、砌の部屋で寝ていたときか？」

「そう。どこからともなくというか・・・。聞き覚えのない声だった」

・・・そんな、明らかに幽霊かそれに類するものが近くにいたら、靈感の強い砌が気づきそうなものだが・・・

「いえ、私は特にそういうのは感じませんでしたけど・・・」

「で、でも！本当に聞こえたんだってば！そしたら、急に・・・」

「急に？どうしたんだ？」

「なんだか・・・私が生きているだけで、みんなに迷惑をかけてる気がして・・・。こんな私だったら、このまま夜の闇の中へ、消えてしまったほうが・・・いい気がして・・・」

「花梨・・・」

すすり泣く花梨を、砌がそつ、と抱く。

・・・そして、善井山に行き着いたわけか・・・

きつと、花梨は『自分が消えるにふさわしい場所』を漠然と探して歩き、選んだのだ。

俺たち四人の思い出の地、善井山を。

「・・・なあ花梨。もう一つだけ教えてくれ」

今や完全に泣き出してしまった花梨。だが、俺はこれだけは聞かなくてはならない。

「俺たちが駆けつける直前、つまり花梨の力が暴発する直前、花梨、

教文さんとなにか話してたよな？」

「・・・え？わ、私・・・が？」

困惑する花梨。砌は真意がわからず、探るような視線を向ける。

「いや、いいんだ。してなければ。悪かったな、いろいろ聞いて」
その視線から逃げるように、立ち上がる。

「じゃあ、花梨と砌はゆっくりしとけよ。俺は見回りに行ってくるから」

「あ、貴弘くん・・・」

二人に背を向けると、ふすまを閉める。

・・・覚えていない。

これは花梨の力が発動した反動なのか。たしかに、花梨による昨日の夜の話は、あやふやすぎる。ありえるかもしれない。

しかし、命はあの時、教文さんと花梨がなにか話をしていたと言う話をしていたということ、かなりの近距離にいたはずだ。

その近距離で、花梨の力が発動したら・・・

・・・教文さんに、直接聞いてみるしかない、か。

盛りを過ぎ、すっかり散ったもみじ。その真紅の落葉らくようたちの上に、彼はいた。

教文さんは、丁度善井山を偵察してきた神主たちの報告を、受けている最中だった。

「やはり、先ほどの『気』の影響は各所で出ています」

「でしょうね。私たちも吐き気をもよおしたほどでしたから、靈感の強い人なら、何らかの影響が出て然るべきでしょうね」

「一部の村人は、すでに騒ぎ出しています。・・・隠蔽工作が発覚するのも、時間の問題かもしれませんね・・・」

・・・くそっ！ただでさえ時間がないっていうのに！

自分の無力さが、憎い。

やがて、一通りの報告が終わり、神主たちは本来の持ち場に戻っていく。

「申し訳ないね、荒川くん。待たせてしまつて」

「いえ……。実は、一つ聞きたいことがあります……。」

「?なんでしよう?」

「……しまった。どう聞くか考えてなかった。

『今朝、花梨と話していたでしょ』と聞いたら、命に監視させていたことがバレるし……。

「……実は、花梨が今朝、誰かと話をしていた気がすると言っていたので、誰か心当たりはないか、と」

「いや……。ないですね」

キツパリと否定する教文さん。

「え、そ、そうですか……。あ、あと一つ、いいですか?」

忘れるところだったが、今回の戦いを生き残るための唯一の力ギを見せてくれるように頼まなければ。

「今後の戦いの参考にしたいので、10年前の戦いの記録を、見せてほしいのですが……」

「……残念ですが」

教文さんは、目線を逸らし、言った。

「私も何度も目を通し、今回の参考になるようなところを探してみたのですが……。今回の『邪悪なる存在』は、前回のものとは性質が違うようで、なにも参考にはなりそうにはありませんでした」

「……」

「ですから、あのような記録をあてにするよりは、他にもっと効果的な方法を考えたほうが、合理的だと思いますよ」

「……そうですね、そうします。教文さんも、なにか良い案があったら教えてください」

ここまでハッキリ断られると、これ以上食い下がるのはかえって不自然だ。

では、と教文さんに背を向ける。と同時に、教文さんに見えないように、右手の指をくっ、と曲げた。

近くにいるであろう、命に対する、「来い」という指令だった……

。

墨を、何十にも塗り重ねたような、漆黒の中。

こういうとき、神社という神聖な場所は、昼間の100倍は怪しさを増す。

まあ、陰陽師はこういう場所が主な仕事場なので、慣れっこといえば慣れっこなのだが。

「しかし・・・バレませんか。結界破っちゃって」

「破ってからすぐに張りなおしたから、大丈夫だと思うが・・・。安心はできない。ちゃっちゃと終わすぞ」

・・・話は、今日の昼まで遡る。

——「えええ！！？砌さんを夜這い！？」

「ちげえよ」

ポカツ、と命の頭を殴る。

「今夜、一ノ瀬神社に忍び込む、だ。わかったか？」

「・・・・・・夜這い？」

「・・・まあ、そう解釈できなくもないが・・・」

「ちがうつつに。いいか？今夜、一ノ瀬神社に忍び込むのは、10年前の戦いの記録を見るためだ」

「・・・教文さんを、信用しきれないのですね」

「・・・そうだ」

疑い始めたらきりが無い、と言うが、まさにおととい教文さんに不信任を抱いてから、教文さんの行動は、全てとっていいほど、怪しい。

善井山にいたことをはじめ、そのことを隠そうとしたこと、10年前の資料の閲覧を拒否したこと、神主たちが見回りをしていたことを隠していたこと・・・。

「どう考えても、納得できない。俺たちに何かを隠している、こう考える以外は、な」

そして、俺と命は一ノ瀬神社に忍び込むという、強行手段に出たのである――

再び、夜。

「さて、どこから攻めるか・・・」

事前に、命に一ノ瀬神社の見取り図は推測させてある。

怪しいのは、敷地内に建てられている、納屋、あとは御神体や居間など。

そして、教文さんの寝室。

・・・まずは納屋からだな。

「命、納屋にカギは？」

「かかっています。居間にそのカギがあるはずなので、取ってきてます」

「わかった。先に行ってるぞ」

神社の周辺には砂利が敷いてあるので、足に消音の術式をかけておく。

縁側沿いに、本堂をまわりこむ。

目的の場所は、すぐに見つかった。

建てられてからずいぶん経つのか、板張りの壁には苔が生えている。

・・・命はまだか・・・

ただ待っているのもなんなので、ダメもとで扉に手をかける。

・・・！！

開いた。すんなりと。

カギがあいていたのだ。かかっているはずのカギが。

――あからさまな、罠だ。疑いようもなく。

・・・ばれていた？俺たちが忍び込むことが・・・？

「どうしたのですか？入らないのですか？」

！！！！

「はは、やはりこれはあからさま過ぎましたか。いやはや失敗失敗」
いつから、いた？

「・・・教文さん・・・」

振り向くと、いつもと変わらない教文さんがいた。
いや、ひとつ変わっている。

・・・なにを、持っているんだ？

「くく・・・、あ、これですか？お返ししますよ」

結構大きい。人間の子どもぐらいか？

無造作に投げ捨てられる、なにか。そのなにかが、言った。

「ぐつ！・・・貴弘さん・・・」

・・・！これは！？

「命！！？」

そこには、満身創痍の命が。・・・いつやったんだ！？

「次は、もうちょっと手ごたえのあるヤツを召喚してくださいね？

一撃というのはちよつと・・・」

一撃！？命が？ただの神主に！？

・・・いや、違う。

「貴様、何者だ」

「・・・まったく、実力のないくせに、ハツタリだけは一人前だな

・・・いいだろう。教えてやる。今更だがな。こつちから名乗らん

と気づきもしないとは・・・」

・・・つく、言わせておけば・・・！！

「まあまあ、襲い掛かるのは、俺の正体を聞いてからでも遅くはあるまい。・・・俺は、貴様らの言うところの『邪悪なる存在』だ」

「・・・！！！！」

・・・そんなはずはない。『邪悪なる存在』には・・・。

「そう、『自我がない』。そもそもそういう概念がないのだから当たり前だ。ならばなぜ俺にはあるのか？簡単だよ。この姿を見てわかるだろう？」

・・・そうか、教文さんの自我を・・・！！

「正確には、この人間の脳に『もう一つの自我』を作らせてもらった。いや、案外人間というものは頭がいいのだな。簡単に作れたよ。

スペースも余っていたのでね。使わせてもらった」

「・・・しかし、人格を一から作るとなると、一日二日ではできないはず。少なくとも数年は必要だ。一体いつから？」

「初めからだよ。君が来るずっと前から、だ」

「・・・初めから？初めからといっても、最初の『気』の大量流失から、俺がこの村に来るまで、二日と経っていないぞ？それに、ずっと前からって・・・」

「・・・まさか。」

「・・・まさか、今回「新たに」「黄泉の門」と『邪悪なる存在』が現れたと言うのは・・・」

「くくく・・・、そんな話まだ信じていたのか？そんなもの、貴様に踊っていてもらうための与太話だ。時間稼ぎというものだな。要するに」

「だが、貴様は10年前に封印されたはず！まさか、完全じゃなかったのか！？」

「いや、俺を封印した奴らの思惑通りという意味では、封印は完璧だった。だから10年もの間、俺はなにも出来なかったわけだ。そういう封印だったということだよ」

くつくつく、と笑いを隠さない『邪悪なる存在』。

「・・・そんな、『完全な』封印じゃなかったなんて・・・！！」

「くつくつく・・・。さあて。これだけ話せば十分だろう？」

ヤツの『負の気』が急速に高まっていく。

「冥土の土産には。そうは思わないか？」

—— 恐怖を感じた弱者の取る行動は、「逃走」だ。

しかし、『真の』恐怖を感じた弱者は、違う。

逃げたくても、逃げられない。その恐怖からは、決して逃げられないことを、身体が知ってしまったから。

動いたら、瞬間、殺される。「動かないこと」こそが、もっとも生存することができる、唯一の方法なのだと、知ってしまうのだ。

・・・マズい。マズいマズイマズイマズイ・・・！！このままだっ

たら・・・

死ぬ。

「貴様は、一瞬で死ぬのはつまらない。そう思うだろう？というこ
とは・・・まずは手足から、だな」

一歩、一歩。ゆっくりと近づいてくる。

・・・こんな馬鹿みたいな罠に掛かって死ぬなんて・・・いやだ
！死にたくない！！

「・・・ぐっ！？が、バカな、こんなところで・・・！！」

・・・？なんだ？どうしたんだ？

急に頭を抱え、苦しがる『邪悪なる存在』。

「でしゃばるな！！今更にながでできる・・・！？ぐおお！！」

ついには地面に膝をつく『邪悪なる存在』。高まっていた『負の気』
も霧散していく。

「はあはあ・・・荒川くん、大丈夫かい・・・？」

そのしゃべり方は・・・！

「教文さん！？正気に戻ったのですか！？」

「いや、一時的にヤツから身体の主導権を奪い返したただけだ・・・。
じきにまた奪われる」

「そんな・・・」

苦しい表情をしながら、一歩一歩後退る教文さん。

「わ、私は、出来る限りヤツを善井山にとどめておくつもりだ・・・
！その、間に、ヤツを倒す、準備をしてくれ・・・！」

俺に背を向けると、教文さんは夜の闇に走り出した。

「教文さん！！」

「砌を・・・娘を、頼む！！」

教文さんの姿は、すぐに夜の漆黒の中に、掻き消えていった・・・。

第4章 - 砌 - (前書き)

自作同人ゲーム用に書き下ろしたシナリオです。

制作ブログ↓<http://synthesize2.blog4.fc2.com/>

初めての長編作品なので未熟な点多々ありますが、よろしくお願いします。

第4章 - 砌 -

朝方。『邪悪なる存在』の仕業で、まだ辺りは薄暗い。

一ノ瀬神社の縁側。俺は一晩中、そこで放心していた。

・・・これからどうすれば・・・

一晩の内に、俺はもっとも頼りにしていた味方を失い、もっとも手ごわい敵を手に入れてしまった。

・・・まさか、10年前の戦いで、『邪悪なる存在』を人間の体内に封印していたとは。

確かに、自身の身体を使えば、まず封印先の媒体を準備する必要がないし、封印する対象と、媒介との波長の調整なんかもなくて済む。

教文さんほどの人なら、下手な媒介を使うよりも、より簡単で、より効果的な封印が出来るだろう。

・・・しかし、人間には自我がある。精神がある。

『邪悪なる存在』を半永久的に封印するということは、自らの精神が、半永久的に『邪悪なる存在』に侵食され続ける、ということだ。そんなこと、人間だったら誰だって耐えられない。

だから、今になって、耐えられなくなったのだ。・・・教文さんの精神が。

今回の調査の発端である、あの『気』の大量流失は、その合図だったのだ。

そんなこと知らない俺は、ノコノコ、とこの村に入り、元凶である『邪悪なる存在』に真っ先に話を聞き、その話を信じ、他の村民とはほとんど話をしなかった。

そして、ヤツは、完全に力を取り戻すまで、時間稼ぎに成功した。

・・・俺は、踊らされていただけなのか・・・
横で寝ている命を見る。

俺が新たに供給した『気』によって、その傷は癒えているが・・・
・・・一撃、か。

俺の持ち得る最強の刃、式神・御珠上 命。
その命が、一撃で瀕死だ。ただ突っ込むだけでは、勝てるはずがない。

やはり、10年前の資料が必要だ。

10年前、この地で何がおこったのか、それを知れば、教文さんの最後の言葉も、理解できるだろう。きっと。

——そして、もう一つの、問題は。

この事実を、どうやって他の人たちに伝えるか、だ。

特に、砌にはなんて言えばいいんだ・・・？

「・・・あれ？貴弘くん・・・」
噂をすれば・・・か。

廊下には、まだパジャマ姿の砌が、立っていた。

「おつす。おじゃましてるぞ」

出来るだけ普通どおりにしようとするが、かえっておかしくなってしまう。

「・・・やっぱり、貴弘くんだったんですね」

俺の隣に腰を下ろす砌。

「そんな気がしてたんです。・・・ゆうべから」

「・・・え？もしかして、砌・・・」

「・・・はい。ゆうべ、すごい量の『気』を感じて・・・」

昨日、俺が感じたものと同じものを感じたのか、砌は振るえる手で自らを抱いた。

「・・・すみません。すぐに駆けつけるべきだったのですが・・・」

「いいんだ。俺もすくんじまったほどだし、仕方がない」

「・・・いいえ。それだけじゃなくって・・・その、貴弘くんが戦っている相手を・・・見るのが、怖かったんです・・・」

俺は砌の顔を見る。砌は嫌がるように顔を背けた。

「まさか、知っていたのか・・・？」

すると、砌は顔を背けたまま、ふるふる、と顔を横に振る。

「・・・知っていたら、花梨をここに連れてはきません」

顔をこちらに向ける砌、しかし、まだ目を合わせることはできない。「でも、この数日間、貴弘さんと行動を共にしてきましたから、貴弘くんが感じた違和感は、私も感じていました・・・」

「・・・そうか、砌も気づいていたのか・・・」

だが、それは俺の数倍、重い意味を持つ。なんといっても、教文さんは砌の唯一の肉親なのだ。

「や、つぱり、おじいちゃん、は・・・その、て・・・敵なので・・・しょう、か・・・？」

ついに、目が合う。その瞳からは、光る雫が溢れていた。

「っ・・・」

言葉に詰まる。俺は視線を逸らし、朝靄の中に答えを求めた。

「・・・まだ、わからない」

「・・・え？」

「教文さんは、まだ完全に『邪悪なる存在』に、取り込まれていないかもしれない」

昨日の戦いの最後、一瞬確かに教文さんは自我を取り戻した。

ならば、まだ希望は残されているんじゃないか？

まだ、教文さんを『ヤツ』から取り戻す、希望が。

「それじゃあ・・・」

「ああ。なにか方法があるかもしれない。・・・だが、それを調べるためには、情報が足りなさすぎる」

「・・・十年前の、記録ですね？」

真剣な眼差しで言う砌。しかし、その瞳には少しの戸惑いの色が灯っていた。

「そうだ。どこにあるか、知っているか？」

「・・・私も詳しい場所はわからないのですが・・・」

「・・・砌に教えていない？それはやはり、何か見られたくない情報が含まれているということか？」

「でも、大体的見当はつきます」

「・・・やはり、教文さんの部屋・・・か？」

コクリ、と頷く砌。砌にすら発見されないように隠すには、もうそこしかない。

「今日、教文さんの部屋を調べる。・・・いいか？」

「・・・はい。それがおじいちゃんを助ける、唯一の道・・・なんですよ？」

俺は首を縦に振る。

「・・・真実を知ること。これが、俺たちがしなくてはいけないこと、その第一歩だ。」

「・・・わかりました。私は一度部屋に戻りますから、そのあとにしませんか？花梨も起きたところでしようし・・・」

「俺も一度花月に戻る。ちよつとやらないといけないことがあるんだ。それが終わって、こつちに戻ってきてからにしよう」

俺は腰を上げる。息を吸い込むと、ひんやり、と冷たい風が肺に入ってきた。

「はい。では、また後で」

砌は朝靄がかすむ廊下を、自分の部屋へと戻っていく。

俺は肺に入った息を吐き出しつつ、言った。

「おい。もういい加減いいぞ」

「ぶはーっ！バレてましたか。さすが貴弘さん」

いままで微動だにしなかった命が、ビクン、と反応すると、いきなり息を吐き出した。

「バレてましたかって・・・微動だにしなかったら誰でもわかるぞ・・・寝てても、生き物は呼吸ぐらいする。」

「途中からピタッ、と動かなくなるんだもんな。少し怖かったぞ」「うっ・・・そんな初歩的なことでしたか・・・」

どうして、こいつが『ヤッ』に一撃でやられたかが、さらにわかった気がする。

「荒川さん！ダメじゃないですか！勝手に部屋を抜け出したりしたら！」

花月に戻ってみると、典子さんがカンカンだった。

「まったく。今まで連絡すらないなんて・・・心配したんですよ？」

「すみません、典子さん。・・・そのことで、ちょっと相談があるのですが」

典子さんの顔が驚愕の色に変わる。

「まさか・・・なにかあったのですか？」

その問いに、俺は視線で答える。

・・・ついに、『ヤツ』の居所がわかった。

こちらにも、次の行動に移らなければ。

俺は典子さんに耳打ちする。典子さんは目を見開きながら、聞いていた。

「・・・わかりました。すると、決戦の地は・・・」

「はい。典子さんの想像通りです」

「そうですね・・・。どうして歴史は繰り返すのでしょうか・・・」
哀しそうにつぶやく典子さん。

「それは・・・、俺たちが『人間』だからだろうと思いますよ・・・」
「・・・そうですね・・・」

俺たちのこの戦いも、俺たちの子孫が、再び再現するのだろうか？

いや、こんな戦いは、間違っている。意味のない戦いは、ただの殺戮だ。

止めてやる。俺がこの手で。

こんな殺戮を、俺の子供たちにさせないために。

「典子さん、俺は、戦いますよ」

「・・・私にも、手伝わせてください。村の外で待っている夫と子供たちに、会いたいですから、ね」

「では、さっきお願いしたこと、お願いします。俺は一ノ瀬神社に行ってきますので・・・後のことは、お願いします」

「はい」という声を聞いて、俺は花月を出す。

一ノ瀬神社に眠る十年前の記憶。

これが、俺たちに残された最後の希望だ。

一ノ瀬神社、境内前。

あんなに赤く盛っていた紅葉は、いつの間にかまったくなくなっており、一ノ瀬神社全体に、どことなく活気がない感じがする。

本堂に入ろうとすると、すぐに砌と命を見つけた。

「もぐもぐ、相変わらず、砌さんが用意してくれるお菓子はおいし
いですねえ！」

「・・・ええ、気に入っていただけて光栄です」

いつもと変わらない、自然な光景。その光景は、この数日で多くの
ものが壊れていった中で、その形をとどめている、数少ない、大切
なものだ。

この光景を、壊したくないと自然に思った俺は、向こうが気付くま
で静かに見守ることにした。

「・・・あ！貴弘さん！」

しばらくして、やっと命が俺に気づいた。

「よう、また食っているのか」

「むう、そうやって、人がいつも物を食べてばかりいるような言い
草は、いただけませんね」

命が不満そうに頬を膨らます。

「・・・いただけませんって、実際、お前一ノ瀬神社じゃ食ってばっ
かだろ！」

その様子を見て、くすくす、と笑う砌。

「まあまあ、こっちのもみじ饅頭でも食べて、気を落ち着けてくだ
さい」

そして、さりげなく新たな菓子を持ち出す砌。

「わあ、ありがとうございます！」

・・・鮮やかだ。

いや、この場合、命が単純なだけ・・・か？

「・・・では貴弘くん」

砌はスツ、と立ち上がり、俺に向き直る。

その瞳は、静かに、だが強い決意に満ちていた。

「ご案内します。こちらへ」

「・・・ああ。命、ちよつと行ってくる。そこで待っていてくれ」

「ふあい。まつへまふ（はい。待ってます）」

すでに口の中のキャパシティは越えてしまったのか、両手も駆使しての囲い込み作戦に移っている命。

・・・誰も取るヤツいないぞ？

「貴弘くん？こっちですよ」

見ると、すでに廊下の先まで歩いて行ってしまった砌が、こちらを振り向いている。

「ああ！今行く」

長い廊下を、奥へと進む。

「おじいちゃんの部屋は、居間を挟んで、丁度私の部屋と反対側です」

廊下の突き当りが居間で、その左が砌の部屋だから・・・

「あの部屋か・・・」

他の部屋となんら変わらない、ふすまに手をかける。

「！！！」

突然の違和感に、反射的に手を戻す。

「どうしたのですか？」

「・・・結界だ。これは・・・侵入者がいた場合に、術者に知らせるタイプだな」

油断していた。これぐらいは予想できたのに・・・！

「え？ということは・・・」

「ああ、ここにあるんだろうな。やはり」

・・・だが、この程度の結界なら、俺でも簡単に解けてしまえる。『邪悪なる存在』なら、もっと強力な結界を張れそうなものだが・・・

。。

「とにかく、『解』つと。。。他にはなにも感じられない。。。な」

意を決し、ふすまを開く。

その部屋は、なんの変哲もないただの和室だった。

「。。。なにも感じられないか」

すぐには部屋に入らず、『気』を探ってから中に入る。

「ここが、おじいちゃんの部屋。。。」

「ん？入ったことないのか？」

「いえ、小さいころには何度か入った記憶があるのですが。。。。

小学校二年生ぐらいからは、お互いに入りしなくなりました」

小学校二年生。。。難しい時期が始まる頃だな。

そして。。。そうか、丁度10年前の、あの頃か。

教文さんは、そのときに砌の祖父として、『父親』の変わりになったのだろうか。

。。。それとも、他になにか。。。。

「貴弘くん、あれ。。。」

物思いにふけていた俺の頭に、砌の声が響く。

「ん？どうした？」

見ると、砌は真正面、中央の円卓を指していた。

正確には、その上に乗っているいくつかの冊子を。

「。。。おい、まさか」

「でも、それらしくありませんか？」

それはそうだが。。。あからさますぎるだろ。。。。

俺は考えられるすべての罨がないか、調べる。

「。。。特に罨とかはなさそうだな」

「。。。では、見てみましょう」

俺が言うがはいか、冊子を読み始める砌。

「おい、もっと用心して。。。」

「。。。。。。。」

もう俺の言うことが聞こえないのか、砌は集中して冊子を読んでいる。

・・・特に害はなさそうだし、大丈夫か・・・

俺は他の冊子を手に取り、読み始める。

――題は、『○○集落一帯に起きた異常現象についての記録』。

――19××年9月25日から、10月8日までに起きた、『異常』現象について、その全てを、ここに記そうと思う。

なにぶん真相を知っている人間で、生き残ったのは私だけなので、私の視点でこの記録を残すことになってしまいが、少しでも後世の役に立てたなら、幸いに思う。

――全ては、9月25日までには、すでに始まっていたものと思われる。その日は、日没が例年より異常に早く、二日後には冬至の日と同じ程度にまで、一日の時間が短くなっていた。

また、同じ頃から、夜のうちに村民が姿を消し始めた。

そして、その村民は、村中をくまなく探しても、何度山狩りをしても、発見することはできなかった。

村の自治会長は、私に呪術的な要因が関わっているのではないか、もしそうなら協力してほしいと、私に依頼してきた。

そのころには、私はすでに呪術的な何かの関与に気づき、個人的な調査に乗り出していたが、めばしい情報は得られていなかった。

私は、事態が予想以上に悪化していると判断し、外部の様々な組織にも協力を要請しようとした。

だが・・・出来なかった。すでにこの村は、この地の精霊にすら見放されてしまっていたのだ。

村の周囲には、精霊たちによって強力な結界が、外から張られていた。

――私たちは、被害がこれ以上拡がらないための、生贄にされたのだ。

私たちは、得体の知れない何かと、同じ檻の中に閉じ込められてし

まっていた。

事態を理解した私たちは、一刻も早く原因を突き止めるため、村民を村立学校の体育館に集めた。

そして、その日の夜――

強大な気と共に、『ヤツ』が現れた。（後に調べたのだが、『ヤツ』は異次元空間連結現象『黄泉の門』から現れる鬼『邪悪なる存在』らしい）

巨大な鬼で、体育館前にいた私にも、その姿はハッキリと見えた。いまだ力が完全ではないのか、善井山から動こうとしない。しかし、『ヤツ』は、ここに村民全員がいることを、感知しているようだった。

『ヤツ』がこの事態の原因であることは明らかだ。

しかし、『ヤツ』の『気』の量は想像以上だ。真つ当な手段では勝ち目はない。

かといって、時間があるわけでも、外部からの支援があるわけでもない。

私たちは、どうすればいいんだ――私は悩んだ。

そのとき、妻が――^{かえで}楓が、一つの提案をした。

「一ノ瀬家の秘術を、私に使ってください」

楓の話によると、もともと『気』の保有量が多く、異界のものを憑依させるには適した身体を持つ、一ノ瀬家の娘である楓に『ヤツ』を憑依させ、そしてその楓に一ノ瀬家の秘術を施す、ということだった。

しかし、私は一ノ瀬家の秘術について何も知らない。楓に聞いて見ても「あなたの身体にあるありったけの『気』を、私に流し込んでくれれば、それでよいのです」というばかり。

義父さん――^{かつよし}勝義さんに聞いても何も答えてくれない。ただ自分が不甲斐ない、と嘆いているばかりだった。

一ノ瀬家の秘術とは一体……？――私は妻たちには内緒で、一ノ瀬神社にある古文書をひたすら読みふけた。

だが、その術式について明確に書いてあるものはなく・・・ただ『螢火』というらしい、ということだけわかった。

本来なら、さらに詳しく熟読するべきなのだが、このとき私には時間がなかった。

初めて見たときには、『ヤツ』はすでに身体のをほとんどを顕現していたため、完全な顕現は時間の問題だった。

他に良い考えのない私は、楓の案を使い、『邪悪なる存在』を封印することにした。

その夜・・・私たちは善井山に入り、『ヤツ』と対峙した。

『ヤツ』は——『邪悪なる存在』は、絶対的な『捕食者』だった。異次元からきた、ということが自然に理解できた。こんなものがこの世にいるわけがない。

私たちの住むこの次元よりも、もつと上の異次元の生き物だった。立ちすくむ私の横で、楓と勝義さんが詠唱を始めていた。

楓は『ヤツ』を自分の身体に憑依させるため、勝義さんはその楓を護るために、結界を張っていたのだ。

そして俺が正気を取り戻したのは、楓の悲鳴が聞こえたときだった。目の前に『ヤツ』の姿はなく、憑依に成功したのか、楓は胸を押さえ苦しんでいた。

どうするべきか戸惑っている私の肩に、勝義さんが手を置いた。

「娘に・・・秘術をかけてくれ・・・」

私は混乱した。確かに、今の状況は楓が説明した通りだ。しかし、本当に楓に秘術をかけて大丈夫なのか・・・？

私は迷った。しかし、その間にも苦しみ続ける楓。もう時間がない。私は、楓に自分の持つ全ての『気』を流し込んだ。同時に、一ノ瀬家の秘術の、その真の力を知った。

「ありがとうあなた——砌を、お願いしますね——」
どうしてかはわからないが、楓の身体はまぶしく光りだしたかと思うと——四散した。

突然の事態に私は我を失い、何も考えられず、ただじつ、とそこに

立っているしかなかった。

その間に、勝義さんは『黄泉の門』を閉じるために『気』を使い果たし、この世を去ってしまったていた。

なにもなくなってしまうた野原を見て、呆然としていた私は、あることに気づいた。

私の身体に、何かが入ってくる。

『気』も気力もなくなってしまった私は、その侵入者を拒むことが出来なかった。

——そう、私が楓に術を施すのを躊躇ったばかりに、『ヤツ』の一部に逃げる隙を与えてしまったのだ。

激しい痛みが、私の身体を駆け巡った。私の精神が、侵食されているのがわかった。

長い間、それは続いた。

再び私が正気に戻ったとき、私の身体は、年をとったように軋みをあげるようになってしまっていた。

『ヤツ』が身体に入ったことで、身体に相当な負担がかかったらしい。髪も白髪交じりになっていた。

その後は、記憶があやふやだ。

しかし、私は確かに、生き残った村民全員に術を施し、今回一連の記憶を消した。

そして引退した一ノ瀬神社の前神主として、娘の、砌の祖父として、生きることにした。

——妻を、砌にとって母を殺した私が、父として生きるわけにはいかない。

不幸中の幸いにも、私はもう砌の父としては不自然な身体をしており、ごく自然に村民に受け入れられた。

そして、砌にも——

——この記録は、事態の真相を唯一知る私の義務であり、もう二度とこんなことが起きないように願う、私の願いである。

記録などろくにつけたことのないので、まるで日記のようになって

しまったが・・・そうだな、これは私の懺悔なのかもしれないな・・・

そこまで読み、冊子を閉じる。

・・・そうか、そうだったのか。

これが真実。これが事実。

教文さんは、愛する娘と共に生きるために、父親としての自分を捨てたのか・・・

「貴弘くん、そちらはどうでした？こちらは漢文調の古文書で、まったく読めないのですが・・・」

俺が冊子を閉じたのに気づいたのか、冊子を読んでいた砌が顔を上げた。

「ああ、これが十年前の記録だ・・・と？なにか落ちたぞ？」

砌が持っていた古文書から、封筒がヒラリ、と滑り落ちた。ページとページの間に、挟んであったらしい。

差出人は・・・独立法人 寺社歴史文化研究機構 野口 祐介・・・？

中には・・・紙が数枚入っていた。

「聞き覚えのない名前ですね・・・なんですか？それ」

砌が後ろからのぞき込む。・・・何かの報告書のようなだが・・・

一ノ瀬神社宮司 一ノ瀬 教文様

—— 教文さん、依頼されていた調査の件、一応の結論が出たのでご報告します。

一ノ瀬神社に残されていた、多くの古文書に書かれていたことを要約しまとめると、以下ようになります。

一ノ瀬家に伝わる伝統秘術「螢火」についての中間報告

一ノ瀬家は、もともと霊的な体質で「異界のものに取り付けられやす

い」という特殊体質を持っていた。そのため、古来から「巫女」をその生業としてきた。

神の天啓を司る巫女には、もってこいの体質だからだ。

しかし、その体質には同時に致命的な欠点もあった。

それは、「神と同じくらいの確率で負の属性（霊など）を呼び寄せ、取り付かせてしまうこと」、

そして「その場合、自我を保つことが出来なくなる可能性が高い」ということだ。

一ノ瀬一族の祖先は、そうなった同族を「処理」せざるおえない状況に、過去幾度となく遭遇してきた。

そこで、その同族の者達を、なるべく苦しめないように「処理」できるように考案されたのが、一ノ瀬家に伝わる秘術「ほたるひ蛍火」である。

これは、まず術者の相手を思う気持ち、特に「善の気持ち（信頼や好意など）」を媒介にして、体内のありたつけの「気」を「善の気」に変換する。

そして、体の一点にその気を集中させ、相手に流し込む。

「負の属性（怨霊など）」を憑依させ自身も「負の属性」になり、自我を保てなくなっている相手は、いきなり「善の気」を大量に流し込まれた結果、体内で激しい「負の気」と「善の気」の反発現象を引き起こし一瞬にして肉体を保てなくなる。

結果、体内の大量の「善（負）の気」は高密度のエネルギーとなり、肉体を巻き込んで空中に拡散し、やがて消える。

このときの様子が、まるで蛍の大群が空中を舞っているように見えることから、この術は「蛍火」と呼ばれるようになったといわれる。この術は、その性質と考案理由からもわかるように、術をかける対象が自分と親密な関係であるほど、強い「善の気持ち」を使い、効率的により強力な「善の気」が得られ、相手に痛みを感じさせることなく「処理」することができる。

同時に、体内に大量の「気」を持つ者でないと、流し込める「善の気」の総量が少なくなってしまう、相手を完全に「処理」出来ない。この術は生まれつき強力な「気」を持ち得、「巫女」として最適な体質を持つてしまった一之瀬家の宿命といえるが、その内容ゆえ一族の「秘術」として、決して口外されることはなかったようだ。

—— こんなところですか。理屈・倫理的に、あまり汎用性のない術式だったようで、まさに一ノ瀬家の「秘術」と言えるでしょう。また、この術が考案された正確な時期や、使用された回数などは、現在調査中です。

—— 追伸—— 社会的な立場を考慮して、この調査に関する一切の成果は、公表しないつもりです。ご安心ください。

寺社歴史文化研究四課 研究員 野口 祐介

ガタンッ!!

突然の物音。原因は……

「そ、そんな……実在していたなんて……!!」

報告書の内容に驚いてた砌が、背後の戸棚にかかとをぶつけた音だった。

「一ノ瀬の秘術は……そんな」

砌はかなり混乱している。……確かに衝撃的な内容だったが……。

「でも、前に確か『一ノ瀬家に伝わる呪い』がどうか言っただけだったか？」

「……はい。でもそれは……小さいころにはそうやってたしなめられていたからなんです。「悪いことすると一ノ瀬家に代々伝わる、一撃必殺の呪いをかけちゃうぞ!」って……」

……それは、すごいしなめかただな。

だが、おそらく現代に近づくにつれて、まったく使われなくなっていった「秘術」が、そういう形になって、残ったのだろっな。

「とにかく、大体めぼしいものは見つかったし、砌は少し休んでい
てくれ。あとは俺がやる」

これ以上、砌を混乱させることもないだろう。あの記録も、砌が落
ち着いてから、ゆっくり見せることにしよう。

「で、でも・・・」

「ほらほら、もうそろそろ花梨のどこに行ってやってくれよ。それ
に、少し一人で今後の対策を考えたいんだ」

「・・・わかりました。貴弘くんがそういうなら・・・」

おとなしく自分の部屋に戻ってくれる砌。

静寂に包まれる教文さんの部屋。

・・・これから、どうするか・・・

そんなものは決まっている。『邪悪なる存在』を倒し、『黄泉の門』
を閉じ、平和な日常を取り戻すこと。

それはそうだ。だがしかし・・・『邪悪なる存在』を・・・教文さ
んを倒さない選択肢はないのか？

——いや、わかっている。そんなものはない。今の記録を読んで、
さらに強く思う。こんなことを、もう繰り返してはいけない。

そして、『ヤツ』を倒す方法が、またしても一つしかないことにも、
気付き始めている。

おろかにも、また10年前の状況を再現してしまった俺には、もう
なにもできないのか・・・。

・・・そうだ。記録の通りならば、もう時間がない。

俺は、偶然にも記録どおりの行動を、またしても行ってしまった。
今朝、典子さんに頼んだこと。

それは、神主たちの力を借りて、村民全員を村立学校の体育館に集
めることだった・・・。

体育館には、すでに多くの村民が集まっていた。

誘導には、主に地元の警官や、役場の職員、自治会の役員が行って
いるようだ。

その中に、見覚えのある人物を見つける。向こうも気づいたようだった。

「貴弘さん。どうしたんですか？いきなり村民全員を集めるなんて・・・何かあったんですか？」

「ええ、まあ。こんな短時間で、よくこれだけの人数が集まりましたね」

「・・・はい。避難の理由は、「この村に凶悪な犯罪者が逃げ込んだため」となっています。もっと時間がかかると思いましたが、作物の収穫も盛りが過ぎてますし、みんなおとなしく従ってくれました。・・・しかし、そんなに長くはとどめて置けませんよ？」

体育館に列を作って入っていく村民たち。10年前もこうだったのか・・・？

「はい。どちらにせよ、あと二三日で決着がつくと思います」

「！本当ですか？ならば我々もお手伝いします！」

身を乗り出し、勝利を疑わない神主。

・・・だが、敵が教文さんであることを知ったら、どうだろう。

俺も、もし教文さんが敵であることを知らなかったら、戦いの前の妙な高揚感に身を任せていただろう。

「・・・・・・」

しかし、俺は知ってしまった。この戦いの本当の姿を。

「・・・あの、どうしたのですか？やはりなにか・・・？」

「い、いえ。今後のことは、避難がひと段落ついたら、改めて説明します。それまでは、避難の誘導、よろしく願います」

「はい。まかせてください」

そして、俺は体育館を後にした。

校門から、一度体育館を振り返る。

前代未聞の事態に（10年前の記憶は消されてしまっているため）村民の多くは、不安と同じくらい、どこか好奇心に溢れた、これかなにが起こるのか、という妙な期待を感じているようだった。

風が冷たい。ただでさえ山間の冬は早いのに、『ヤッ』のおかげで

一週間前までは秋真っ盛りだったのに、今ではもう冬だ。
空を見上げると、東の空にあった黒い雨雲が、ゆっくりとこちらに
向かってくるところだった。

一ノ瀬神社に戻り、最初に目に付いたのは、幸せそうにスヤスヤ眠
っている命だった。

・・・なんかム力つくな。

俺は命に気づかれないように近づき、命の両足を脇に抱えるように
持つと、足を踏ん張る。

「・・・せーの、ジャアント・・・」

「・・・なにしてるんですか？」

「・・・いや、なにも」

目覚めたらジャイアントスイングされてました。的ナドツキをし
ようとしたのだが、砌に発見され未遂に終わる。

・・・この弱点は、他人に見られると恥ずかしいってことだな。

「ダメですよ、邪魔しちゃ。命さん気持ちよく眠っているんですか
ら」

「わかってるよ・・・それよりも砌、ちょっと話さないか？」

「え？は、はい」

こう面と向かって話すと、なんだか気恥ずかしいな。

「ここじゃあなんですから、居間に行きましょう」

ジャイアントスイングされそうになっても、まだ起きない命を残し、
居間へ向かう。

「花梨の様子はどうか？」

居間の向かって左側、砌の部屋に花梨がいるはずだった。

「ぐっすり眠っています。やはり一度に『気』を使いすぎただけの
ようです」

・・・そうか、それなら時間はかかるだろうが、寝ていれば元のよ
うに元気になるだろう。

「お茶淹れてきますね」

居間に着くと、砌はすぐに台所に向かっていった。

「・・・さて、どうしようか。」

今後のことについて、砌に話さなければならぬことは山ほどあるのだが・・・

どれも、一体どうやって切り出せば、あまり砌にショックを与えずに済むだろうか。

「・・・その辺考えておくべきだったな。」

だが、時間がない。１０年前の記録通りなら、今夜にでも・・・だから、なるべく早く砌との意思の疎通はしておきたい。

「お待たせしました」

盆に二つの湯飲みをのせた砌が、ふすまを開ける。

「ああ、ありがとう」

向かい合って座る。・・・言わなくては。

「あ、あのさ、砌・・・」

「貴弘くん、その前に、ひとつ聞きたいことがあるのですが」

「え？な、なんだ？」

砌の真剣な眼差しが、俺を貫く。

「貴弘くんは、その・・・この戦いに勝つには、一ノ瀬家の秘術を使うしかない、と考えているのですか？」

「・・・ぐ、それは・・・」

「・・・・・・」

「・・・答えてください」

「・・・そうだ。それしか・・・俺には考え付かない」

昨日の夜、『邪悪なる存在』と対峙したときから。今日１０年前の記録を読んだときから。

俺自身の力ではどうしようもないこと。そして、もう俺たちにはこれしか方法が残されていないことに、気づいてしまった。

「・・・すまない」

俺が、不甲斐ないせいで、こんな・・・

「・・・やはり、わたしは・・・おじいちゃんを・・・一ノ瀬教文

を、こ・・・殺さなければ、ならないのでしょうか」

砌は、もしかしたら教文さんの不審な行動に気づいたとき、こうなることを覚悟していたのかもしれない。

だから一ノ瀬家の秘術『螢火』が実在することを知ったとき、あんなに・・・

「・・・」

「・・・そんな・・・おじいちゃんは、私の、ただ一人の・・・肉親なのに・・・」

俺は、黙ってうつむき、砌の言葉に耳を傾けることしかできない。

「確かに、『邪悪なる存在』は憎いです。・・・でも・・・それがおじいちゃんと一体化しているなんて・・・!!」

俺は、俺は――

「私は、どうしたらいいのでしょうか。それが、わからないんです・・・」

うなだれている砌の表情は見えない。だが、砌は泣いていた。

「私は・・・一人ぼっちなんですか・・・」
がばっ

「・・・え？」

ついに俺は自分の欲求を抑えられず、砌の肩を両手で掴んだ。

「そ、そんな貴弘くん・・・!？」

「・・・俺じゃあ、ダメか？」

言葉にした途端、身体が熱くなってくるのを感じた。

「こうなってしまうまえに防げなかったのは、俺のせいだ。そんな俺が言える言葉じゃないが・・・」

鼓動が信じられないほど速くなる。・・・こ、こうなったらどうにでもなれ!!

すぐ近くにある砌の潤んだ瞳が、俺の視線と重なる。

「俺は、砌が・・・好きだ」

砌の顔が、みるみる赤くなっていく。俺も同じに違いない。

「お、俺が、ずっとそばにい、いるよ・・・」

も、もうだめだ――

自分の身体の熱で、頭が茹で上がってしまう。もうなにも言えない・・・。

砌は、真っ赤に染まって顔を、下に向けている。

「・・・本当ですね？」

「本当！・・・本当だ・・・」

もう、自分で自分がなにを言っているのかわからない。

砌が少し顔を上げ、上目遣いで俺を見る。

「本当じゃなかったら・・・一ノ瀬家に伝わる、一撃必殺の呪いを100万回プレゼント・・・ですよ？」

「・・・うっ。100万回ときたか・・・」

「・・・いいぜ。俺と一緒にいる限り、その秘術をもう二度と使わなくて済むようにしてやるよ」

それが、今俺にできる、精一杯のこと。

「ありがとう、貴弘くん・・・」

そして砌は・・・瞳を閉じた。

すぐ目の前に、砌の白い肌がある。

「・・・ごくり

緊張のあまり喉を鳴らし、ゆっくり顔を近づける。

吸い込まれそうな黒髪、少し上気した頬、柔らかそうな唇・・・

「・・・ん」

唇を触れ合わせるだけの、稚拙なキス。

だがそれは、俺達にとって何ものにも変えがたい、大切な時間だった。

「・・・どれくらいの時間だったのだろうか。

「・・・ん、・・・はあ」

お互いの唇を離し、キスをしている間止めていた呼吸を再開する。

息が続く時間など、たかが知れているだろう。

しかし俺には・・・その何十倍も長い時間を感じられた。

いまだに心臓は早送りで鼓動を続けている。・・・もしかしたらこ

いつのせいかな。

砌は、半ば恍惚とした表情で唇を指でなぞり、今の行為の余韻を確かめている。

しかし、すぐに唇をきゅつ、と結んだ。

「うれしいです、貴弘くん」

砌は立ち上がると、ふすまを開けた。

「・・・私、花梨を、この村の人々を守りたい」

そして、くるりと反転し、俺と視線をあわせる。

「そして、貴方を、守りたい」

「ああ、守ろう。かけがえのない人たちを。俺たちの明日を」
もう、怖いものはない。

俺は、砌と共に、これから長い時間を生き抜いてみせる。

――墨を何十にも塗り重ねたような漆黒の中。

グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

――戦いは、聞く者の耳を貫く咆哮から、始まった。

「行くぞ！！砌！命！」

『ヤツ』が張った結界を破り、一気に『ヤツ』の陣地、善井山に突入する。

結界の向こう。そこは・・・

「・・・ウソだろ」

鬼、鬼、鬼、鬼、ひたすら鬼。

見渡す限りの、鬼の群れだった。

「貴弘さん！！」

すぐさま鬼の第一波攻撃が始まる。

「くそっ！！わが名、貴弘の名において律する！！」

ありったけの『気』を、命に流し込む。

「御珠上 命！！奴らの全てを殲滅せよ！！」

ガアアアアアアアアアア！！！！！！

明確すぎる殺意を命ぜられ、獣と化した命が、俺の背後から鬼の群れへ躍り出る。

そのとき、俺を狙っていた鬼の第一波とすれ違う。

ブシュッ

俺の頭を狙った鬼の牙より、命の爪の方が速かった。

「わが名、貴弘の名において汝の力量制限を解する！！戦え！！！」
切り落とした三つの首が落ちるより速く、命は次の鬼の群れに迫る。
迎え撃つ四匹の鬼は、命がいるべき空間へ、四方から金棒を振り下ろす。

しかし、そこに命はいない。

前後左右ではない。・・・上。

命は少し離れたところに着地すると、四匹の間を吹きぬける。

鬼たちは、金棒を上げる時間さえなかった。

こま切れにされ、ズレ落ちるブロック状の肉。

その肉塊を蹴り、命は死角から次の鬼の射程内に、突入する。

しかし、その奥にはさらに二重に鬼が待ち構えていた。

命は一撃目で首を落とすことを断念。

反応できない手前の鬼の金棒を蹴り、高度を下げる。

二重に待ち伏せしている、奥の鬼たちの足元を吹き抜ける。

グアアアアアアアアアアア！！！！！！

両の足を失い、瞬間空中に漂った鬼の上半身は、すぐに地面へ落下を始める。

しかし、身体が地面へ到達するころには、その首は無かった。

「貴弘さん！砌さん！突破口が開きました！！早く！！」

「よし！行くぞ砌！！」

「で、でも命さんを一人にするわけには・・・」

砌は、さらに襲いくる鬼たちを迎撃する命を振り返る。

「なにも出来ない俺たちがいるほうが、命にとっては迷惑だ・・・
行くぞ！」

「で、ですが、なにか、なにかできるはず・・・」
「・・・!!」

俺は両手で砌の頭を持ち、強引に視線を合わせる。

「砌、いいか。俺たちは必ず、『邪悪なる存在』を倒さなくては
いけない」

砌の瞳に、訴えかける。

「そのためには、お前には『気』を温存しておいてもらわないとい
けないし、俺はそんなお前を護るだけで精一杯だ」

「貴弘さん!! 早く!!」

「俺たちにできることは、せめて命の邪魔にならないことだ」

聞こえる肉を裂く音。今のところは、命が押しているように見える。
だが、俺たちが命の「弱点」である限り、いつ逆転されてもおかし
くない。

「・・・はい。わかりました」

命が鬼たちを引き付けているうちに、俺たちは、なるべく鬼のいな
い場所を選び、移動する。

そのうちにも、命は次々と鬼の頭を落としていく。

・・・持久戦になれば、こちらが不利だ。

それはもちろん、こちらの方が、敵より人数が少ないとか、『気』
の残量が少ないとか、そういうこともあるが。

命に発した「力量制限」の解除。

それはつまり、命に施してあったリミッターを解除するということ。
命にリミッターが施してあったのは、その力が俺にとって制御しき
れないものであったからでもあるが、それだけではない。

今の命の身体は、実は完全なものではない。今の俺のレベルに合わ
せ、命の前の主人、俺のじっちゃんによって、小さな仮の身体にそ
の魂を入れている。

しかし、本質が「霊体」である命は、だからといって持てる力の総
量は変わらない。

だから、身体への負担を軽減するために、出せる力量を制限してい

るのだ。

その状態で命の「力量制限」を解くと。

あまりの力の大きさに耐えられず、身体崩壊と同時に、精神の崩壊が始まる。

・・・すなわち、暴走。

敵味方はおろか、最悪の場合、俺が俺だとも認識できなくなる。

そうならないためにも、持久戦は避けたい。

しかし、命を囲む鬼の数は、一向に減る気配が無い。

・・・こうなったら、イチかバチかだ。

「砌！走るぞ！！」

「え？」

砌の手を取り、走り出す。

全ての鬼の意識が命に向いた隙について、一気に戦闘区域を抜け出す。

「ちょ、ちよつと貴弘くん！一体何を！？」

黒い密林を、前回の記憶を頼りに駆け上がる。

「頂上を目指す！そこに『ヤツ』もいる！！」

「で、でも私たちだけで行っても・・・」

そのとき、俺たちを待ち伏せていたのか、数体の鬼が、俺たちの行く手を阻むように姿を現した。

「・・・くっ！！わが名、貴弘の名において、我、汝の力を欲する！！」

『氣』の消費を抑えるため、出来れば使いたくは無かったが・・・仕方ない。

「汝曰く、『我、主の宝たる姫君を守らん』と！顕現せよ！護風剣・さねとも実朝！！」

俺は右手を前に突き出し、横にゆっくり振る。

すると、そこに暴風と共に、細身の銅剣が現れる。

その暴風に、周りを囲んでいた鬼たちは、たまらず吹き飛ばされてしまう。

——護りの風、主の命に従い参上した。……ってお前貴弘か！
？

銅剣から、直接脳に声が届く。

「え？これって……その剣の声ですか？」

暴風の中鮮明に聞こえる、聞きなれない声に、砌が驚く。

——そうです姫君。私は数ある荒川一門の宝刀の中でも、『護り』に特化した銅剣・実朝と申します。……しかし、貴弘もついに俺を呼び出せるようになったか！。やることはやっているようだなお兄さんの感慨もひとしおだぜ！——

「しゃべるな。『気』が減るだろ」

——もともと少ないんだからかわんねえって。……で？どのくらいヤバいんだ？——

「感じるだろ。この山の頂上だ」

——確かにヤバいな。だがお前の『気』じゃそんなに時間はないぞ？——

「だからしゃべるなって言ってるだろ。……そんな暇はねえって」

——いいぜ。俺も呼び出されたからには、しっかりお前たちを護ってやるよ——

「よし、行くぞ砌！！」

「は、はい！」

俺たちは護りの暴風をまとい、頂上に迫る。

……実朝を顕現させている間、その分命への『気』の供給量が減り続けている。

実朝の力を使い、目の前の障害物をなぎ倒しながら進む。

しかし、なかなか障害物はなくならない。

——ヤバい。もうすぐ『気』が底をつくぞ！——

……くそっ！！間に合え！間に合え！！

——そしてついに、障害物がなくなった。

「……頂上だ」

——すまん貴弘。俺はそろそろ失礼するわ。今度ゆっくりお前の

姫君紹介しろよ！！——

音も無く消えていく銅剣。

「ははは・・・まさかそんなまで呼び出すとはな！」

暗闇からゆっくり姿を現す人影。

「教文さん・・・いや、『邪悪なる存在』！！」

「・・・・・・・・」

砌は、静かに教文さんの身体の中にいる、『邪悪なる存在』を見つめる。

「いやはや、見直したぞ貴弘くん！まさか君がここまでやるとはな。本当はここにたどり着けないんじゃないかと、内心心配していたぞ！！」

ひたすら高笑いする『邪悪なる存在』。

「くくく・・・さあ、ぼうつ、としてないで、さっさと式神を呼び戻したらどうだ？」

・・・そうだ！早く命を呼び出さないと！！

そのために、俺らだけでここまで来たのだ。

俺さえ頂上にたどり着けば、瞬時に命を呼び出すことが出来る。

・・・頼む。無事でいてくれ・・・！！

「わが名、貴弘の名において律する！！御珠上 命！！直ちに我がもとへ参上せよ！！」

時空を裂き、この世の理を捻じ曲げ。

人に使役されし英知が、顕現する。

「——貴弘さん、無事でしたか」

「命！！無事だったんだな！！」

命は俺に応え、その姿を現した。

「——！！！！命さん！！その傷は——！！」

命の身体は、自らの血なのか、または敵の返り血なのか、全身が真っ赤に染まっていた。

「大丈夫です。戦闘に支障はありません・・・それより、すぐに鬼たちが来ます。急いでください」

「そつだぞ貴弘くん。それがこの作戦の弱点だ。わかっているだろう?」

見ると、『邪悪なる存在』が一步一步近づいてきていた。

「ああ、わかつてるよ」

深呼吸をし、身構える。

「・・・ひとつ確認だが」

「・・・!？」

「君が私を倒せなかった場合、私は村民全員を食らい尽くし、完全に元の力を取り戻す」

『ヤツ』は足を止めた。そして、その背後では、漆黒の『負の気』が、なにやら形作り始めていた。

「君が、最後の砦だ。・・・その覚悟はあるかい?」

「・・・『邪悪なる存在』が完全な力を取り戻せば、それこそ手が付けられないだろう。」

多くの土地が焼かれ、多くの人々が焼かれ、多くの生き物たちが焼かれるだろう。

——そしてなにより、俺は生きたい。

砌や、命、花梨・・・そして、心の中のあつみ。

みんなと共に、これからを生きたい。

だから、ここで貴様なんかに負けるわけにはいかない。

「もちろんだ。ここで10年前と同じように・・・いや、10年前果たせなかった人々の無念を、今貴様に思い知らせてやる」

「・・・それでいい」

背後の黒い影は、まさに見上げるばかりの大きさになり、ついに鬼の形を成した。

「・・・これが、『邪悪なる存在』か。

前回と同じように襲いくる、強大なプレッシャー。

あまりの恐怖に、後ずさりしたくなる。

「・・・だが、思いとどまった。

肩に寄せられた、暖かい手。

「・・・貴弘くん、一緒に、行きましょう」

・・・そうだ。俺には砌がいる。

――俺の、姫君が。

「命!!行くぞ!!」

「はい!貴弘さん!!」

「・・・!!」

・・・俺も命も、限界が近い。

「わが名、貴弘の名において、汝の奥義を解放せん!!」

・・・ならば、この奥義に頼るしかない。

「汝、「御魂上」として、その責務を全うせよ!!奥義・御魂之舞
!!」

――本来、『みたまのかみ』とは、『御魂上』と書く。

その名の通り、魂を司る役職だ。

ただ、神様とかそういうものではなく、要するに『御魂上とやりあったら、生きては帰れない（御魂を獲られる）』といった意味の、
いわば二つ名だ。

すなわち、荒川一門の最終兵器。
リーサルウェポン

その『御魂上』の襲名のための絶対条件が、『奥義・御魂之舞』の
習得だ。

もちろん、命も完全な身体で、全力を出して、無事この奥義を習得
した。

・・・逆に言えば、本来この奥義は、命が完全な身体で、全力出さ
なければ使うことが出来ない。

力量制限解除どころの話ではない。確実に、少なくとも、腕一本は
もっていかれる。

「はい。わかりました」

だが、命は承知してくれた。

「・・・すまない」

「なにを謝っているんですか。荒川の実家に戻ったら、ジングスカ
ンパーティーしましょう」

いいですよね？、と命は微笑んだ。

「・・・ああ。もちろん」

「命さん、どうかお気をつけて」

「はい、砌さん・・・では、参ります」

命は身体を前に乗り出したかと思うと、一直線に『邪悪なる存在』に向かつて疾走する。

『邪悪なる存在』が顔を上げた。

「・・・さあ、来い」

黒い衝撃が三つ、地面を駆ける。

命はこれを跳躍することによって回避する。

「小賢しい。跳んだら逃げ場がないだろうに」

『邪悪なる存在』は上空に向かつて、黒い光弾を数発放つ。

しかし命は、自らの落ちる力すら利用し、光弾を切り裂く。

「・・・な、バカな・・・」

「・・・舞います」

命はそのまま、『ヤツ』の上空から、真っ直ぐ墜落する。

「御魂之舞、一之舞！！」

グオオオオオオオオオ！！

バランスを崩しながらも、命の墜落地点に拳を突き出す『邪悪なる存在』。

しかし、命は『ヤツ』の足元から現れた。

ドンッ、ドドドドドドドドドドドドドドンッ！！！！

死角に入り、連続して打撃を与える。その拳には圧縮された『気』が込められていて、敵に触れるたび、弾ける仕組みになっている。

「御魂之舞、二之舞！！」

「な、なめるなあ！！」

『邪悪なる存在』は足元の命めがけ、その巨大な右手を伸ばした。

「砌、次の終舞しまいの後、すぐに走るぞ」

「！！・・・はい」

突然の合図に驚く砌だったが、緊張した面持ちで頷く。

命は地面に両手を着き、両足で伸ばされた右手ごと『邪悪なる存在』を蹴り上げる。

「食らいなさい！！御魂之舞、終舞！！」

自らも地面を蹴り、止めを刺すために『邪悪なる存在』に迫る。

「やるではないか。・・・だが、ここまでだ」

自由の利く左手を動かし、光弾を放つ『邪悪なる存在』。

しかし、その目標は命ではなく・・・。

「くそっ！！展開！！」

俺は瞬時に結界を展開するが、勢いを殺しきれず、弾かれてしまう。

「ぐっ！！ああああ！！」

受身も取れず、俺は地面に打ち付けられる。

「・・・！！貴弘くん！！」

「・・・つぶ。もう一発・・・」

「させません！！」

追いついた命が、二の舞で探り出した弱点を、通り過ぎる瞬間、的確に突く。

グオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

攻撃を受けた『邪悪なる存在』は、地面に墜落する。

一方命は、そのまま奥の林に突っ込んでいった。

「貴弘くん・・・！！」

こちらに駆け寄ってくる砌。

「み、砌。いま・・・だ！！今しかチャンスは、ない・・・！！」

「・・・！！」

ゆっくり立ち上がる砌。しかし、その顔にはまだ若干の迷いがあった。

「頼む、砌。俺は・・・」

ここで言わなければ、きつともう二度と言えないだろう。だから、勢いに任せて、言う。

「俺は・・・砌と一緒に生きたい！！頼む・・・！！」

「・・・もちろん、私もです」

砌は顔を上げると、拳を握り、『気』の開放を始める。

「・・・我、汝を愛しむ我を憎む」

やがて、圧縮され始めた『気』は、濃い紅色のヴェールとなって、砌を包み込む。

一步一步、『邪悪なる存在』に近づく。

強大な『気』の塊の、突然の接近に気づいたのか、ビクンツ、と反応する『邪悪なる存在』。

「がっ！！それ以上近づくな！！」

鬼の黒い影が、一部を触手状に形を変え、砌に迫る。

「・・・・・・・・」

しかし、今や目視できるほどのまで開放され、圧縮された『気』は、『邪悪なる存在』の『気』を上回っていた。

黒き触手は、砌に触れることすらできない。

「・・・我、我を憎む汝を愛す」

砌が、駆ける。

右手に収束された真紅の『気』は、ついに『善の気』に変換され、眩い光を放ち始める。

「く、来るなあ・・・！！！！」

ついに、『邪悪なる存在』は、強大な身体で砌に覆いかぶさった。

「――『螢火』」

一面闇に覆われた漆黒の中。

砌はまっすぐに、右手を突き出した。

「ああああああああああ！！！！！！！！」

漆黒の中へ、真紅の光が、流れ込んだ。

「こ、小娘ええええええ！！」

黒い影はまっすぐ砌を指すが、叶わない。

「ああああああああああああ！！！！！！」

やがて、砌を取り巻く真紅の光は、すべて漆黒に吞まれていった。

しかし、黒い影は、まだ完全には消えない。

「・・・・・・・・！！！」

『氣』の全てを『善の氣』に変換し、『邪悪なる存在』に流し込んだ砌は、もう身を守る術がない。

砌は身を固める。・・・だが、『邪悪なる存在』は、襲い掛かってこなかった。

「・・・・・・・・これでいい」

砌は、顔を上げる。そこに見えたのは・・・間違いなく、教文さんの顔だった。

「・・・・・・・・ありがとう、砌。最後に君に触れられて、私、はしあわ・・・せ、だ・・・」

刹那、砌の頬に触れたのは、人間の手のひらだった。黒い影の内側から、真っ白な光が弾ける。

それは黒い影を巻き込み、光の粒子となって、空に舞い上がり始める。

「・・・・・・・・あり、が・・・とう・・・み・・・」

「・・・・・・・・！！！！お父さん・・・・・・・・！！！！」

瞬間、光は一段と弾け、見えるものの全てを飲み込む。

——世界の全ては、純白に染め上げられた。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・。。。

。。。。

「・・・・・・・・気づいていたのか・・・」

全てが終わった、山の頂上。

「・・・・・・・・ええ。今まで一緒に暮らしてきました・・・。なんとなくでも、気づいちやいますよ」

いまだ夜明け前。光のない山中で、砌の表情は見えない。

「砌・・・・・・・・」

「貴弘さん!!」

背後から呼ぶ声。見ると

「命!!・・・お前それ・・・!!」

命は、両の肘から先が、なかった。

「わ、私は大丈夫です!!それよりも、早く『黄泉の門』を!!」

・・・!!しまった!!『黄泉の門』があつたか!!

しかし、どこだ?近くにあるはずだが、『氣』がまったく感じられない。

早くしないと・・・!!またこの悲劇が繰り返されてしまう・・・

!!!

そのとき、空を切り裂く赤青黄の三つの光条が、地面を穿った。

「わあああ!!・・・あ、あれは!!」

大きく抉られた地面から、三体の式神が身体を起こす。

「前鬼!後鬼!それに・・・天照!!」
アマテラス

「かつかつかつか!!まだまだ詰めが甘いのが、貴弘!!」

上空から、例の狛犬型の式神に乗り、悠々と舞い降りる、『組織』
会長。

「じつちゃん・・・!!」

「ほっほっほ!!お前たちが『ヤツ』を倒したおかげでな、やつと精霊たちが結界をといたんじゃ。まったく、間に合つてよかったぞ」

「そ、そうだ!命が・・・」

立っているだけでも辛そうな命。・・・早く手当てをしないと・・・

「うむ、少し待て」

式神から降り、命の前に正座する。

「・・・貴信さん、お久しぶりです・・・」

「命様、まことに勝手にございますが、先代の主として、正しき御体へ移られますよう、かしこみかしこみ申し上げます」

「・・・はい。お願いします」

命の返事を聞き、じつちゃんは命の額に人差し指と中指をあてる。

「失礼します。では・・・」

じつちゃんが念じ始めると、命は突然じつちゃんの身体に倒れ込んだ。

「み、命!!」

「騒ぐな!! 命様は、荒川本家に祭られている『正しき御体』に戻られただけだ」

・・・『正しき御体』？

「え、じゃあ・・・」

「式神がそんなに簡単に天に召されるか。大丈夫、実家に戻ればまた会える。それより・・・お前にはまだ、やるべきことが残っているだろうが」

——太陽が、漆黒の山陰から、その眩い一片を覗かし始めた。

「——砌」

砌は、村全体を見渡せる、崖の先端にいた。

「貴弘くん、私は・・・」

後ろを向いたままの砌を、後ろから抱く。

「・・・貴弘くん」

「もう言っな。・・・俺にも、背負わせてくれ。その業を」

・・・俺たちは、生き延びることができた。

「俺は、教文さんの代わりとしちゃ役不足だけど・・・」

・・・俺たちは、多くの人々の未来を守ることが出来た。

「だけど・・・だけど、砌のそばに、ずっといることは出来る・・・」

「

「・・・はい」

・・・俺たちにできること。それは、あつみや教文さんの分まで、生きること。輝くこと。

「・・・あ、これは・・・」

空から、小さな光が舞い落ちる。

『螢火』によって空中に巻き上げられた、光の粒子だ。

それは、生まれたばかりの朝日に照らされ、さらに輝きを増してい

た。

・・・教文さんは、こうして光になり、俺たちの記憶に、永遠に残る。

俺たちも、精一杯生きて、輝いていこう。

そして、いつの日か。俺たちの子供の、孫の、子孫の記憶に。

俺たちの生きた光の軌跡が、永遠に残るように。

二人で、いつまでも――

ほたるび
蛍火・・・。。。

墨を何十にも塗り重ねたかのような漆黒の中、それは儚きものが放つ灯火。

――それは、儚きものが生きた、証。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5535e/>

『螢火』

2010年10月10日01時21分発行